

# The Killing Words

Johnny Pinkrose

N.Y. 1990年 10月

「服装？なんだっていいさ。あんただったら、そのままでも十分モテるよ。」

「いや、そういうことじゃなくて…知り合いに見られたくないし、俺だってバレにくい格好がいいんだが…」

「世話のやける奴だな」

エディ・ジャクソンは、目の前に立つジェフ・テイトの後ろに撫で付けた前髪に手を差し入れてかき乱し、前に下ろさせ た。

「ふむ…印象は変わるな」

一歩下がって、ジェフの姿を上から下まで眺める。

「以前、オーダーしたっていうレザーパンツあったろう？今のそんなウールのパンツよりよっぽど似合うよ。ブーツ履いてさ。上はタンクトップにレザージャケットか、適当にワイルドに見えるブルゾン羽織ってりゃいい。どうせ店の中にいたら暑くなるんだから」

「お前は？」

「俺？今と大して変わりゃしないよ」

いつものようにヨークの大きな黒い無地のシャツと、ぴったりとしたブラックジーンズにショートブーツ。少女じみて見える黒く大きな目、肩より少し長く伸びた豊かな巻き毛も、黒に近い暗褐色だ。黒尽くめの中、白いのはシャツの中に着たタンクトップ位のものだろう。

マンハッタンにあって『ゲイのメッカ』とされるクリストファー・ストリートに行ってみたい、と言い出したのはジェフだった。

どうせ行くなら、どちらが多くナンパされるか賭けよう、と提案したのはエディだ。ルックスから言っても有利なのは明らかにジェフなのだが、物慣れてるのはエディの方である。

「そもそもニューヨークに来て2年になろうってのに、行った事がないって…まあ、ストレートって事で通してるんだからしょうがないか」

「サンフランシスコにいた時の相手と、こっちに来てもしばらく続いてたんだから、しょうがないだろ。大体、隠してたのに見抜いてちょっかい掛けてきたのはお前の方じゃないか」

「俺じゃなくたって疑うさ。女遊びの噂もなけりゃ、付き合ってる相手もない。おまけに、その外見だ。うちの店の奴だって、あんたとこの女共だって言ってるだろ？『マンハッタンで、ちょっといいオトコは、みんなゲイだ』って。」

その外見も、尤もなことだった。

黒い真っ直ぐな髪に、氷塊のようにも見えるブルーの瞳。冷たく見える目つきを裏切る、しっかりと肉厚な唇。長身ではないが、胸板は厚く、シャツを着ていても、腕や胸が鍛えられた筋肉で覆われているのが分かる。

膨れっ顔のジェフの顔を見て、エディは小さく笑う。

「蛇の道は蛇さ」

いくら隠そうとしていても、自分を狙っている視線ぐらいは分かるものだ。初めて友人のスコットのアパートで引き合わされた日、ジェフにこっそりと耳打ちしたのはエディだった。

『あんたは、後ろに入れるのが好きなんだろ？』

その時のジェフの慌てふためいた様子を思い出し、エディはくくっと喉を鳴らして笑った。

『ゲイだとバレても特に困らない立場』と、『バレたが最後確実に出世に響く立場』というものがある。ジェフは明らかな後者だった。

住いのドアマンにバレたくない、という理由から、予めジェフのレザーパンツはエディのアパートに預けられた。整髪料で整えられていない髪を後ろで一つに束ねてゴムでしばり、エディのアパートへ向かった。

果たして、グリニッジヴィレッジには似つかわしくない濃紺のサブが、エディのアパート前に到着した。

§

§

2人が入ったのは、さほど大きくも過激でもないバーのひとつだった。

バーテンたちのいるスペースを囲むように、コの字型に作られたカウンター。奥には、サロンのようにソファとテーブルの席が幾つかある。広くはないが、ダンスフロアが入り口のすぐ脇に。更に、テーブル席とカウンターを繋ぐように、背の高い丸い天板のついた止まり木が点在する。

相手を探す者は、ダンスフロアか止まり木にいる。一部壁際に佇んでいるのは、プロと思しき男達だ。

顔を近くに寄せなければ相手の声が聞こえない、大音量のダンスミュージックが流れる中、男ばかりがいる様は壮観だった。彼らの熱気、汗に混じって、人の動きと共に香るフレグランス。一歩進んだ途端、気圧されたようなジェフの背中をエディが押した。

「俺は先に踊ってるよ。あんたはカウンターにでもいりゃいい。勝手に虫が…いや蝶々かな？ 沢山寄ってくるぜ。じゃ、Here we go(行くぜ)」

ジェフをバーカウンターの方へ押し出し、エディはすでに数人が踊っているダンスフロアに入っていく。

体をビートに委ねていると、アルコールも飲んでいないのに、軽い高揚感がわく。何も考えず、ただ体を動かしている事が心地よかった。

軽く閉じていた目を開くと、ちょうどエディの視界に入る位置で、スツールで酒を飲むジェフの姿があった。早速、口髭をたくわえた亜麻色の髪青年が隣に佇み、ジェフに何か話しかけている。ジェフもまんざらではない様子だったが、すぐに相手の方が肩をすくめて立ち去ってしまった。

と、踊り続けていたエディの腰に、誰かが手を回してきた。

「Sis(お嬢さん)、一緒に踊ろうぜ」

声はエディの耳元に心地よく響く。相手の腰が背後から押し付けられ、弦楽器のユニゾンのように同じ動きをする。

エディは拒否しなかった。相手を邪魔に感じることなく踊り続ける。しかし、このままだと相手にも気の毒だ。曲が終ったタイミングで振り返る。

「次の曲は別のお相手を探してくれよ」

呆気にとられていた相手は、明るいブラウンの髪をした見るからにマッチョな男だった。

(あんなのにつきあったら、壊されちまう)

喉も渴いたところだったのでカウンターへ戻り、ジェフの隣に体を滑り込ませる。

「コロナを」

「さっきの奴は、振ってもよかったのか？」

ジェフの声が少し不機嫌そうだった。

「ちょっと！ 相手がいるんなら、早くそう言ってよ！」

『いかにも』な赤毛の青年が、尻を振りながらジェフの傍を離れていった。

「あんたこそ。良かったのか？さっきの子、振っちまって」

コロナの壇に櫛切りのライムを押し込みながら、エディは訊ねた。つい笑ってしまうのは、隠し切れない。

「タイプじゃない。ああいう露骨なクイーン(女形)は。」

ジェフは平常心を保とうとしているのだろうが、やはり、微かに拗ねているように聞こえる。エディには、それが面白くて仕方がなかった。コロナの中身を半分ほど空けて、席を立ち上がる。

「もう少し踊ってくるよ。1対2で負けてるからさ」

静かに座っているよりも、踊っている方が自分が魅力的に見える事を、エディは経験上知っていた。

ジェフに目配せをし、再びダンスフロアに向かった。通路を縫うように歩く途中、尻を掴もうとする手を振り払い、再び流れてくる音の洪水に身を任せる。ビールで熱を冷ましたつもりだったが、人の熱気で、すぐに暑さが戻ってくる。

また、リズムに合わせて揺れるエディの腰を、誰かの両手が掴んだ。まるでバレエのリフトでもするかのように、力強く相手はエディを自分の方に向かせる。

「さっきの奴は、タイプじゃなかったみたいだな」

今度は浅黒いブルネットの男だった。ヘイゼルの瞳が、照明によってくるくると色を変える。やはり、一人目の男と同じように腰を密着させてくる。逃れようにもエディのをつかんだ手は、びくともしない。細く見えるが、実はかなり鍛えているであろう、筋肉質の体をしている。両手が腰から尻の方に回り、がっしりと掴んで揺らそうとしていた。

「こんな可愛いケツ、見せ付ける方が悪い…」

ジェフより少し背が高い。6フィートぐらいだろうか。エディの耳元で、笑いながら囁く声が響く。

確かに一人目よりは、好みのタイプではある。しかし、今日はジェフが一緒なのだ。このままだと体が反応し、相手に悟られてしまう。曲はまだ、1コーラス目が終わろうとしている辺りだろう。

(まずいな。どうやって逃げる?)

相手の手が動いた。更に下がり軽く開いた両足を裂くように、脚の付け根の内側へ入ってきた。指の動きに、思わず体がびくりと震える。

「ヤサはどこ？」

問いかけを無視して笑顔を返す。が、いつまでもたせられるか、自信がなくなってきた。

「悪いな。こいつは俺の予約済みなんだ。好き勝手するんで、困ってたんだよ」

「ジェフ！」

(天の助けだ…)

ジェフが、エディの両肩に手を掛けていた。と、下半身の束縛が解かれ、男は小さく舌打ちをして体を離れた。

「飽きたらいつでも来いよ！」

諦めは、悪いようだ。

「エディ、行くぞ！」

エディが安堵の溜め息をついたのも束の間、ジェフが彼の腕を掴んで出口へ向かおうとした。まさに、ずかずかと音をたてそうな大股で。明らかに怒っている。

半ば、引き摺られるようにして歩くエディの顔は、笑っていた。

店からエディのアパートまでは、歩いてもたかが知れている。クリストファー・ストリートを出るまでは腕を掴まれ引き摺られていたが、さすがに途中でジェフの方から手を離れた。

エディは、まだ笑っていた。こちらを向かなくても、ジェフが不貞腐れているのは、これまでの付き合い

で分かっている。

「あのクイーン以降、何人に声掛けられた？」

「3人」

口笛を吹いて冷やかしたが、無視された。

二人は無言で歩き続けた。相変わらず、ジェフは大腿に歩いている。

「なあ、ジェフ。怒ってるのか？さっきは助かったよ。流石にやばかった」

笑いを堪えつつ聞いてみるが、やはり無視だ。

無言のままジェフは、合鍵でエディのアパートの入り口の鍵を開けた。彼や、その同僚で眼科医のクリスの住むコンドミニアムと違い、ドアマンやセキュリティなどいない。入り口で住人の部屋のブザーを適当に押して開けて貰うか、自分で鍵を開けるか、だ。

きしむ階段を上がり、エディの部屋の前まで来ると、さらに鍵を3つ続けて開ける、1室に鍵が1つというのは、この街では無用心を通り越して、無謀と言われる。

勝手知ったるもので、ジェフは部屋の主であるエディを置き去りにしてリビングの灯りをつけ、奥の寝室に入って行った。エディは、その様子をまだ面白がりながらキッチンへ行き、炭酸ミネラルウォーターを取り出して飲み始めた。

ジェフは、本当に自分の感情に素直だ。ただし、その本来の姿を見せるのは、限られた人間の前だけであったが。エディも、その限られた人間の中に含まれている。だからこそ、気を遣う事なく付き合えるのだ。

が、そのジェフがエディのことをどう捉えているかは、また別の話である。

「エディ！」

刺を含んだジェフの声がエディを呼ぶ。寝室に來い、と言う事らしい。汗を含んだシャツを脱いで、ランドリーバスケットに放り込み、エディは寝室へ足を踏み入れた。

「灯りぐらいつけるよ…え!？」

暗闇に目が慣れる前に、両腕が掴まれた。金属と、ゴムの軋む音がする。

「ちょっと待ってジェフ、それは…」

「そう。俺の仕事道具だよ」

後ろ手に押えられたエディの両腕は、病院で使われる太いゴムチューブと、鉗型のクリップで縛られた状態だった。

「あんた、そんな趣味あったっけ？」

「うるさいな。罰ゲームだよ」

「罰？何の？」

後ろ手に縛られたまま、エディはベッドの上に突き転がされ、ジーンズも引き下ろされた。

「今夜の賭け。俺の勝ちだろ？」

「ああ、その事ね…」

ジェフの言い分は一応尤もなので、素直に転がされたままになった。ジェフも服を脱いでいるのだろう、衣擦れと、重いレザーがチェーンを伴って床へ落ちる音がする。

エディの肩越しにジェフが手を着き、新たな負荷が掛かったベッドのスプリングが悲鳴を上げ、エディの体を揺らす。

と、剥き出しの下半身に挿入された指の感触は、これまでに体に馴染んだものと異なっていた。

「ジェフ…何してるの？」

体の中で暴れる指に息を乱しながら、エディは訊ねた。

「俺の一番の仕事道具。コンドームよりは、使い勝手いいぜ」

まったく悪びれた様子はない。それどころか、今までにない指の暴れ様に、エディは声を我慢する事を放棄した。体を波打たせるように乱れていても、それを見ている筈のジェフは何も言わない。手術用手袋をした指を更にもう1本挿入し、内部で蠢かせる。

一度放出させればエディの体が楽になる事は、ジェフとて知っている。が、そうならないオルガスムもまた存在する事も。

「ジェフ…頼むから…」

時折あがる喘ぎ声の合間を縫い、ジェフの意図を悟ったエディは哀願の声を上げた。

「駄目だ」

ジェフの体が覆い被さって来た。

「俺が見てる前で、ほかの奴に触られて喜んでた罰だ」

耳元で囁かれた言葉は、怒りを含んでいても、最大の愛の言葉とも言えた。

「あんたが婦人科医じゃなくて良かったよ…」

精一杯の強がりをつき出しながら、エディは首を無理に捻り、ジェフの唇を求めた。

「そうだな。俺は外科医だから、今からお前にメスを突き立てるんだ」

「よう、ジェフ。あんたも疲れた顔してんな。今日は、何？」

スコット・ロッケンフィールドは、目元をくしゃりとさせて同僚のジェフを見下ろす。

ハイスクールのカフェテリアを思わせる、安っぽい樹脂製の椅子に座ったジェフは、眉間をマッサージしていた。

「さっきまで胃のバイパス手術で、ひたすら裁縫」

スコットも、紙コップに入ったコーヒーをすすりながら、ジェフの前に腰を下ろす。

「まだ俺の方がましか。スキニー（摂食障害）と婆さんの配管工事だけだからな（高カロリー輸液の管を挿入、固定）」

患者やその家族が立ち入る事のない、病院スタッフ専用の休憩室である。院内スタッフのみの気安さから、会話の中身やボキャブラリーは残酷かつシニカルなものになりがちだった。さすがに良識の最後の砦、守秘義務を犯すような事はなかったが。

「なあ、ちょっと聞きたいんだが、いいか？」

ふいに思いついたように、ジェフがスコットに向かって指で小さく手招きをする。こういう時は、話の詳細はどうであれ、エディとの関係である事は、スコットも心得ていた。

「こないだ、その、『あの時』にエディの手を縛るのに、鉗子とチューブを使ったんだよ」

返事の代わりに、スコットは大きな目を白黒させてむせた。笑いを堪えるために口を閉じていたが、咳も我慢するはめに陥り、顔も真っ赤になっていた。

「で、エディに俺が婦人科医でなくて良かったって言われたんだけど…どう思う？」

「どう思うって、あんた…」

スコットは予想は出来たが、どうこの場で説明したものか迷っているうちに、視界に見覚えのある人物が侵入してきた。

「すぐに回答してくれそうな人がお出ましになったぜ。あんたのご近所さん」

「おや、お二人揃って。眼精疲労なら、ビタミン注射でもする？」

半ば笑いながら近づいて来たのは、ジェフと同じコンドミニウムに住む、クリス・デ・ガーモだった。

「じゃあジェフ。俺、行くよ。もうすぐ巡回なんだ」

スコットは立ち上がり、クリスに席を譲る。巡回は、嘘ではない。しかし、その場を立ち去る言い訳でもあった。

スコットの大学時代からの友人エディは、それほどクリスを苦手としていない様だったが、正直な所、スコットはクリスと時間を共有したいとは思わなかった。学生時代のエディも危なっかしい所があったのだが、クリスは違う。クリス自身が危険に感じられるのだ。

何より、彼の長年のガールフレンド、アネットがクリスを嫌っている、というのが最大の理由だった。

スコットが立ち去った後の椅子に、クリスは優雅に腰を下ろして長い脚を組む。まるで、猫脚のソファにでも腰掛けたかのように。ジェフには、そう感じられた。

実質上、恋人と言っていいエディには自分の素をそのまま出せるのだが、1フロア上の住人、このクリスにはそうもいかなかった。彼もやはり、ジェフの性癖をすぐに見抜いた人間である。さらにその行動は、ジェフにとっては理解の範囲をこえていた。一番近いのは、猫かもしれない。いや、まだ猫の方が理解出来る、

とジェフは思う。しかし、どこか惹かれてしまう。我が儘な猫に振り回されるのは、決して嫌いではない。「何か面白い話してたんだろ？スコットがずいぶんと楽しそうに見えたけど」

クリスは眼科医にふさわしく、おそろしく視力が良い。先刻のジェフとスコットとのやり取りを、遠目に見ていたのだろう。

ジェフは、先のスコットの時と同じく指でクリスの顔を招き寄せ、エディとの行為で手を拘束するのにチューブと鉗子を使い、コンドームの代わりに手術用の手袋を使った事、そしてエディの言葉を伝えた。スコットに手袋の事を言わなかったのは、クリスと違って――彼もまたカムアウトしていないが――スコットが完璧なストレートだからだ。

クリスは一瞬呆けた顔をしたが、すぐに俯いた。恐らくは笑いを堪えているのだろう。両肩が小刻みに震えている。「ああ、可笑しい！ジェフ、あんたのそういう鈍感な所が好きだね、俺は」

「だから、どういう意味だよ」

「ああ、俺達はまず使わないからな。婦人科に知り合いはいないか？彼女とのセックスに仕事道具使った事あるかって聞いてみな。絶対、何人かヒットするぜ」

クリスは、よく喋るほうだ。しかし、その話し方は囁くようなものだ。それが、この場では都合が良かった。「残念ながらいいない」

「ヒントをやるよ。それを使えば、フィストも出来るようになるかもな」

クリスの言葉にジェフは絶句し、次に茹でたてのロブスターのように顔を真っ赤にした。

と、院内放送で自分の名前が呼ばれたのに気づいたジェフは、急いで立ち上がった。

「ああ、ジェフ。実家からワインが届いたんだ。今夜、おすそ分けに持って行くよ」

「今夜はエディが夕食を作りに来てくれるから、伝えとくよ」

「婦人科の奴に言って、くすねて持って行こうか？『あれ』」

「No!」

思わず大きな声が出た。

「いらない」

もう一度小さな声で言い直し、休憩室を後にした。職員やナースが忙しく行き交う廊下を歩きながら、ジェフは少しだけ考えてみた。もし本当に使ったら、どうなるだろうか、と。

「クリスが？別に構わないさ。どうせ、余るぐらいだろうからな」

ジェフ宅のキッチンである。

週2回やって来る家政婦の女性以外、普段ここを正しく使用しているのはエディだけであろう。ほぼ毎日使われているのは、コーヒーマーカーと、食器洗浄器ぐらいのものだ。

ダイニングテーブルとシンクとの間に設置されたカウンターは、ずいぶんと古いものだったが、天板は大理石で出来ている。その気になれば、ペストリーや本格的なピザの生地を作ることも可能だろう。が、さすがに、仕事終わりにそこまでの気力や体力は、エディにもない。市販のフラワートルティーヤに、茹でた鶏肉を裂いたものを黙々と包んでいた。

「ジェフ、その耐熱皿にオリーブオイル塗っというて」

天板で作業をしつつジェフに指示を出し、火にかけたソースパンとスープの様子を見る。

「あと、これ混ぜというて。いつもの要領でね」

まだサラダスピナーを回しているジェフに、ボールに入った材料を示す。レモンと刻んだニンニク、塩、胡椒が入っている。

料理にはからっきし疎いジェフにサラダを任せ、巻き終わったトルティーヤを耐熱皿に並べる。背後のソースパンの火を止めて手元に引き寄せ、トマトソースの味見をする。



客が一人来るからといって、作業に変わりが出る訳でもない。さほど金に困っている訳ではないが、エディの収入では毎日外食という訳にはいかない。デリで買って帰るか、冷凍食品が続くことになる。幸い、特に凝ったものでなければ、エディは自炊は苦にならなかった。ただ、一人であればワンプレート・ディナーで済ませてしまうのだが、人と一緒となると、最低限の体裁は整えることになる。

今日は、チキン・エンチラーダとレンズ豆のスープ、ギリシャ風サラダ、デザートには最近グラマシーに出来た洋菓子店で、マーブル・チーズ・ケーキを買ってきた。濃厚で美味しい、と勤務先である薬局の同僚から聞いていた。

大きめの耐熱皿をオープンに放り込み、やっとエディは一息ついた。ジェフもエディの指示通り、サラダを仕上げている。

と、玄関でブザーが鳴った。階上の住人のお出ましいらしい。主であるジェフが出迎えに行っている間に、散らかった洗いを軽く濯いで食器洗浄器に放り込む。クリスはワインを持って来る、とジェフは言っていた。

(何か、つまみぐらい作るか…)

エディは天板下の戸棚を開き、オイルサーディンの缶詰を取り出し、バゲットをスライスし始めた。

ジェフといると、つい、まめに世話を焼いてしまう自分の気持ちまでは、エディは全く自覚出来ていなかった。

クリスが持参したワインは、彼の遠縁が経営しているワイナリーで作られた、ソーヴィニヨン・ブランのテーブルワインだった。来客用になら、たまに購入する事もあるが、普段に飲むものとして、わざわざ購入するのは億劫になるもの。つい短絡的に、ウイスキーやジン、ウォッカを優先してしまうのは、エディもジェフと同様だった。対照的に、曾祖父がヨーロッパからの移民だったというクリスは、実家の影響か、ほぼワインしか飲まない。

既にクリスの持参したワインも2本目が空こうとしている。

思ったよりも腹にたまった食事のため、チーズケーキの存在は無視され、リビングのキャビネットに収まっていたボンベイサファイアのボトルがテーブルに鎮座していた。

「本当にクスコを持って来られたら、どうしようかと思ってたよ」

「止めてくれよ。俺を殺す気か？あんたは」

クスコ。クリスが昼間に大笑いした対象物である。

「でも、二人とも使ったことぐらいあるだろ？」

クリスは平然と言っている。

「え？」

聞かれた二人は同じ反応を示した。

男性が使うことは、まずあり得ないこの医療器具は、女性器内部の検査に使われるものだ。鳥のくちばしのような形状をし、挿入後に傘のように開くことで、入り口をより大きく広げてくれる。だから、『フィストも出来るようになる』とクリスが語った訳だ。

「だから、実習の時の話さ。エディ、あんたも確かスコットの大学時代の友達だったら、経験あるだろ？なんで医者になるの止めたんだ？」出会ってから、何度目かの同じ質問だ。

エディは、ミッドタウンにある薬局で、薬剤師として勤務している。

ミッドタウンには多くの企業が集まると同様、大病院から個人経営のクリニックに至るまで、医療施設も多い。その処方箋を扱う薬局や、医療品供給所も同じく多数ある。

エディが、スコットと同じメディカルスクールにいたという事は、ほんの数人しか知らない事だ。それでも、何故医師になるのを止めたのかという点は質問しない、というのが不文律になっていた。クリスを

除いて。今までは無視してきたのだが。

「ま、早く言えば落ちこぼれかな」

自嘲気味に、エディは答えた、あながち間違いではないが、正解ではない。

「ジェフと違って、俺は女もいけるし。節操なしに遊び過ぎたんだよ。ま、節操ないのは今も変わらないから、こないだも…」

「俺だって、両方いける」ジェフが反論する。しかし信憑性は薄い。彼が女性と最後にデートしたのは、彼が出身地のシアトルからサンフランシスコに移った時だというのだから。

「俺は、どっちだっていいねえ。楽しませてくれるんなら」にこやかに、きっぱりと発言したのはクリスだった。

「どのみち、あと何年かしたら、実家に戻って結婚するのは決まってるし」

再びエディとジェフが、驚きの視線をクリスに向ける。

「驚くことないだろう？向こうにフィアンセがいるんだ。まだ2回しか会ったことないけどね。お楽しみは、こっちにいる間だけの期間限定。今の病院にも結構いるぜ。似たようなのが」

クリスは、ニヤニヤ笑っている。

「眼科部長のバーンスタイン。彼も『そう』だけ」

ジェフが、グラスを満たした酒と同じ色の目を見開く。

彼らの内輪話には、エディは全く興味がなかった。が、それを話しているクリス本人に、改めて興味を持った。正確には、警戒心を。

「嘘だろ？大体、なんで分かったんだ？」

「先週、彼と寝たからね」

「お前な…」

「会員制のバーでさ。当然お高い代わりに秘密厳守のね。偶然ばったり会ったんだよ。話しかけて来たから、口止め料の交渉かと思ったら、口説いてきたんだよ。ま、その時1回こっきりだけどね」

「確か、彼は結婚してたよな」

「してるよ。来年大学に入る娘と、ハイスクールに入ったばかりの息子もいる」

「家族思いで有名だったろ？彼は」

「そんな奴ら、いくらだっているさ」

ジェフは、まだ信じ難い、と言った表情をしているが、クリスはあっけらかんとしたものだ。彼もまた、上司と同じ道を歩もうとしている。それは、エディにとってもまた、よく知ったものだ。

「じゃ、俺はそろそろ失礼するよ。明日朝一番に予約が入ってるんでね。エディ、ディナーごちそうさま。ジェフ、クスコ要りようだったら言ってくれ。話つけとくから」

クリスにつられ、ジェフとエディも立ち上がった。

玄関まで送る際、ジェフの腕はエディの腰に回されていた。

「あ、エディ。マイクから伝言。明日朝、取りに行くってさ」

ドアノブに手を掛ける前、振り返ったクリスが目を細め、エディの腰を抱いているジェフの腕をしっかりと視界に捉えたのを、エディは見逃さなかった。

「俺にはまだ、あそこまでは割り切れないな…」

ドアが閉まるなり呟いたジェフが、エディの腰にまわした手に力を入れた。

「でも親から何か言って来ないか？」

「やれ婆さんの誕生日だの、感謝祭の日に帰って来れないかだの、何か考えてそうだけどな」

テーブルを片付けだしたエディを、ジェフも手伝う。

「でも気は進まないな。相手を騙してまで身を固めるなんてな…」

ジェフはため息をついた。

「立場上は、そうも言えなくなってくるぜ。あまりに何もないと疑われるのは確実だろ？それともカムアウトするか？」

エディの言い方は、ジェフには冷たいと思われただろう。エディとてカムアウトしていないのは同じだが、店の同僚やその紹介など、女とのデートも何度となくあるのは同僚も承知している。『まだ縛られたくない』という、言葉の効力はあった。第一、万が一ばれたところで、出世などには無関係であるところが一番大きい。

「そういう、お前の所は？」

自分の結論を出したくないジェフが、エディにお鉢を回す。

「さあね。大学の専攻を変えた時点で、親父の事業は弟が継ぐことになったみたいだし。俺は家族の中でも『異質』だからな」

テキサスの小規模都市の出身のエディの実家は、父親が幾つかのアミューズメント施設や飲食店を経営していた。僅かながら、生前相続の財産や、信託財産もある。本来なら、ジェフやクリスとも変わらない生活も可能だった。しかし――

「異質、ね。素直にそれを認めて受け入れるか、本質を見えない振りして無理やり世間に合わせるか…」

リビングに戻ったジェフが、グラスに再び青い酒を満たして、ごちた。ジェフに促され、エディも隣に腰を下ろす。

「世間に合わせて周りを騙すんなら、徹底的にやって貰いたいもんだな。分かった時に嫌な気分になるのは家族の方だ」

「分かってるよ」

ジェフがエディの手を取り、自分の膝の上に乗せた。強く握ってくるその手を、エディも握り返す。

「今夜は泊まっていいか？」

「車で来たんだろ？当たり前だ」

ジェフが、もう一度エディの手を強く握った。

『エディ、聞いてちょうだい。パパの書斎から、こんな写真とビデオが…』

『ああ、でもパパには何も言わないで頂戴。パパを責めたら駄目よ。ママが我慢すればいいだけよ』

『親戚の中でも、何のトラブルもないのは、うちだけなのよ』

『おお、チャーリーにもいわないで。あなただから大丈夫だろうと思って言ったのよ。あなたはチャーリーとは違う(ママ、言わないよ。チャーリーは、きっと受け止めきれない。でも、パパは本当にゲイなの?)』

『パパは違うって言ってるけど…いいのよ。ママがしっかりしてさえいればいいんだから』

(ママ、大丈夫だよ。俺はパパにつらく当たったりしない。だって、もしパパが、俺が全部知ってるって分かったら(夢かよ…))

闇の中、聞こえてくるのは時計の音と、隣で眠るジェフの寝息だけだ。

エディの父親は、いわゆる『隠れゲイ』だった。本人は母に対して否定していたようだが、エディが母親から見せられた父の『宝物』は、明らかに特殊な店でしか扱っていないものだった、さもなければ、プライベートな撮影会で入手したものか。後者であったほうが、更に疑惑を確固たるものにしただろう。

母がエディにだけ、そういう相談をしてきた理由は明らかだった。エディのクラスメートのせいだ。ハイスクールの同じクラスに、ゲイであることをカミングアウトした者がいた。当然、その告白を境に周囲の態度は一変し、二つに分かれた。エディは、数少ない容認派の一人だった。かといって、当時は自身もストレートだと思っていた上、特にゲイに理解があった訳ではない。ただ、ライフスタイルの自由は尊重

すべきだ、と思ったに過ぎない。

対照的に、噂を聞いた弟のチャーリーは『気持ち悪い』と公言していたので、母親が、父の事は黙っている、というのは頷けた。しかし、話を聞いた父までも『気持ち悪い』、更には『あんなのを認めるなんて、お前も変わった奴だ』とエディに言ったのには驚かされた。

その父が、『隠れゲイ』だったのだ。ショックというより、笑い話にしかならなかった。  
(見つかるような所へそんな物を放っておく間抜け親父に、そんな風に言われたかかないな)

父親に言われる前から、エディには微かに自覚があった。

そも、なぜ普通に『生きている』だけで、こうも違和感を感じるのか。自身では、ごく普通に振舞っているつもりである。なのに、何かが違っている。周囲が、その違和感をエディに向けるほどではない。しかし、自分が日々感じる違和感は、決して消え去る種類のものではなかった。目に見えない塵芥のように心の中に降り積もって堆積し、息苦しさを感じさせるまでに成長した。まるで、水の中を歩いているかのように、体が自由にならない動き辛さ。

家族の中で、自分が『異物』のようである事は、ハイスクールに入った頃には感じていた事だった。  
『Black sheep of a family(家族の中の黒い羊、異邦人、仲間はずれ)』

まさに、自分がそうなのだ。家族の中にあっても、友人、知人の中にあっても。

何がどう違うのか？

素行が悪い、協調性が欠けている。そういう分かり易い事であれば、どれほど楽だっただろう。ただ『規格外』の存在。

友人がいない訳ではない。人という事、人付き合いが苦痛という訳でもない。しかし、どこか自分が無理をしているように感じる。自分はただ、平穩に生きたいだけなのに。

今ならば、精神科医にかかり、相談するところだろう。しかし、テキサスの中途半端な規模の町でそんな事をすれば、すぐに町中に知れ渡るのには目に見えていた。スクール・カウンセラーも、当てにはならない。一度は試したのだ。しかし、母親と同世代の中年女性は、彼女なりの可能な限りの母性愛溢れる微笑みを浮かべて、エディに言った。

『ティーンの頃には、誰しものが通る関門のような物よ。自分が何者であるかを知ろうと、あなたは模索しているのよ。悩むのが当然の事だから、心配いらないわ。時間が解決する事よ』

(模範解答をどうもありがとう)

ならば、この息苦しさは何なのだ？ 周りに感じる違和感は？ 周囲が自分はこういう人間だと認識しているものとは違うのは、すでに自明なのだ。

なぜに、親からも『お前は違うから』と言われねばならない？ それすら、大人になる為の過程だと？

さすがに親の言動や、女にさほど興味が持てない事までは、話せなかった。

図書館にも通い、関係があると思われる書籍も読み漁ってみた。しかし、重篤な例や環境が及ぼす発達心理学など、自分が当てはまると思えなかった。

(所詮、この程度で悩むな、という事か)

半ば諦めを持ってエディが決意したのは、この地を離れる事。出来るなら、東部、N.Y. へ、と決めたのも、この頃だった。

離れていた方が、お互いにベターな関係もある。たとえ、血の繋がった親子であっても。

(俺がいなくたって、母さん、あなたにはまだ、チャーリーがいる)

「エディ、眠れないのか？」

ジェフが目を覚ましてしまったようだ。闇の中で目を凝らして見える時計は、午前2時を指している。

「軽い睡眠薬が、そこのテーブルの引き出しに…」

「いない」

エディは、ジェフの言葉を遮った。

「そうだな。お前は薬を飲まないんだっただな」

本格的に目が覚めたのか、ジェフは起き上がっていた。

「酒が抜けたら、目が冴えてきちゃった。俺は薬飲むから水淹れてくるけど、何か要るか？」

「俺も水」

ジェフがガウンを引っ掛け、枕元のスタンドを点けた。やわらかいオレンジ色の光がベッド周りを照らす。

(そう、もう薬はいらない)

薬局勤務でありながら、エディは医師の指示でない限り、アスピリン以外、薬は全く飲まない。医師になるのを断念した時から。

エディの薬嫌いは、同僚たちも皆知っている。しかし、事情まで知っているのは、スコットだけだ。それでも、全てを知っている訳ではない。ジェフも当然知らない。彼が詮索好きでない事。これが、ジェフと付き合っている理由でもあった。言えない訳ではないが、進んで言える類の話でもなかったのだから。

ジェフが、ミネラルウォーターの入ったグラスを2つ携えて戻ってきた。エディが起き上がった側へ腰を下ろすと、ナイトテーブルの引き出しから、プラスチックの壺を取り出し、中の錠剤を1錠振り出して飲んだ。短時間で切れるが、即効性のある、軽い睡眠薬である。乱用すると耐性が出来てしまうので、ジェフもたまにしか服用しない。

エディの飲み干したグラスをテーブルに置いたジェフは、ベッドに上がるとエディの腕を引き、そのまま押し倒した。

「ジェフ、何す…」

開いた口は、ジェフの唇に塞がれた。抗おうとしたが、意図を悟り、柔らかく彼の背中に腕を回すに留める。キスは欲情を誘うものではなく、相手に自分のエネルギーを分け与えるかのような優しいものだった。

「俺の処方した睡眠薬だよ」

体を離れたジェフはすぐに顔を背けていたが、きっと自分の吐いた台詞に赤面しているに違いない。

エディはベッドに潜り込むと、ジェフの肩口に顔を押し付けて、目を閉じた。

「エディ、久しぶり」

カウンターに出ているエディの姿を見つけるなり破顔したのは、マイケル・ウィルトンだった。ロウワー・イーストサイドの診療所で小児科医をしている。クリスの言っていた『マイク』である。元は、ジェフやクリスと同じ病院に勤務していたのだが、保険会社のいいなりのやり方に嫌気が差し、辞表を叩きつけたのが三ヶ月前と聞いている。小柄な体に、柔らかそうな長めのブラウンの巻き毛を後ろで一つに縛り、誰もが安心して心を開きそうな天真爛漫な笑顔が、彼の最大の特徴だった。

『自分が子供だから、子供の医者になっただけ』とは、マイケルとはメディカル・スクールで一緒だったクリスの弁だが、クリス自身が眼科を選んだ理由も聞いているだけに、2人がなぜ友人同士なのかは、エディやスコット達の中で謎だった。

『自分がファックしたいと思わない奴の体には、最低限しか触れたくないね。第一、一番生死に関わりなさそうだろ?』

「用意できてるぜ、マイケル。取り寄せも含めてな」

錠剤のシートの束をカウンターの上に並べる。まだ病院の診察が始まって間もない時間の為、ソファにも誰もいない。

「そろそろ慣れたかい？」

「まあね。たらい回しにされて半狂乱になった親を見ずに済むだけましさ。本当、HMOなんてクソだぜ」

普段は穏やかなマイケルが吐き捨てるように言う。

「ま、所長が、俺がガキの頃から知ってる従兄だしな。あ、多分クリスマスに子供たち集めてパーティーやるからさ、来てくれよ。プレゼントくれとは言わないけどさ。詳しくは、リンが招待状作ってるから」

リンは、マイケルの妻である。思春期の少女のトラブルは、彼女の持ち回りらしい。望まぬ妊娠で訪れる者、家出をして保護されたものの、明らかに虐待を受けている形跡のある少女など、男性の手に負えるものではなかった。

「じゃ、俺、戻るわ。スコットやジェフにもよろしく言っといてくれ」

用を済ませたマイケルは、疾風のように去って行った。

「エディ。今日、ランチ一緒に行かない？そこの角に新しく出来たカフェがあるのよ。チャイニーズ風だけど」

奥から同僚のアリスンの声がした。

「了解。あ、昨日のグラマシーで買ったチーズケーキ、全く食わなかったんで持ってきたんだ。後で食おうぜ」

「じゃあ、コーヒーは私がおごるわ」

エディは、奥にいるアリスンに親指を立ててみせ、ドアを開けて入って来た客に注意を向けた。

遅めの昼食を取りに病院を出たところで、ジェフは後ろから肩を叩かれた。

「飯だろ？付き合うぜ」

クリスの場合、誘いというより、半ば命令のようなものだ。しかしクリスは、ジェフが嫌がらない事を承知していたし、ジェフもまた、クリスの誘いにほっとしていた。早くどこかの店逃げ込んでしまわなければ、ナースに捕まり、下らないお喋りに付き合わされてしまう。

店はクリスに連れられるまま、古く小さなレストランに入った。その店のお勧めだというラムチョップとフレンチフライ、サラダとコーヒーを頼む。

「あ、あとデザートにプラリネアイスクリームを」メニューを見て、ジェフが追加した。

ジェフの味覚と食生活は、エディとクリスによって維持されているようなものだった。甘いもの中毒という以外、食べ物には無頓着な為、通いの家政婦の女性が作り置きしてくれる食事以外は、外食ばかりになる。かといって、一人では億劫なので、テイクアウトフードになるのだが、面倒くささが祟り、ついジャンクフードになってしまう。

キッチンに立つことを厭わないエディが作る食事は、ジェフが見る限り、栄養バランスを考えているようだ。自身の健康管理のためだろうが。比してクリスは、栄養云々ではなく、いわゆる美食家のような感じだった。自分の欲求に素直なのだが、舌はそこそこ肥えているように感じられた。

「そういえば、昨日の呼び出し、何か特別な急患が入ったらしいじゃないか」

ソーサーを持ち上げコーヒーを一口飲んだクリスが口を開いた。相変わらずの笑みを浮かべて。

プラリネアイスクリームを平らげたジェフは、煙草に火を点けたところだった。

「あ？もう耳に入ってるのか。早いな」

「今朝、うちの検査も入ってたんでね」

昨日の午後、虫垂炎で運びこまれた急患の事だ。ソープオペラの主演女優らしい、とは聞いていたが、テレビをほとんど見ないジェフにとっては、単に女性患者の一人に過ぎなかった。

「転倒して顔をどこかにぶつけたって痣つくってたな、そういえば」

「一応、眼底検査が必要だったらしい。問題はなかったけどね。たまたま俺に回ってきたんだよ。で、だジェフ」

改めてクリスがジェフの顔を覗き込んで来た。ジェフはぎくりとする。

「ちょっと面白い事を思いついたんだ。今晚、俺の家へ来いよ。牡蠣の良いのが手に入ったんだ。食いながら話そう」

ジェフの返事を待たず、クリスは立ち上がり、行ってしまった。

彼はいつもそうだった。エディと一緒にいる際は遠慮があるのか、そうでもないのだが、ジェフ一人が相手だと、彼の意思の確認もなく、勝手に決めてしまう。それを嫌がっていない自分を、ジェフも自覚はしていたが。

煙草を吸い終えてから、ジェフは席を立った。ウェイターを呼ぶが、勘定はクリスが済ませていったらしい。まあ、いい。礼の意味で、彼の好きなラリックの小物でも持って行ってやろう、とジェフは考え、店を出た。

(ハリス・アンドディップルの近所じゃないか？)

ハリス・アンド・ディップル、エディの勤務先である。久しぶりに、彼の仕事中のポーカフェイスを拝んでやろう、と思い立った。

ジェフの知るエディの顔は、ジェフが散らかした部屋を片付けながら怒る顔、鈍感な自分に呆れ返る顔、ベッドの中で眉間に皺を寄せながらも、決して嫌がってはおらず、時折覗かせる夢を見ているような顔。そして、どこも見ていない、空っぽの表情――。

昨夜、クリスが帰った後、エディがそんな顔をしていた。

「OK！じゃあ、何か好きなトッピングと、ジェノベーゼ・ソースでも持って行くよ」

エディの声が出た。隣には見覚えのある女性の姿。エディの同僚だろう。楽しげに肩を叩きあい、店の裏口へ吸い込まれて行った。

(俺には、あんな顔見せた事ないくせに！) たとえ、これがエディの本来の姿ではなくても。

昨夜のエディを思い出して心に浮かんだ愛しさは霧散し、もう1本煙草を吸う為、ジェフは病院への道を急いだ

「メリッサ・エルウッド。今やってる『レストレス・アンド・ワイルド』ってドラマの主演女優だ。まだ撮影自体は残ってるんで、退院後ももうしばらくは、マンハッタンに滞在らしい」

ケータリング・サービスに処理を頼んだ生牡蠣は、摩り下ろした生姜を載せたものと、レモンがそれぞれ添えられていた。更に、マリネを乗せたブルスケッタ。昨夜と違って、今夜は冷えた辛口のスパークリング・ワインが用意されていた。

ジェフは、あらかじめ五番街で購入した貢物の箱を、クリスに手渡し、ワインに口をつけた。クリスは、その包みを開けながら、尚も説明を続ける。

「彼女の付き人…というか、エージェントか。彼は俺を気に入らないみたいだったけどね。確か、マーク…マーク・アーモンドで言ったかな。もろに、オカマのね」

喉を鳴らしてクリスは笑った。反対にジェフは苦虫を噛み潰したような顔になっていた。昨日、もう少しで腹膜炎を起こすところだったという彼女の手術を終え、出て来た所を弾かれたように飛び出して来たのが、そのマーク・アーモンドだった。メリッサのエージェントだと名乗った彼は、ひとしきり彼女が今大事な時期である事を語りながらも、ジェフに色目を使うのを忘れていなかった。それを俄かに思い出した。「彼女はウィスコンシン出身らしいんだが、幸い俺の実家にいた家政婦もウィスコンシンのウィノナ出身でね。実家で食べたミートローフの話をしたら、今度食事に行こうって話になったんだが…乗らないか？」

「乗る？何に？」

「彼女の担当、あんただろ？幸い、あのマークは多分あんたがお気に入りだ。違うか？」

ジェフは肯定する代わりに、ワイングラスを干し、生姜の乗った牡蠣にてを伸ばした。クリスも、レモンを絞ったものを手に取り、顔を上げて柔らかい身を口の中へ流し込む。白い喉がさらけ出され、波打つように動く。

暗褐色の髪の子エディと違い、クリスの柔らかいウェーブのかかった髪は、明るいブラウンだった。普段は、ジェフのように後ろに撫で付けている。しかし、ジェフが訪れた際には、すでにシャワーを浴びた後なのか、ふわりと顔を囲むように下りている。生成りのシャツは広く胸元が開けられ、やはり白く滑らかな肌をさらしていた。ジェフは、クリスの一連の動きから、目が離せずにいる。

「つまり…」

「つまり？」

「俺とあんたと、どちらが彼女を落とせるか、賭けようぜ」

「悪趣味だな」

「お褒めの言葉をどうも。単なるお遊びじゃないか。彼女だって、ショウビズの世界の住人だ。素人じゃない。第一、このゲームに参加するなら、俺たちはあるメリットを享受できる」

「何だよ、メリットって」

「しばらくはナースの誘惑も、ゲイの噂も心配しなくていいって事さ」

クリスの言葉に、ジェフは心の中で手を打った。確かに名案である。あのエージェントが少々面倒だが。「それについては今日、既にとっ捕まったんだがなあ」

もう一つ牡蠣に手を伸ばしながら、ジェフの顔が憂鬱そうに歪んだ。夜勤明けから、急患が来た事で居残りになっていたERのナースに、クリスマスのデートを半ば強引に約束させられていたのだ。

「ちょうどいいじゃないか。しばらくは、それで噂も立たないし、そのナースだって相手がセレブリティ(有名人)なら身を引いてくれるさ」

楽しそうに言うクリスは、ジェフから受け取ったラリックの繊細なガラスの器に見入っていた。が、静かにそれをテーブルの上に置き、ジェフの座るソファの肘掛へ腰を下ろした。思いがけない行動に、ジェフはつい、びくりとひるんだ。



その様を口の端で笑うクリスは、ジェフの肩に手を回し、もう一方の手で、ジェフのつけているエルメスのケーブコードのベルトを緩める。

「今は、エディ以外は？」

クリスの顔が近づき、囁く。外された腕時計は、ラリックの器に掛けられた。時計を外した手がジェフの太腿にかかる。ジェフはされるがままになっていた。

「本気で誘ってるのか？」

クリスはジェフの耳元で可笑しそうに笑った。その声を捕らえた耳に、暖かく柔らかい感触が触れた。更に囁く声がする。

「エディにばれるのが怖いとか？」

顔にかっと血が上ったジェフは、クリスの唇を噛み付くように塞いだ。

昼休みにジェフが不貞腐れたのと同様、同じ日の夕方、エディが不貞腐れる番だった。

人の家での食事に外食、と重い食事が続いた為、エディはアパートの近くのカフェに寄った。昼の食事も重かった上、チーズケーキまで平らげたのだ。少しばかり胃袋を休ませたかった。

デリも兼ねたこの店には、作るのが面倒になった時、買って帰るのに立ち寄る。が、あいにくと時間帯が悪く、テイクアウトの方は混み合っていた。チップ代が勿体無い、とも思ったが、列に並ぶのも面倒だった。とにかく、まずは腰を落ち着けて、コーヒーが飲みたい気分だった。やってきたウエイトレスに、コーヒーと日替わりのサラダ、ペストリーを頼み、一息つく。本来なら、あと1時間は早く帰れる筈だった。エディは、昼休みが終って店に戻った時を思い出していた。

『よおエディ。別嬪さんがお待ちだぜ』

呑気そうな声をかけてきたのは、遅番で出勤した同僚のダニエルだ。調剤室に入り、カウンターの方を覗くと、見覚えのあるストロベリー・ブロンドの女性が立っていた。

『エディ、ごめんなさいね、お仕事中に』

『君、確かジェフの所のジュディ？』

『ジュディスよ。覚えててくれたのね。ありがとう』

『美人はね』エディは破顔した彼女にウィンクを投げる。ジュディス・ニーマイア。以前、散々ジェフの身上調査のヒアリングをされたのだ。簡単に忘れられる印象ではない。

『今日、仕事終わったら、少し時間貰えない？』

人の目もある。とっさに断る理由を、エディは思いつけなかった。

『あ、ああ、1時間程度なら』

『よかった！じゃあ、5時半にそこのデイズで待ってるわ』

ジュディスは、すぐ目の前のダイナーを指名し、帰って行った。

ジュディスの事は、さすがに誰も冷やかさなかった。彼女がジェフ目当てで、エディに近づいているのは、同僚数人の中でも周知の事だ。結局、仕事が終わっても、小1時間ほどの労働をこなす羽目となった。

クリスマスイブに、ディナーの約束を取り付けたが、好みは何か？最近は何で遊んでいないのか？好みのタイプは？エトセトラエトセトラ。

事実を話す訳にはいかなかったが、甘い物中毒と、特に食の好き嫌いは無さそうな事。実家では、誰かを紹介しようとしているらしい、といった事を勿体つけて話すと、彼女はそれなりに満足して、エディを解放してくれた。

(どうせ、押し切られて了承しちゃったんだろうに。なんで、俺が巻き込まれるんだ？)

うんざりした顔で、エディは運ばれてきたペストリーに齧りついた。不満の正体には気づかずに。

暗いベッドルームにライターの灯りがつき、紫煙が上がる。

「灰皿は、そのアクセサリー・トレイを使ってくれていい。他にないんだ」

うつぶせに横たわるクリスが、物憂げに言う。

体を起こしたジェフは、答える事なく、イタリアン・ブランドの名を施したガラスのトレイを指で近くに引き寄せた。

(とうとう、やっちゃったな…)

いつかはクリスと寝るだろう、いや、寝たいと思っている自分に、ジェフは気がついてた。またクリスも、思わせぶりの態度ばかりを取る。今夜のように直接的な行動が今まで無かったので、何も起こらなかっただけだ。

(エディには黙ってた方がいいだろうな)

特にジェフとエディが恋人同士である、という約束をした訳でもない。ありがちな、『なんとなく、いつの間にかそうになっていた』というやつだ。お遊びとして『余所見をするな』という事はあっても、先日の物見遊山のように、エディもジェフが他の男に声をかけられようが気にもかけていないようである。

また、ジェフはそこで、昼間見た楽しそうに笑うエディの姿を思い出した。

「なぁジェフ。エディが、なんで医者になるの止めたか知ってる？」

急にエディの名を出され、ジェフは後ろめたさを感じた。

「今、エディにこの事言おうか迷ってたろ？」

クリスは枕に顔をうずめて笑っている。凶星なのだが、肯定するのも癪に障る。ジェフは、答えなかった。「わざわざ言う必要はないんじゃない？」

言わなくても、きっとばれるに決まってる、とクリスが考えている事までは、ジェフには思いつかない。

「エディって薬嫌いだったよね？メラトニンとか、FDAのサプリメント扱いの物でも飲まないだっけ？」

「ああ。アスピリン以外で飲んだのを見たのは、二日酔いが酷い時に、制酸剤を飲んでたぐらいだな」

「ふうん」

「何、考えてる？」

「いや、何か関係あるかなあってさ。ジェフ、明日、仕事は？」

「宿直」

「じゃあ、まだ時間はあるわけだ。俺は休みなんだ」

ジェフが短くなった煙草をガラスのトレイに押し付けると、クリスの楽しそうに笑う声がした。

週末と週明けは、病院やクリニックに連動して忙しい。立込んできた来たレセプトと格闘している最中に、カウンターを指先で叩く音がした。エディは、顔を上げずに声をかける。

「ああ？医者が薬局に来て、何の用だ？」

クリスが立っていた。今日はオフなのだろう。長めのウェーブがかかった髪を下ろしているのに、ミッドタウンの病院勤務の医師には、とても見えなかった。

「昨日、マイクから聞いたか？パーティーの件。」

「聞いた聞いた。リンからカード待ち。しかし、なんで、あんなまっとうな奴とあんたがつるんでのか分からんね、俺は」

昨日訪れていたマイケルは、小さな診療所に移った自分を偽善者かも知れない、と語った事がある。しかし、彼が州立大学からスカラシップを取って、転入でクリスと同じメディカル・スクールに入った事を考えれば、理解出来る行動だ。

『クリスは正直なだけさ。学部生から、あそこにいるんだぜ。普通、楽な道を選ぶよ。ましてや、彼は跡継ぎだしね』

「俺が、真っ当じゃないって事かな？それは光栄。で、暇？」

「に見えるか？あと10分ほど待って貰えるなら、手は空くと思うけど」

エディは回って来た薬とレセプトをさらにチェックしながら答えた。

「じゃあ、飯行こうぜ。待ってるし」

クリスの返事を聞いて、エディは手で追い払う真似をした。

「クラークさん。コリー・クラークさん。お待たせしました」

エディの呼びかけに、ソファに座っていた砂色の髪の青年が立ち上がった。カウンターの前まで来て初めてサングラスを外し、エディが手にした点眼薬と軟膏に見入る。その顔を見て、エディは一瞬ポーカーフェイスを崩した。案の定、さっき後ろに下がりかけたクリスも気づいたようだった。髪の色は違うし、体格も彼の方がややしっかりとしている。しかし、似ているのだ。そのすぐ近くにいるクリスに。

「こちらは点眼薬です。医師から聞いてらっしゃると思いますが…」

事務的に説明するエディの声を聞きながら、その青年、コリー・クラークの眼光が和らいだ。そうすると、ますますクリスによく似ていた。

そのエディの視線に気づいたコリーがクリスを見やり、何かに気づいたような顔をした。

「ああ、気づかれましたか」

悪戯が見つかった子供のような表情で、クリスが近付いて来た。この顔が曲者じみている、とエディは思った。彼の担当患者は、これが彼の本来の姿だと思い込んでいるに違いない。

「これも所詮、抗生物質の一種ですからね。こういうものは、血中濃度が一定以上保たれればそれでいい訳ですから…」

「クリス！」

語り始めたクリスを、エディは制止した。

「失礼。私も医者の方で、眼科医なもので、失礼しました」

髪をかきあげながら、クリスは人当たりの良さそうな笑みをコリーに向けた。

「ほう」

目の前の青年は、口の端を上げて、にやりと笑う。せめて彼が血の気が多いタイプでないように、とエディは祈った。

「つい、調子に乗って喋りすぎるのが、私の悪い癖なんです。申し訳ない」

「いや、構いませんよ。で、あなたの病院はどちらです？ドクター…」

「デ・ガモです。クリストファー・デ・ガモ」

エディは置き去りにされ、二人だけで勝手に会話を始めている。さし当たってトラブルを回避出来たことに胸を撫で下ろす。待っている患者の方を見ると、茶番の一部始終を見ていたと思いき老人が、目が合ったことに慌てて視線を逸らした。

「失礼」

エディは老人に会釈をし、調剤室へ入った。

本人の努力もあったろうが、挫折する事を知らず、望めば全てが手に入れば、ああいう人格が形成されるのであろう。

エディは、クリスが羨ましくないといえば嘘になる事を自覚している。自分もこうであれば、と思う部分を持っているだけに、惹かれる所はあるのだが、常に行動を共にするのは危険だ、と理性が警告するのだ。数年前のように、医師になるのを諦めただけでは済まなくなる。そうなりたくなければ、一定の距離をおいて付き合う事だ、とジェフに紹介された時に、エディは決めていた。

受付の方は、いつの間にか静かになっていた。待っている老人の為、薬の束を持ち、カウンターへ出る。既にそっくりな二人の姿はなく、走り書きのメモが置いてあった。

『デヴィッド・Kで待ってる/クリス』

「マクダウエルさん。お待たせしました」

メモをくしゃりと握り締め、エディは老人に声を掛けた。

果たして15分後、エディはお喋りな眼科医の友人と、中華料理のテーブルを囲んでいた。

(2日連続か…)

「なあ、エディ。俺の好奇心に応えて貰える？」

「何が？」

クリスの目は、獲物を見つけた猫のように爛々としていた。抑えきれない好奇心の現れである事が見てとれる。

「なあ、なんで薬が駄目なんだ？副作用が怖いなんてわけじゃ…ないよな？」

(今度はそっちか)

「あながち、間違いじゃないと思うけど」

苦笑と共に答える。が、クリスは納得しないだろう。

「一度、スコットに止められた事がある。ウィード(マリワナ)だろうが、合法なものだろうが、あんたには勧めないでくれって」

クリスは、ウィードという言葉だけ更に低く囁いた。

「何故？」彼の目は笑っていた。

「医者になるのを止めた理由も駄目。薬が駄目な理由も教えない。それで、俺の好奇心が収まると思う？」

思えない。そもそも誰なのだ。中途半端に、自分の事を彼に教えたのは。しかし、友人関係を続けていく以上、メディカル・スクール中退も、薬を飲まない理由も、いずれはばれてしまう事だ。

「その話をすると、結局医者になるのを止めた理由を話すのと同じだよ、クリス」

エディの答えに、クリスの笑顔が更に明るくなったように見えた。

クリスは、薬に耽溺するような馬鹿ではない。ただ、お楽しみのスパイスとして使いたいただけだ。それはエディも重々承知している。自分までは巻き込まれたくないが、下手に隠し通す事で、良からぬ事をされる方が更に恐ろしい。

「ただし、あんた一人に話すんじゃない。ジェフも一緒に、だ。それで良ければ」

「OK、交渉成立だ。奴は今夜は夜勤だって言ってたし、明日の夜、奴の家でどうだ？」

本人のいない所で、勝手に予定が決まる。まあいいだろう。おそらくジェフは拒まない。

「じゃ、俺は先に行くよ」

立ち上がったクリスは、途中でウェイターに声を掛けていた。恐らく勘定を済ませるのだろう。エディは遠慮なく厚意に甘える事にした。

「おかげで謎が解けたよ。遊び仲間の一人から叱られてね。自分とは行かないのに別の奴となら行くのか？ってね」

クリスは、目の前に座る自分とよく似た男に向かってにやりと笑ってみせた。

その男、コリーの手にクアーズの缶。クリスの手には、シャブリの注がれたグラス。

「立場上、妙な所には出入りできない。なんで俺がレザー・バーに出入りしなきゃならないんだって、そいつとは喧嘩になったよ」

「で、そいつが見たのは俺だったて訳か。その彼氏とは、どうなった？」

「どの道一度きりにしたかった相手だからね。それを理由に、これっきりにして欲しいって突きつけたさ。面倒はごめんだ」

クリスはコリーの隣に腰を下ろし、彼の広げた脚に自分の脚を投げ出すようにして絡めた。そのまま、コリーの頬にかけた手が制止された。コリーが『何故？』といった表情で見上げてくる。

「どうして？そのつもりで来たんじゃないのか？初対面でけしかけて来たのは、そっちだぜ」

挑むような笑みを浮かべるクリスにコリーは相好を崩し、そっくりな笑顔を返した。

「ドクター、あんたは自分とファックするのが趣味なのか？」

「そうだとしたら？」

コリーはクリスの手を掴んだまま、カウチの背もたれに押さえつけ、噛み付くように唇を重ねた。掴まれていたクリスの手が、やがてコリーの手を払いのけ、彼の顔を首元からかき抱いた。

しばらくして、唇を離れたクリスが口を開く。

「ここじゃ、ゆっくり出来ないだろ？あっちへ行こうぜ。酒も時間もたっぷりある。あんたさえよけりゃね。俺は明日も休みなんだ」

自身の乱れた前髪をかき上げ、クリスの唇が、淫らな笑みを形作った。

ペン駅手前で西へ折れ、10番街を南へ下る。エディは自身の愛車、白いホンダ(勿論、中古車だ)に乗って、自宅へ向かっていた。

ハロウィンも感謝祭も済んだ。クリスマスまではまだ間がある。しかし、人と会うイベント事は、重なる時は重なるものだ。

先日の昼休み、ジャージーから通っているアリスンから、自宅でピザ・パーティーをやるから来い、と言われ、つい承諾してしまった。

同僚との付き合いも、平穏な生活を守る為の必要悪、とエディは考えている。その辺りがジェフは下手くそなのだ。だからこそ、忙しく、時間の不規則な職業を選んだのかもしれないが。

エディは、出来る限り自身のプライバシーを守りつつ、『穏やかな暮らし』がしたかった。その為には、あまり気の進まない同僚との付き合いも上手くやる必要がある。ことに、彼女のようなタイプとは。エディはただ、『普通に』暮らしたいと思っていたのだから。

(早く帰ってシャワー浴びたい)

人に気を遣って、首の辺りがすっかり凝ってしまっている。久しぶりにバスタブに湯をはることも考えたが、溜めているうちに寝てしまう可能性が高そうだ。久しぶりの連休なのだ。明日は部屋の掃除もしたかった。

アパートのすぐ前の歩道に車を乗り上げ、エディはシートから重い腰を上げた。

鍵の開く音が、連続して聞こえてきた。ゆっくり目を開けると、すっかり夜は明けている。玄関の方から聞こえてくる音は、無理矢理開けようとしているものではなさそうだった。それでもエディは、ベッドの中で身を堅くし、サイドテーブルの引き出しにそっと手を伸ばす。以前に買い求めたアーミーナイフを右手に握り、息を潜める。銃に比べれば随分と心許ないのだが、無いよりはましといったところだ。

足音がリビングを抜け、寝室のノブがゆっくり回ると、予想した通りジェフの姿がそこにあった。「腹減った。朝飯食わせてくれよ、エディ」

ため息をついたエディは、何も答えず体を起こし、今ある食材を思い出そうとしていた。

コーヒーをセットし、その間にベーコンの片面にブラウン・シュガーと粗挽きの黒胡椒をたっぷりとかけ、天板に乗せる。スライスしたパンも一緒に並べて、オープンへ放り込む。焼きあがる間に、出来たコーヒーとオレンジジュースをジェフと自分の分を用意してテーブルにおいた。甘味の少ない林檎の芯を抜き、残っていたレモンの汁を振りかけておく。

「せめて、電話ぐらいして来いよな」

あくびをかみ殺しながらも、エディの手際は良い。

「もう世間は朝だぜ。それとも、昨夜遅かったのか？」

「何？焼きもちでも焼いてくれようっての？」

パンに、ベーコンと林檎を載せ、皿に置いてジェフの前に出す。笑ってみせようとしたが、どうも、うまくない。きっと疲れているせいだ、とエディは思った。

「俺が嫉妬するような事でもあった？」

「…ないね」数秒、視線を明後日の方向に向けてエディは否定した。

ジェフが夜勤明けの日、こうした強襲があるのは、今に始まった事ではない。昨日クリスから聞いていたので、多少予測はしていたが、ついこの前ジェフの家に泊まったばかりで、間隔が狭いのは珍しい事だった。

仕事を終えたばかりのジェフは旺盛な食欲を見せ、用意した朝食を綺麗に平らげていく。

この突然の来訪が、ジェフの後ろめたさと嫉妬の化合物である事は、エディは知らない。

「この背中から、腰のラインが良いんだよ」

ジェフは、やもすれば酷薄に見える青い目を細め、隣でうつ伏せに横たわるエディの背中を指でなぞった。その刺激にエディもかすかに反応し、小さく息を吐いた。

「マッチョでもなく、女みたいに肉感的でもない。少年みたいな、さ」

ジェフの指は背筋を辿り、更に双丘の窪みへ達していた。情熱的な唇が、その動きをトレースしている。「悪かったな。どうせ俺の体は、あんたと違ってガキっぽいよ。あのさ、言っとくけどペドフィリア(小児愛)は、立派な病気だぜ、ジェフ」

「よせやい。俺は毛も生え揃ってないようなガキには興味ないよ。勿論、くねくねしたオカマもな」

体を寄せてきたジェフから、熱だけでなく、硬い感触がエディの体に触れた。

「まあ、その気になってんのか？夜勤明けで、一発終わったばかりだぜ？あんたのその鉄人的体力には恐れ入るよ」

嫌味を返したつもりだったが、失敗に終わった。体の反応が、持ち主の意思を見事に裏切っている。肌は、与えられる快感に粒立ち、余計な声漏れそうになるのを堪えるのに必死なのが現実だった。

「体力がなくちゃ、外科医は務まらない…」

くぐもって笑う声が吐息となって、エディの背中を愛撫するように掠めていく。ジェフの手は、全く動きを止めない。体を支えていた手がエディの胸元に回り、体が反応しているのを確かめると、指の動きは更に大胆になった。

「分かったよ、あんたには、かなわない」

苦笑したエディはジェフの方に向き直り、片手をジェフの下半身へと伸ばした。もう一方の手が、ジェフの顔を引き寄せると、ジェフが喰らいつく肉食獣のようにエディの唇を捕らえたは、ほぼ同時だった。

ダウントウンはすでに活動を開始し、街の喧騒が、部屋に響く二人の荒い息遣いをかき消した。

まだ、時間は正午を回ったばかりだった。

ジェフはベッドで熟睡している。予定では、家中の掃除をしようと考えていたのだが、寝室は除外せざるを得ない。

居間のラジオを、ボリュームを調整してから電源を入れる。アナウンサーが、政治の話題の後、州のニュースを報道している。

不織布のクロスで、灯りのシェードを拭って回り、ソファのクッションを叩いて埃を落として形を整える。ソファにも軽くブラシでをかける。

ジェフには『所帯臭い』と言われるのだが――クリスマスも同様の事を言っているのを、エディはスコットから聞いて知っている――こうした家の雑事をしている時が、エディの気持ちを一番落ち着かせた。余計な事も、心の迷いも何も考えなくて済む。

ドレイノーをキッチンと洗面所、バスタブの排水溝に数滴落とす。ポリッシャーをつけた布でシンク回りを磨く。掃除機が使えないので、キッチンだけでも、モップで拭いておいた。

(カーペットは…ジェフが起きるまで待つか…)

一通りの掃除を終え、汗を流すため、エディはバスルームに向かった。

熱めの湯を出し、体を完全に目覚めさせる。石鹸を体に撫で付けるようにして、さっと汚れを落とした。

最後に熱い湯のまま顔を洗い、改めて自分の体を見下ろす。

(貧弱な体だよな…)

エディは、バスルームの鏡に映る自分の体を見た。

首が他人より長く見えるのは、少年の様に華奢な骨格と、撫で肩のせいだ。肋骨が浮くほどでもないが、肉付きは薄く、20代も終ろうとしているのに、髭も薄ければ胸毛の生える気配もない、滑らかな肌をしている。

ハイスクールでは短距離をやっていたので、太腿にはそれなりの筋肉はついた。下半身全体が、よくしなる鞭かバネのようだ、と陸上部のコーチにも言われた。尤も、そのコーチがゲイであった為に、自覚のなかった当時は彼の密やかな誘惑から逃れる為に、プロムの相手探しに必死になったものだ。その時のパートナーが、初体験の相手だった。

しかし下半身に比べ、上半身は悲しいかな頑張ってもトレーニングをしても、満足いくような筋肉には程遠かった。

常にヨークを大きく取ったシャツを愛用しているのは、そのコンプレックスを隠す為だ。

しっかりと丸みを帯びた臀部から太腿にかけての筋肉は、全体的に貧弱だと自覚する体型をカバーするまでには及ばず、女受けはそれほど良くなかった。その分、チェルシーからヴィレッジ辺りを用事で彷徨くだけで、傍に寄って来る男は多かった。ぼうっとしていると、男娼に間違われる事も少なくない。

エディは男達からの誘いを、半ば楽しみながら断っていた。

『行動はそうじゃないが、体型がなんか Sissy (なよなよしている) なんだよ。後ろから見ると、この尻が

誘ってるようにしか見えない』

そう笑いながら、よくジェフはエディの下半身を後ろから触りに来ていた。

同じ華奢でも、クリスは肉付きが薄いだけで、肩幅もあり、骨格は意外としっかりとしていてバランスが良かった。どれだけ脚が細くても、あれだけ G.F. フェレのスーツが似合えば御の字だろう (とは言え、既成でなく、オーダーだろうが)。

スコットは同じ細くとも、スカッシュで鍛え上げた全身は、まるで豹かチータを思わせる体躯だった。周りでいちばん小柄で幼く見えるマイケルは、以前空手をやっていたとかで、意外と筋肉質な体つきをしている。ジェフに到っては、文句の付けようがなかった。当人は肩幅の無さを嘆いているが、あれだけ僧帽筋が発達し、太い上腕二等筋を誇示しているのだ。慎重が6フィートに足りないといえど、十分に美丈夫と言えた。

(所詮、無いものねだりだな)

改めて溜め息をつき、エディはバスルームを後にした。

「クリスが？」

「ああ。時間は聞いてない。ただ、今夜って。どうする？先に帰るかい？」

煙草を吸うジェフの表情が曇る。

「面倒だな。お前の車で送ってくれよ。今日は確か、ハドソン夫人が来る日だ。もう少ししてから帰れば、もう帰ってるだろう」

ハドソン夫人。ジェフの雇っている、通いの家政婦の女性である。彼女がいなければ、エディは完璧に家政婦と化し、労働が増えていただろう。しかし当のジェフは、自分で雇っておきながら、十代の少年が母親を避けるがごとく、彼女と会うのを避けている。

「じゃ、食事の支度もいらないな」

クリスに昔の話をするのは、正直気が重かった。しかし、何故同席するジェフがうろたえているように見えるのか、理解に苦しむ。自分には強く出る割に、クリスにはそう出来ないジェフの事を知っているので、いつもの事だ、と自分に言い聞かせる。

「それと、ジェフ。こないだ、来たぜ。ERのナース。ストロベリー・ブロンドの彼女」

「ああ、ニーマイアか？」

「無責任にデート引き受けるの、止めてくれよな。こっちにとぼっちりが来るんだ」

「ああ、分かってるよ」

ジェフは煙草を灰皿に押し付け、顔にかかる前髪をうるさそうにかき上げた。

エディにも、ジェフがジュディスに押し切られて引き受けたであろう事は分かっている。が、たまには自分だってジェフに八つ当たりしたい、とエディは思っていた。

エディに言われるまでもなく、ジェフは自分の押しの弱さを自覚していた。あの日もジュディスに押し切られ、赴任以来の評判を落とさない程度に、優しく微笑んで了承してしまった。予定はない、と答えた自分を呪いながら。

(俺だって、女とも付き合えるさ。でもな…)

了承したそばから、後悔は押し寄せた。

ジェフは、元から愛想の良い方ではない。冷たく傲慢そうに見える外見も、損をしている。

子供の頃は体も弱く、近所のガキ大将にいじめられたり、からかわれたりしたものだった。馬鹿にされまい、とハイスクールに入ってから体を鍛え始め、今のような外見を作り上げた。学生の頃はそれで良かったが、今は周囲の人間の大きな誤解を招いている。ただ、やや引込み思案で、自信にあふれて押し出しの強い人間といる時に、発言に気後れしたり、タイミングを逃しているに過ぎない。



しかし、医者という立場上、媚びるような態度や、優柔不断に見える態度は、デメリットにはなっても、得をする事はない。そういう意味では、院内の誤解は幸いと思っていた。1年掛りで築いた評判、『落ち着いていて、何事にも動じない信頼出来る医師』。仕事面では、その評判に恥じぬよう、努力した。が、女相手の付き合いは、いつまでたっても上手くならない。それを、周囲にばれないようにするのも、これもなかなか大変なのだ。友人としてのスコットやクリス、恋人としてのエディとの付き合いがどれほど楽か！それを感じる度に、やはり自分は真性のゲイなのだろうか、とジェフは思う。

ジェフの了承を得て、スキップしそうな勢いのジュディスの後姿を見ながら、ジェフはスラックスのポケットを探り、くしゃくしゃになったマルボロの箱とライターを握り、喫煙可能なカフェテリアの一角へ向かった。病院では出来る限り吸わないようにしていたが、手術後や、ナーバスになっている時は我慢できなくなる。たとえ、吸えない環境であっても、お守りのように手放せなかった。まるで、ライナスの毛布のように。

PM6:30。エディの車の中で、二人ともが口を硬く閉ざし、沈黙を保っていた。白いHondaは、アップパーイーストへと向かっていた。互いに相手の沈黙の意味を知らぬままに。

古びている分、歴史を感じさせる褐色砂岩の建物の駐車場に滑り込むと、制服を着たドアマンが近づいてきた。

「やあ、ティム」

窓から顔を出し、エディは顔なじみになったドアマンに声を掛ける。ジェフは車を降り、エディはキーをドアマンのティムに渡した。

「ドクター・デ・ガモに、到着したって伝えてくれるかい？」

「承知しました。ドクター・テイト。ハドソン夫人から鍵と、いつものようにメッセージを預かってますよ」

「ああ、ありがとう」

ハドソン夫人のメッセージは、ジェフが不在時の業務連絡のようなものだ。何を買い物し、何を作り置きしたか。すぐに食べられる物のリスト、クリーニングに出した物、引き取ってきた物など。ジェフは滅多に目を通す事しかしない。見ても、管理までは行き届かない為、このメモはエディの手によって冷蔵庫の扉に貼られる事となるのが常だった。

建物内に入ってしまうと、二人の間を再び沈黙が支配した。

ジェフが鍵を開けると、本人はそのままウォークイン・クローゼットへ、エディはキッチンへ向かう。

「エディ、本当にいいのか？」

「何が？」

戻って来たジェフの手からメモを受け取り、冷蔵庫の扉にマグネットで留める。

「その、昔の話さ。俺が聞いた時も言わなかったじゃないか」

ジェフの言葉を背中で聞きながら、冷蔵庫を開ける。ラップをかけたミモザ・サラダ、ロースト・ビーフ、ピーナツ・バターを使ったソースに漬け込んだ、鶏肉と野菜のインドネシア風グリルの用意。さらにレンジの上には、まだ温かい牛肉と野菜の煮込み。冷蔵庫のサワー・クリームは、古い物は廃棄され、新しい物に変えられていた。シチューに合わせてくれたのだろう、そこそこの値段と思われる赤ワインが、籠に入ってダイニングテーブルに載っていた。

「あんたは、『お前が話したくないならいい』って言ったろ？クリスがそれで引っ込むと思う？」

「思わない」

「そういう事さ…」

ため息をついて、シチューの入った鍋を火にかける。足りなければ、カンパーニュの半分カットと一緒にあるから、それでいいだろう。ついでに、ジェフの朝食用に、ロースト・ビーフも切っておけば、サンドイッチが出来る――――。

エディは、ジェフやクリスのいう『所帯じみた事』を考えながら、自分がナーバスになっている事を自覚せざるを得なかった。目の前の嫌な事を考える代わりに、『所帯じみた事』を考えて逃避しているのだ。

そして、来客を告げるブザーが鳴った。

「本当に昔の事だ。メディカル・スクールに進んで、スコットと知り合って…。当時はまだ、サウス・ブルックリンのアパートに住んでた。安いけど、ぼろぼろでさ。金は親に借りてたけどね。寮は嫌だったんだ。管理されてるみたいでさ。分かるだろ？」

クリスの前には、ハドソン夫人が用意したボルドー。ジェフとエディは、食事中からウォッカ・マティー

二。既にリビングへ移動していた。

エディが『彼』と出会ったのは、春学期が始まってすぐの頃、学内のカフェテリアの中だった。『彼』、リチャード・ブラックは、いつも一人で、そこにいた。すぐに判別がついたのは、さほど目立つ風貌ではなかったが、両親が東欧からの移民であった為、その顔立ちのせいもあつただろう。後になって考えてみれば、彼の方が先にエディを見つけて、目を付けていたのかも知れない。気づけば彼は、常にエディの視界に入る所にいた。

スコットとはカリキュラムが全て同じではないため、週の半分はエディは一人で昼食を取っていた。他に友人がいなかったが、誰ともつるむつもりがなかったのが正直なところだった。そんな時に限って、彼の姿は必ずエディのすぐ近くにあった。

いつしかエディは、一人の際には彼の姿を探すのが習慣ようになっていた。その頃には彼の名前と、薬理学のコースを取っている事までは、噂で耳にしていた。

「ハイ。よく会うね」

話し掛けて来たのは、リチャードの方だった。コーヒーを片手に、エディの向かい側に座った。

「俺はリチャード。リチャード・ブラックだ。リッチーでも、リックでも、好きに呼んでくれ」

「リッチー・ブラックモアのリッチーかい？」

「そうだ。君は？」

「エディ。エディ・ジャクソン」

「エドワード・ヴァン・ヘイレンのエディ？」

「そう。あんたも薬理学コースなんだろ？」

「よく知ってるな。まあ、これだけ顔合わせてりゃ、分かるだろうけどな」

「の割りには、クラスでは見た事がない」エディは、にやりと笑ってみせた。

「俺は留年して、ここは長いからね。出なくていいクラスが多いのさ。ま、さぼってるって言った方が正しいがね」

「留年で、どの位？」彼はエディより2、3歳は上に見えた。

「さあね。居心地がいいから、モラトリアムさせて貰ってるのさ」

「居心地がいい？俺は早く出たいね。ラテン語は、舌を噛みそうだ」

顔を顰めるエディを、リチャードは興味深げに見ている。

「ところでな、いきなりだが、誰か部屋を探してる奴を知らないか？」

「ルーム・シェアなら…」

学生課の掲示板に、と言いかけて、エディは止めた。

「その頃の俺は、好奇心の塊のようなもんだった。ガキの頃、行くなって言われてる所に限って行きたくなるだろう？明らかに危ないって分かるとか。そういう意味でも、クリス、俺はあんたの好奇心の強さを責める事は出来ないだろう。奴は学部生の頃からスカラシップを受けてるって割りには、金に不自由してる様子もなかった。時々、コークのやり過ぎで、鼻血出してた位だしな」

クリスもジェフも、自分の顔を注視しているのを、エディは感じていた。が、気恥ずかしさから、エディは自分の持ったグラスから視線を外せなかった。

「奴が言うルームシェアの相手に俺は自分から立候補した。場所も大学に近かったしな。スタジオみたいな所で、広いだけで何にもないような所だったよ。スクォッター (不法占拠) みたいな感じだったのかもしれない。家賃は、ただ同然だった。本当は、奴はルームメイトを探してたんじゃなく、奴の実験台を探してたんだ」

エディは、引っ越すから手伝え、とスコットを呼び出した際の彼の様子を思い出していた。手伝い自体は快諾したものの、ルームシェアの相手の名前を聞くと、スコットは、その大きな目を更に大きく見開いて絶句した。

「本気か!?あの『有名人』はろくな噂を聞かない。人を殺した事もあるって話もあるくらいだ」

「本当に殺人犯なら、今頃大学にいられる訳ないだろ？」

スコットは、自身の友人に対しては確かに熱血でお節介だが、基本的には私生活に干渉するタイプではない。

「悪い事は言わないから、止めた方がいい」

スコットの口調は、いつになく真面目だった。

「得体の知れない奴と一緒に住むなんて、正気の沙汰とは思えない」

「奴が犯罪者だって分かったら、すぐに逃げてくるさ」

笑いながら聞き流すエディに、スコットが最後に言った。

「俺が怖いのは奴じゃなくて、お前のその無鉄砲さだよ…」

その言葉を後悔と共にエディが思い出したのは、半年後の事だった。

「ウィードくらい吸った事はあったけど、薬はね…。メディカルに進むのを決めてたから、下手に手を出したくなかった。それは、今も変わらない。それでも最初の一ヶ月は、何事も無く過ぎた。俺はスコットにも、それ見たことか！って奴の心配性を笑い飛ばしてた。調子が狂い始めたのは、翌月辺りだろう。リチャードが、俺を被験者にしたいって言って来た。『危なくないなら』って条件で了承した。実際には、実験てのは何でもリスクが付き物で、危険じゃないなんてのはあり得ないんだが…俺もガキだったからな。好奇心には勝てなかった。まず始まったのは、普段のありえない集中力と不眠だ。次は倦怠感。不眠は結構長く続いたよ。始めの時点で、ああ、何か盛られたなってのは予想はついたから、医者にもかかれない。血液検査で、一発でばれちゃう」

「アンフェタミンか？」クリスが口を挟む。

「あったかもな。あと、アトロピンとかな。バルビツール系の眠剤もあったかもしれない。俺は、あれは全く効かないんだ、気持ち悪くなるだけで」

「あれは、ガキが使うもんだろ」

「クリス！」

ジェフは、挑発的なクリスの言葉に動揺を見せた。

エディが、リチャードの演出するショウの主人公となった夜。やはり眠れずに、以前に飲み残したワインを取りにキッチンへ行った。

冷蔵庫の扉を開けた際の明かりにぼんやりと照らされ、リチャードがこちらをむいて座っているのが見えた。

「どうした？眠れないか？」

リチャードは、優しくエディに微笑んだ。彼の前に、エディの探していた安物のワインのデキャンタがあった。

「俺の大事な被験者に乾杯。眠れない夜に乾杯」

リチャードが、ワインの入ったゴブレットを肩の高さまで掲げてみせる。

「酔ってるのか？」

「予告なしに始めたのは悪かったな」

「俺がイエスと言う前から始まってたんだろ？」

「その通りだ。そうでもしないと、協力してもらえない、と思ったんでね」

「今更だな。協力はする。するから寝かせてくれよ。疲れてぼろぼろなのに眠れないなんて、地獄だ」

その言葉に、リチャードの表情が輝いた。

「それだ。それが見たいんだ」

リチャードは立ち上がり、自分より少し背の低いエディの両肩を掴んだ。

「心配は要らない。殺したりなんてしない。ただ、君にいろんなものを見せたいだけだ…」

リチャードの声は小さく、祈るような、それでいて、女を口説く時のように優しいものだった。

「宣告されてから使われたのは、幻覚剤の一種だと思う。あと、どっから仕入れて来たのか分からない、セックス・ドラッグだな」

更に、シリコン製の耳栓をされ、自分の体内の音しか聞こえない状態で、ベッドに寝かされた。しばらくすると、リチャードと、誰か知らない女、おそらくは娼婦——にしたら身なりが良かった。どこかのエスコート・サービスから調達してきたのだろう——がやって来て、3人で絡み合った。体中がかっと熱くなり、敏感な粘膜に強烈なむず痒さを生じていた。聞こえるのは、自分の息遣い、思わず漏れる自分の声。相手の汗や体液の匂いも感じるというのに、現実感はなかった。

気が付けば、リチャードと二人で女を責め立てていた筈が、エディがベッドに組み敷かれていた。目の前で、女の形の良い臀部が揺れている。彼女はブロウ・ジョブに精を出していた。そしてリチャードは、エディの腰を抱え、後ろを貫いていた。初めての事にも科関わず、痛みは感じられなかった。それどころか、一度放出してからも体の中の疼きは消えず、指一本動かしたくない程の疲労を感じながらも、一瞬の放出の快楽を求め、悶え続けた。自身の荒い息と喘ぐ声を聞きながら。

「しばらくは、リチャードのお気に入り、その訳の分からないセックスドラッグだった。それこそ、毎晩奴と、たまにプロの女も入れて、しばらくは、やりまくってた。大学も行きながらね」

エディは自嘲気味に笑った。ジェフは目を逸らし、クリスはにやにやしなながら、エディを見つめていた。「当然少しの間、インターバルはあった。体に耐性がつくのを避ける為にね。薬が抜ける時の気持ちの悪さは、いつまで経っても慣れなかったな」

聴覚の次は視覚だった。極めてノーマルなストレートな恋人同士であっても、ちょっとしたスパイス程度に目隠しをしてメイクラブに及ぶ事はある。エディの場合も、そうだと思っていた。相手の女は全く微動だにせず、何の反応もしなかったが。

終ってから自分の部屋に押し込められたエディは、リチャードの笑い声を聞いた。始めは押し殺したような。やがて聞こえてきたのは、我慢しきれなくなったような、高笑い。尋常ではない、狂気を帯びているかのような響きだった。

そこから暫くのインターバルの後、最終回の幕が上がった。

「部屋の中央に両手首を縛られて、吊るされた女がいたんだ。天井からぶら下げた滑車にね。俺からは後姿しか見えなかった。傷んだブロンドといい、背中のそばかすといい、見覚えがある気がしたが、覚えちゃいない」

「その時は、目隠しも耳栓もなしか？」クリスである。

「ああ。その代わり、多分クラックあたりじゃないかと思う。大昔、バッドトリップした時と、記憶がよく似てた。そこから先は、臍気にしか覚えてない。俺は後ろから、リチャードは前から、二人で女をやった。でも、女は全く反応しないんだ。始めは眠らせてるか何かと思ってた。覚えてるのは汗と…金属じみた匂いと、手にまとわりつく、粘っこい液体の感触…」

「まさか、それって…」

「そうだ、ジェフ。手が濡れたんだ。見たらさ、赤いんだよ。あの独特な金属臭は分かる。さすがに腰が抜けそうになったよ。リチャードが、真っ赤になった手を俺に差し出してた」

ジェフが口元を押さえた。

「とにかく逃げ出そうと思って、そこら中にあるものを、全部奴に向かって投げつけた」

その時、へなへたと座り込んでいたエディは、必死の思いで立ち上がり、手当たり次第に投げつけ、自分の部屋に飛び込んだ。ドアが開けられないように、ソファやテーブルなど、動かせる家具を全てドアに寄せ、その場に座り込んだ。極度の緊張感に耐え、どの位時間が経過したのか分からなかった。耳を済ませても、エアコンのモーター音しか聞こえなくなっていた。

いつのまにか、夜の明けるのを待たずして、エディはその場で眠ってしまっていた。

「気づいたら、昼近かったな。手のひらは、赤黒いままだった。奴の気配がないのを確認して部屋を出たら、テーブルの上に、ポラロイドが1枚置かれてた」

「それって…」恐る恐る、ジェフが尋ねる。

「そう。その女の写真。正面から撮影した、ね。まるで、検死したみたいに、綺麗に開腹してあった」

「じゃあ、1度目の目隠しの時も、そういう事か？」

「恐らく、ね」

さすがにクリスは豪胆なのか沈黙を守っていたが、顔色は良くないものの、ジェフに比べれば平然としていた。

「何ヶ月間だ？」

「半年…かな」

「なら、それで済まなかったんじゃないのか？」

上目遣いにエディを見るクリスは、アンコールを要求している。

「そうだな」

それからエディは簡単にまとめた荷物を持って、部屋を出た。地下鉄の急行に乗り、マンハッタンを南下し、トライベッカまで『逃げた』。安モテルを転々とし、時には町で拾われた男の部屋で世話になり、一ヶ月はロウワーマンハッタンに潜伏した。

大学の授業に復帰したのは、その後のことである。

「復帰後の最初に受けた授業が悪かったな。婦人科の解剖だったんだ」

「フラッシュバックか？」クリスは、相変わらずにやにやしている。

「ああ。起き上がれなくなって、早退した。で、そのまま大学はドロップアウト。どの道、授業もあれだけ休めば留年は免れない。改めて、薬剤師の免許だけは取ったけどね」

「確かに、俺より遥かに無鉄砲だな」

クリスは口の端で笑いながら、ワインを新たに注いだ。

「それは否定出来ないな。若気の至りにしちゃ、少々ワイルド過ぎた。だから決めたんだよ、これからは平々凡々に生きるって」

気づけばジェフの手が、エディの手を握っていた。いつになく優しい目でその手を見つめ、軽くエディの手の甲を叩いた。

「俺の話は、これでおしまい。気は済んだかい？」

エディはオーディエンス二人に対し、わざとおどけてみせる。オーディエンスの片割れ、クリスは肩をすくめた。

「じゃ、用は済んだところで、俺は引き上げるよ」

握っているジェフの手を軽く握り帰して、手を離れた。このままここにも、クリスの更なる好奇の目に晒されそう。それだけは、ご免こうむりたかった。もし、クリスがここにいないなら、話は別だが。もし、いないなら…？

「お前、車は？」

「明日取りに来るよ。明日も休みだからね」

エディはソファから立ち上がった。いつもなら、『自分も』と立ち上がるクリスは、その様子が見られない。エディの心の中に、暗い何かが改めて湧き上がる。

ジェフとクリスは、玄関までエディを見送りに来た。

「ティムに車を呼んでおくよう伝えとくよ」

「分かった」ジェフと軽いハグを交わす。クリスは手を振るだけだった。

エレベーターを降りると、ティムがタクシーを呼び止めるところだった。

「ちょっと、待っててくれるかい？」

一声かけて、エディはジェフの部屋の窓を見上げた。ちょうど、リビングに面した大きな窓がある筈だった。そこに、ほっそりとしたシルエットが写る。クリスだろう。

(やはり、そういうことか)

エディは小さく舌打ちし、ティムにチップを渡して車に乗り込んだ。

普通のクリスなら、用が済めばとっとと帰るのだ。それが、わざわざ居残った上、エディの姿を窓から見ている。

『ジェフをもらうよ』クリスがそう言っているかのように思えた。

(勝手にしろ！)

エディは、荒々しく背もたれに体を倒した。初めて自覚した、嫉妬という感情に蓋をして。

「さて、わざわざ知らせなくても、許可はもらえたようだぜ」

リビングのカーテンを開け、窓から通りを見下ろしていたクリスが言う。声はかすかに笑っている。

「どういう事だ？」

自分の為に、ジェフはウォッカマティーニをもう一杯作った。エディの話聞いて、神経がまだ高ぶっている。

先刻までエディがいた場所に、クリスが腰を下ろした。

「あんたと寝ても良いって事さ」

ブラックデニムのパンツ越しにも分かる、すらりとした脚を、ジェフの膝の上に乗せる。ジェフは意識してしまうが、退けようという気にもならなかった。それは、エディから聞いた話のせいだと言い切るには苦しかった。

「あんな話の後に、よくその気になれるな」

ジェフが呆れた声を出す。

「逆じゃないか？あんただって興奮してた筈だ。違うか？」

スリッポン・タイプの革靴がカーペットの上に落ち、クリスの裸足の指先が、ジェフのフラノ地のパンツ越しに股間をまさぐった。

「怖がりながらも、自分もあんな状況でエディを抱いてみたいって想像してたろ？」

からかうように笑うクリスの指の動きは、止まらない。彼の言う事は凶星であり、それを証明するかのよう、ジェフの体はしっかりと反応していた。クリスの指の動きにではない。彼の言った言葉に対してだった。

街は既にクリスマス・ムード一色だった。エンパイア・ステートビルは、先日からイルミネーションを赤と緑に変えた。デパートにしる、専門店にしる、一部の敷居の高い店を除けば、「SALE」の文字と共にクリスマスの飾りつけでウィンドウが埋まる。街のあちこちで煌びやかなイルミネーションが輝き、ミッドタウンにはクリスマスの買物客が歩道を溢れそうに歩いている。

去年のクリスマスは、エディは同僚達のパーティーに呼ばれ、その後はスコットに呼び出された。初めてジェフに出会ったのも、その時だ。

メディカル・スクールに入学して以来、実家にも帰っていない。それどころか、クリスマス・カードすら送っていなかった。せめて生きている、という証に数年ぶりに送ろうかと考える。

ランチ・タイムを過ぎ、ミッドタウンの歩道は変わらず混んでいる。そこで働く者、観光客、買い物で訪れた者。歩くスピードで、分かれているかのようだ。

普段より時間のずれた昼休みが、エディは好きだった。独りになれる上、どこのランチョネットに行っても、さほど混雑しておらず、ゆっくりくつろげる。

ジェフの家での『打ち明け話』以来、ジェフにもクリスにも会っていない。あれから、ほぼ1週間。日々の雑事に追われ、新年の休みの計画を建てたりする事で、どんどん日は過ぎた。彼らからの連絡も入らない。

しばらく、新年の休みは何処にも出かけていなかった。たまには、アムトラックに乗って、暖かい街まで贅沢な長距離列車の旅もいいかもしれない。

ゆったりとした気持ちで考えながら店に戻ると、久しぶりの来客が待ち構えていた。スコットの姿が、カウンターの前にあった。エディの同僚、ベスこと、キム・エリザベス・マッケンジーと何やら話し込んでいる。

「よう、スコット。アネットに言いつけるぞ」

楽しげにひそひそ話しをしている二人に声を掛ける。小さく悲鳴をあげて、ベスがうろたえた様子を見せた。

「あ、あ、あらエディ。そんな事言ったらスコットに失礼よ。あなたを待ってたのよ」

そそくさと、逃げるように調剤室へ行ってしまおう。

「どうかしたの？彼女」

「いや、何も」

スコットはにやにやしている。きっと何か隠しているのだろう。何か、エディにとっては、良からぬ事を。

「で？」

「何が？」

「何もなくて、お前が来る訳ないだろ？用件だよ、用件」

「ああ。リンからカードを預かって来てる」白い封筒が差し出された。マイケルの言っていた招待状だろう。

「リンからなんでお前の所行くんだよ」

「アニー経由」

スコットは口をへの字に歪める。マイケルが妻のリンに頭が上がらないのと同様に、スコットも同棲し



ているガールフレンドのアネットには逆らえない。この二人のタッグに勝てる者は、エディの知る範囲では、誰も存在しない。

「で、アニーからも伝言。たまには飯食いに来いって。俺らがクイーンズに引っ越してから、足が遠のいてるからな、お前は。今夜は？」

特に予定が入っている訳ではない。エディは肩をすくめた。

「了解」

「じゃあ、もう一人ゲストがいるから、お前の車で連れてきてくれ」

「え？」

「じゃあな」

エディが聞き返したのも聞こえなかったかのように、スコットはそそくさと出て行った。追いかけようとしたが、処方箋を目の前に差し出されたため、断念せざるを得なかった。

スコットが頭が上がらないのと同じく、エディもアネットには頭が上がらない。彼女は、スコットが何も言う前から、ジェフとエディの関係に気づき、理解を示してくれた。店の同僚達に比べれば、はるかに気楽ではあったが、もう一人のゲスト次第では、気疲れする夜になることは確実だった。

「エディ！」

タイムカードのパンチングをしているエディに声をかけてきたのは、ベスだった。

キム・エリザベス・マッケンジー。エディより2つか3つ年下で、頭一つ分ほど彼より小柄だ。よくエディを外食だ、ホーム・パーティーだと引っ張り回すアリスンに比べれば、店では目立たない存在である。栗色の肩までの真っ直ぐな髪と同色の目は、時折気弱げに見えるが、陰気という印象ではない。ただ、おとなしそうな雰囲気である。

「スコット…ドクター・ロッケンフィールドの言ってた『もう一人』って、私なの」

『私』というところで、ベスは微かに口ごもった。久しぶりに、スコットのお節介が発動したと見える。「ドクター・ロッケンフィールドなんて言われたら、誰のことか分からなかったよ。スコットロックだろ？」

エディは、自分で『同僚用』と名づけている笑顔を向け、愛車のキーをベスに見せた。

店の裏側にある、従業員専用の駐車スペースにベスを誘い、助手席のドアを開ける。

「ごめん。ちょっと煙草臭いかも知れない。こないだ、ジェフ…ドクター・テイトを送って行ってから、掃除してないんだ。奴は他人の車で遠慮なしに煙草吸いやがるから」

エディは苦笑しながら、車を発進させた。混み合ったパーク街を北上し、60丁目で東へ曲がる。ブルーミングデイルズの前を抜ければ、クイーンズボロ・ブリッジは、すぐそこだった。

まだ日は完全に沈みきってはいないが、最初からミッドタウンを東に出て、イーストリバー沿いに走った方が、女性受けは良かったかもしれないとエディは少し後悔した。ベスからは逆方向にはなるが、マンハッタンの摩天楼から覗く夕日と、対照的な対岸のクイーンズを眺めるには良かっただろう。

(ま、最初からサービス精神旺盛でもな。あまり期待させるのも良くないだろう)

橋を渡っている間中、ベスは子供のようにしゃぎながら、イーストリバーを歩きかう船を眺めていた。

スコットと、そのガールフレンド、アネット・フェルナーの住まいは、クイーンズ北側の住宅街にある、家族向けのアパートだった。建物自体は古く、エレベーターもついていなかったが、部屋は2階なので、将

来もさほど苦痛ではないだろう。内装は、ほとんどアネットが手がけたのであろうが、壁紙が全て貼りかえられ、綺麗になっている。造りつけの暖炉の上にはスコットの家族、アネットの家族、そして二人の写真。出窓にはシクラメンの鉢植えが色違いで3個並んでいる。

エディとベスが到着した時には、リビングまで香ばしい匂いが漂っていた。やや広めのダイニングに通されると、アネットはキッチンで作業の真っ最中だった。

「座ってて。もうすぐ出来るわ。ダーリン、飲み物をお願い」

彼女には、手が何本あるのだろうと思わせる手際で、料理がテーブルに並ぶ。

「エディ、ベス、何にする？」

「俺、ビールだけにしとくよ」

「じゃあ、白ワインを頂くわ」

「OK」エディにはミラーの缶が、ベスには、グラスに注がれたリースリング。

バーテンを命じられたスコットが用意をしている間に、4人分のキャベツのスープが給仕され、温められた芥子の実のついたロールパンが出され、ハーブ入りバターを塗ったチキンの脚と、グリルしたじゃがいもとたまねぎの載った大皿が、テーブルの真ん中に鎮座した。更にシーザーサラダが出て来る。

会食自体はスムーズなものだった。一番ありがたかったのは、4人の中で最も社交的なアネットの存在だった。彼女が主に会話を転がし、ややシャイなベスの言葉数を増やし、エディとスコットの負担を軽減した。

当たり障りのない話題。クリスマスの予定、新年の休みの計画、新しくオープンしたレストランの評判、まだ終りそうにない、中東への派兵。給料が上がらないことへの不満と、土地の高騰。海外旅行に行くなら、ヨーロッパとアジアのどちらか、再開発が進む、リトルイタリー北側の話。

デザートには、ベイクド・アラスカがコーヒーと共に供された。

「さすがに2人の時には作らないわよ。頑張っちゃった」

アネットは出来映えにご機嫌だった。溶けてしまわないうちに、きれいに平らげてしまうと、後片付けをしながら女同士のお喋りに興じる二人と、邪魔者扱いされ、リビングへ追いやられた男二人に分かれた。

「で、今回は何のお節介だよ」

「俺が自分から仕掛けたんじゃないぜ。オファーがあったからだ」

「オファーって…」一瞬考えて、エディは額を押さえた。

エディはそれほど女にもてる訳ではなかったが、外面の良さから、こうしたアプローチは忘れた頃にやってくる。まだ、アリスンに依頼されるより遥かにましだった。彼女は、店の情報通でもあり、広報係でもある。

「お前とベスが上手いこうがいくまいが、俺には責任はない。それは彼女にも伝えてある。きっかけを作る役割って事で、引き受けたまでだ。ま、お前の友人である俺を選択した時点で、彼女は馬鹿じゃないと思ってるんだが」

「それは、分かるよ」

ミラーの缶を飲み干し、エディは苦笑した。

「最近ジェフの動きが、やたら変だしな。聞いたか？」

「何の話だ？」

スコットが小さく『くそっ』と呟いた。

「いや、奴がお前に言ってないんなら、本気かどうか分からんが…」

「クリスがジェフを寝取った件か？」

エディは小さな声で自嘲するように言った。スコットが舌打ちして視線をそらした。自ら口にしたエ

ディは、微かな胃のきしみを感じていた。

「やっぱりそうだったのか。いいのか？それで」

まるで、細波のように、顔にこわばりを感じるが、すぐに戻す。しかし、笑顔は皮肉なものにしかならない。

「いいも何も。奴が選んだことだ。別に奴と俺とで、余所に転ばない約束はしてない」

「なら、『彼女』とも付き合ってみるんだな。俺は悪くない組み合わせだと思ってるぜ」

エディは、ふん、と鼻で笑って返事を誤魔化した。

「とりあえず、マイクのとこのパーティーには、彼女も呼んだ。例によってアネットからリンに連絡はいつてるから。お前も来れるんなら、彼女のエスコート役はお前だ。ジェフが何と言おうとな。」ジェフの下りだけ、スコットは更に声を潜めた。

「ジェフはその日、ナースとデート」

「ああ、あの!!」

スコットははじけたように笑い出した。スコットとジェフは外科だが、ジュディスはERである。彼女の熱の上げっぷりは、相当有名らしい。

「なにしろ1年越しだからな。彼女の執念にも恐れ入るよ。そうか」

スコットは、まだ笑っている。

「いずれにせよ、あと1週間だ。マイクは、もうお前を頭数に入れてるみたいだぞ子供相手だから、夕方には解散だ。俺はアネットと食事に行く。お前はお前で、その後どうするか考えとけよ」

どうもエディには選択の余地は無さそうだった。

「分かった。考えとくよ」

「エディ！ベスが帰るって！送ってあげて！」

キッチンからアネットの声がした。リビングの男二人は顔を見合わせて、立ち上がった。

ベスの住まいは、グラマシーの南側、イーストビレッジ寄りだと聞いていた。帰りは橋を越え、すぐに2番街を南下した。国連本部を過ぎると、もう一度42丁目を曲がって、東へ出る。イーストリバー沿いに南下した。

「ちょっと遠回りかもしれないけど、ドライブにはいいんじゃない？」

エディはベスに向かって軽口を叩く。すぐにヘリポートが見えてきた。川沿いに並ぶ大きな医療センターと、病院の向こう側に、ミッドタウンのビルの灯りが見えている。特にベスは何も言わないが、突然のドライブを楽しんでいるであろうことは感じられた。

「ドクター・ロッケンフィールド…スコットって、親しみやすい人なのね。大きな病院のお医者さんって、もっと気取ってるかと思ってたわ」ベスの顔はエディの方を向いていたが、視線は窓の外に向けられていた。

「あいつは特別かもな」友人の話題には、エディの表情も和らぐ。

「同じエディのお友達でも、ドクター・テイトはあんまり喋らないし、なんだか怖い気がして…あまり、うちに来ないからいいんだけど」

エディは思わず噴出した。

「あいつが怖そうなのは、まさに『見掛け倒し』だよ。いつか分かる」

「でも、ほら、もう一人。ほっそりした、もう少し背の高い…」

「クリスかい？クリス・デ・ガーモ。」

「そう！あの人は…何だか苦手だわ。本音が見えない気がして」

確かにスコットの言う通り、彼女は馬鹿ではない。ただし、エディに関しては、彼女も買いかぶっているようだ。

東14丁目に差し掛かったところで、ハンドルを西に切る。この辺りがグラマシーとイーストビレッジの境目だ。

「1番街に入って、シティ・バンクの前でいいわ。そこから歩いてすぐなの」

「歩くって、どの位？いくら住人でも、あまり早い時間じゃないんだぜ。一番近い通りまで送るよ」

これはサービスでもなんでもない。相手が誰であれ、申し出ることだ。

「じゃあ…シティ・バンクを過ぎたら、右に曲がって、2ブロック先まで。そこからは目と鼻の先よ。車が出られなくなっちゃう」

「OK」

遠慮と気遣いの攻防は、この位にしておいた方が良さそうだった。二人だけで話すのは、今日が初めてだろう。これ以上は彼女が恐縮してしまう。

車を路肩に止め、サイドブレーキを引くと、バスがエディに向き直っていた。

「今日はありがとう」

ほんの一瞬の事だった。彼女の唇がエディの口許を掠め、バスは大急ぎで車から降りた。エディが呆気にとられている間に彼女は数メートルを走り、振り返って手を振っていた。エディも振り返ると、バスはすぐ隣の建物に入っていった。そこが彼女の住まいなのだろう。

彼女の性格を悪くない、と思いながらも、エディは気が重くなるのを感じていた。自分の中で明確な言語化はされていなかったが、エディの気持ちは、彼女に対しては良い友人の域を出ず、寝取られた鈍感男に向いていた。それを認められずにいることが、自身の気持ちを更に重くしている自覚は、全くといって良いほどなかった。

(彼女なら、明日からも急に態度が変わることはないだろう)

特に何か言われたわけでもない。クリスマスまでは、何も考えずにいられそうだった。

(帰ったら、忘れずに冷蔵庫にいれよう)

リアシートには、帰りにアネットから渡された、チキンの残りや玉ねぎをロシア風ドレッシングで和えたサンドイッチがあった。逃避のための所帯じみた思考に没頭し、エディは車を西へ走らせた。

日勤を終えたジェフは、照明を落として薄暗くなった廊下を歩いていた。

入院患者のいる病棟と違い、外来の廊下には人影が全くといって良いほどない。遠くからERの様子が聞こえてくる位のものだ。もう少し時間が経てば、病室をこっそり抜け出した患者の姿もあるが、ちょうど夕食も終わったばかりで、消灯にはまだ時間があつた。薄暗い中、ジェフの足音だけが響いていた。

と、数メートル先に、見覚えのあるシルエットを発見して、足を止める。非常灯のおかげで、なんとか相手の顔が識別できる。コンタクトも装用中なので、知り合いを無視する無礼も働かずにすむ。

前方にいる人影は、ジェフよりもやや背が高く、ほっそりとしており――が、何かどこかが違う気がする。彼の知る男、クリス・デ・ガモなら勤務先に非番であってもあんなラフな格好――レザージャケットにダメージ・ジーンズ――では来ないだろう。しかし、どう見ても彼だ。

クリスと思しき人物は、ジェフの姿を視認したが、すぐにそ知らぬ顔でサングラスをかけ、傍らのベンチに腰を下ろした。

(あれはクリスだよな？けど、なんで俺が無視されるんだ？)

先日、エディが帰ってからの二度目の情事の後も、特に変化は無かった筈、とジェフは思い返す。が、つい、『何か自分が相手に悪い事をしてしまったのではないか?』と考えてしまう。我ながら情けない、と分かっているが、直すことが出来ずにいる。

それでも、意味なく無視されたことに不貞腐れたジェフは、何も声を掛けることができないまま、駐車場へと足を速めた。

『ささやかながら、今年も子供たちの為の会を行います。来場時間も終了時間も設定しておりません。ただ、お願いがあります。

- 1 子供たちへのプレゼント (高価な物ではありません) 購入の為、ご寄付をお願いします。
- 2 子供たちに行き渡るよう、出来れば日持ちのする焼き菓子等のご用意を
- 3 来場時は、出来るだけラフな服装で。また、当然ながら、貴重品は決して手許から放さないで下さい。』

スコットから手渡されたカードには、リンの文字が躍っていた。書かれている文章に比べ、カード自体はクリスマス・カードらしく飾られている。去年までは、マイケルの従兄であるジャックの妻アビーが担当していたらしい。が、字が綺麗で、可愛いカードが書ける、という理由から、リンにお鉢が回ってきたという。

クリスマス・パーティーとマイケルは言っていたが、それはあくまでも、診療所に来る欠損家庭の子供たち向けのものだ。実際に招待状を受け取る大人達、ジャックやマイケルの知己は、サンタクロースの手伝いをするに過ぎない。

皆、それほどに裕福ということはないが、何がしかの形で医療に携わり、それなりの収入を得ている者も少なくない。年に一度、サンタの手伝いをする程度の余裕はある。

1 の要望は、既に小切手を用意してアネットに託した。焼き菓子の類は、スコットやベスとも相談し、当日の昼間に買い物に行く事になっている。

マイケルからのオファーということになっているが、実際の影響力が大きいのはリンである。さすがのクリスも、彼女には頭が上がらない、と聞いている。クリスも果たして来るのだろうか? 彼がマイケルやリンと友人関係である事が、未だ信じられない。

友人を庇ってか、マイケルが言った事がある。自分が偽善者であるのと同様、彼は偽悪的に振舞っているのだ、と。

『あいつの性格から言って、そんな面は絶対見せないと思うけどね。クリスは自分で分かってやってるんだ。どこまで自分が壊れずに悪くなれるか、自分に強いてる。傍から見ると、あいつ程要領良く適当にやってる奴はいないように見えるけど、あいつ程破滅願望な奴を、俺は見たことはないよ。分かってやってくれ、とは言わないけどね』

マイケルの顔は、あくまでも彼お得意の、柔らかい微笑みを浮かべていた。

クリスが偽悪的かどうかは別として、彼の言動は全て、相手に与えるダメージを計算した上のものであることは確かだ。

この企画にクリスも参加するなら、きっと普段の行いの罪滅ぼしに違いない、とエディは考え、カードを封筒に戻した。

スコットとアネット、バスと待ち合わせをし、4人掛かりでゼリー・ビーンズやM&Mのチョコレート、クッキーやマフィン等を大きな紙袋3つほど買い込み、タクシーを拾った。

大人が4人乗り込むと荷物を置く場所もなく、全てトランク行きだった。クリスマスの混雑を考えると、車は時間がかかるので効率は悪いのだが、大きな荷物を抱えての地下鉄はぞっとしない。第一、傍迷惑である。

「せっかくのクリスマスなのに雪がないなんて、気分出ないわね」

渋滞に巻き込まれ、退屈を紛らわせながら、アネットが呟く。

「その分、セントラルパークで凍死する人間が少しでも減るだろうさ」

「嫌な言い方だけど、一理あるわね。これも、温暖化現象ってやつのおかげなの？それなら、オゾン層破壊してる企業に感謝しなきゃね」

「でもホームレスが根本的に救われるわけじゃないさ」

「クリスマスにしちゃ、話題が殺伐とし過ぎてないか？お二人さん。止めようぜ」

エディ達が物心ついた時にはベトナム戦争の真っ最中で、都会は反戦運動真っ盛りだった。親戚の中には、出兵した者も、逆にそれを嫌ってヒッピーのコミュニティに行った者もいた。戦争が終結後も、帰還兵で後遺症に苦しむ者は少なくなかった。かと言って、彼等が手厚いケアを受けている訳ではない事を、ハイスクールに入って知った。

平和な日々は何年か続いたが、またこの国は戦争を始めている。また『余所の国』で。

TV 宣教師は平和を訴えながらも、自分たちの教会への寄付を同じように声高に訴えている。その寄付は、ホームレスを救うことはない。しかも、同じ時間軸で見れば、今回の戦争で今まで死んでいった人数よりも、この街で死んでいく――殺されたり、巻き込まれたり、あるいは身を持ち崩したり――人数のほうが遥かに多い。PTSD から家を出てしまった帰還兵（ヴェテランズ）を含めて。分かっているけど、直視したくない現実。

「着いたぜ」

スコットに言われて、車から降りた。スコットと二人でトランクから荷物を下ろされた荷物を抱え、アネットが精算を済ませる。

以前、どこかの医師が自宅兼診療所として使用していたものの、高齢になったため転居し、荒れるがままに放置されていた褐色砂岩の建物である。内装も自分達でやるからという条件で粘り、ジャックが安く借り受けた、と聞いた。一階の半分は、本来住居スペースだった筈だが、キッチンを除き、全てクリニックのために開放されている。

エディ達が到着した時、診察室とキッチン以外は、既に託児所状態と化しており、幼児たちが走り回る中、リンと二人の女性が面倒を見ていた。

「あ、いらっしやい。マイク！スコットとエディが来たわ！」

真っ先に見つけて、声を掛けてきたのはリンだ。あとの二人、ブルネットとアッシュブロンドの小柄な女性は、恐らくジャックと、その相棒、トミーの妻だろう。

「アニー、いらっしやい。あなたがエディのお友達ね。私はアビゲイル。ジャックの家内よ。アビーって呼んでちょうだい」ブルネットの方である。

「あら？よろしくね。私はマデライン。トミーの妻よ。マディって呼んでね」

アッシュブロンドの方が、バスに握手の手を差し出す。とまどいながらも、バスも手を伸ばした。

「アービーー！ケーキ食べたい！切ってー！」

走り回っていた子供の一人が、アビゲイルの腕を掴んで揺すった。部屋の中央の大きなテーブルの上には、山盛りのフライドチキンと、CHEDDARチーズ入りのビスケット、ちょっとした玄関マットほどありそうな、生クリームケーキが載っている。

「はいはい、分かったわ。アニー、早速だけど、あと、彼女…」

「キム・エリザベス。ベスって呼んで」

ベスはアビゲイルに笑顔を返した。

「悪いけど、手伝ってくれる？男性は奥のキッチンへ行って、あっちを手伝って。よろしくね」

アビゲイルは、スコットに向かってウィンクした。スコットも何も言わず、ため息をついて、エディの肩を叩き、奥へと促す。エディも苦笑いを浮かべて、従った。

「お？来たな。新しい労働力が。よく来てくれたな。マイクから聞いてるよ、俺はジャック。一応、院長って事になってる」

「よろしく、エディ。俺はトミー。院長って肩書きはあっても、ここの実質的な支配者はアビーだ。分かるだろ？」

マイケルの従兄、ジャックと、トミーの両方から握手の手を際出される。スコットは既にマイケルの所へ行って、何やら話し込んでいた。ひとまず、二人と握手を交わす。

「エディはガールフレンドを連れて来てるって聞いてたんだけど？」

「フィアンセだろ？ジャック。もうあっちの女共に捕われの身だって」

ジャックとトミーは、エディとジェフのことまでは知らない。勿論、クリスの真実の姿もだ。

「ちょっと待ってくれよ。連れて来たのは同僚だって。スコット、お前、マイケルになんて言ったんだよ」

「ガールフレンド候補」

スコットは、リノリウムの床に座り込み、マイケルと共に何やら作業にかかっている。

「お前な…」

「嘘は言っていない」これもスコットのお節介発動だろう。

ジャックとトミー、更にその二人の知己とらしき男があと二人、スコットと共に作業をしていた。持参した菓子類の袋詰め作業だ。彼らの前でジェフの事は持ち出せない。故に、スコットの発言をむやみに否定出来なかった。

「さて、じゃあ、悪いけど、マイクの指示に従って作業してくれるか？」

必要以上の詮索を打ち切るように、ジャックがエディに言う。これ幸いと、スコットにわざとぶつかりながら、隣に腰を下ろして作業を始めた。

作業に加わって、10分ほどだろうか。入り口近くから、女たちの一際大きな笑い声が聞こえてきた。

「誰か来たんだろう」

座り込んだまま、ジャックが伸び上がると、診察室の方から二人分の人影が入ってきた。

「あ…れ？クリス？」

振り返ったマイケルは、二人分の友人の姿に、驚きの表情を隠せない。ジャックとトミーは目を白黒させるばかりだ。スコットは、不審気な表情を露骨に表していた。

入ってきたのは、クリスが二人。いや、正確には違うのだが、初めて見る者には、そう見えただろう。かたやクリスの定番、フェレのスーツにコート。もう一方はレザー・パンツにボマー・ジャケットを着ている。二人ともが、同じサングラスをかけ、にやにやと笑っていた。

「もしかして…」エディは小さくつぶやいた。

あのクリスの事だ。フェレのスーツを着ているのは本人でなく、先日のそっくりさんであろう。

「ちょっと、クリス！あんた気持ち悪いわよ、正直なところ」

齒に衣着せないのは、さすがリンである。追いかけて、確認しに来たらしい。

「ちょっとリン、俺はいいけど、それは彼に失礼じゃない？」

笑いながらサングラスを取ったのは、やはりレザー・パンツの方だった。傍らにいる彼は、まだにやにや笑いを浮かべたまま黙って見ている。

「確か、こないだうちに来た…」

エディは立ち上がった。と、件の彼が振り返った。

「あ、薬局の…」

形だけの握手を交わすと、彼、コリー・クラークは、入ってきた女たちに代わる代わる質問攻めに会い始めた。クリスは M&M の大きめな箱をジャックとトミーに渡している。どうやら、キャラクター型のベンダーを子供たちの人数に合わせて持参したらしい。

「ああ、エディ。あんたは騙せなかったな。やはり、覚えてたか」

クリスはエディに声を掛けると、余所行き的笑顔を浮かべ、女たちのいる中へ入って行った。と、スコットがエディの傍までいざり寄って来た。

「あいつ、前から思ってたけど、絶対ナルシストだな。自分とファックするのが趣味なんだぜ、きっと」

スコットの話はエディも考えていたことだけに、否定は出来なかった。むしろ、クリスなら褒め言葉として受け止めかねない。

「お前、ストレートのくせに言う事が大胆だよな。あの二人が『そう』とは限らないのにさ」

「『そう』かどうかは別として、奴の考えそうな事だろ？」

「まあ実際『そう』だと思うけどね」

「俺のことを『ストレートのくせに』とか言うなら、ちったあお前も気遣えよ。お前とジェフのことを想像しないよう、どれだけ俺が苦労してたと思う？」

言ったスコット自ら、すぐに何かに気づいたような顔をした。エディも気づいていたが、この場では気づかない振りをせざるを得ないだろう。スコットが、ジェフのことを過去形とした事に。

「とにかくだ。もう少ししたら俺はアネットとホテルに戻るんで出てくぞ。バスは任せたから、お前の好きなようにしろ」

取り繕うようにスコットはエディの肩を叩き、立ち去った。作業はあらかじめ終了していたが、エディにとっての最大の難関が残っていた。

スコットがアネットを伴って出るのを機に、エディもバスを連れて診療所を辞することにした。車が捕まらないことを考慮し、チャイナタウンまではスコット達に便乗させてもらった。

スコットには『好きにしろ』と言われたものの、エディに実質の選択肢は一つしかなかった。

実際、どうしろというのか？自分も予定がなく、同じく予定がない、と公言している同僚女性を放置して一人で帰るほど、エディは心臓が強くない。いくら、それが彼女に対する偽善だと分かっている。

結局、バスを誘ってチャイナタウンで食事を取り、彼女をアパートの近くまで送り届けた後、自宅傍のバーで、したたかに飲んだ。飲むつもりはなかったのだが、別れ際の彼女の言葉が、エディの罪悪感をかきたてた。

『エディ、私ね…何でもない。ごめんなさい。でも、無理はしないでね』

彼女はただ微笑んでいた。何の事情も知らず。

ジンの匂いのする息を吐き、バスの言葉を頭の中から追い出そうとでもするように顔を軽く振ると、エ



ディはアパートの鍵を開けた。

ふらつき気味の体を支えるために握った手すりが、ぎしぎしと音をたてる。三階の自分の部屋までたどり着き、部屋の鍵を開けたところで、入ってすぐのリビングに灯りが点いていることに気づいた。

家を出たのは昼間だ。リビングは歩道に面して窓があるため、日中は灯りは点けない。ジェフに合鍵は渡してあるが、何日も会っていない。第一、今夜はジュディスとデートのはずだ。いない筈の人間がいることよりも、見知らぬ人間に襲われる可能性を考慮するほうが、この場合は賢明だろう。特に、この街では。

緊張した面持ちで周囲に目を配り、ゆっくりとキッチンへ向かう。ここは暗闇のままなので、ゆっくりと目を凝らす。誰かがいる気配はない。

人っ子一人いない様子だが、寝室のほうから、微かないびきが聞こえてきた。盗みに入って居眠りする呑気な泥棒はいないだろうが、念のために、寝室のノブに手を掛け、ゆっくりと半開きのドアを開けた。リビングの灯りがベッドに差し込み、人影を照らす。エディは安堵の溜め息をついてベッドに歩み寄り、サイドテーブル上のスタンドを点けた。当然目を襲った光に、大の字になって横たわるジェフが、不満げな呻き声を上げて寝返りを打つ。苦笑しながらジェフを見ていたエディは、視界に入った布の固まりに目を遣った。ベッドから少し離れたライティング・ビューローに今夜ジェフが着ていたであろう服が、山積みになっていた。

一番の被害者は、下敷きになっているチャコール・グレイのカシミアのコートだろう。更にその上に、ムッシュウ・ディオールのスーツ、床にはジョン・ロブの靴、更にソックスがご丁寧にばらばらに脱ぎ捨てられている。スラックスはプレス痕跡も残さないほど皺が酷く、上着はサイド・ベンツが開いた状態でスラックスを受け止めている。

(全く…片付けるって事を知らないのかね、このお兄さんは)

エディは、先刻とは違った意味で溜め息をつき、スラックスを手を取った。元の折り目を崩さないよう、裾を摘んで持ち上げた途端、じゃらじゃらと小銭がポケットから零れ落ちた。小声で悪態をつき、腕にスラックスを掛けたまま屈みこむと、ちょうど鼻の位置でぷんと甘く香ばしい匂いがした。もしや、と思い、あわててジャケットとコートを手腕に抱えると、かさかさとした音を立ててハーシーズ・バーの包み紙が数枚、カーペットの上に落ちた。更に、ピーナッツ・バターの一気に食いまでやらかしたらしい。八割がた空になったスキッピーの瓶に、スプーンが刺さったまま放置されていた。どうやら、今日のデートは、相当に気疲れしたらしい。エディだけではなく、マイケルにもうるさく注意されているはずだが、何かあってストレスがたまっただけで、ジェフが甘いものを一気に食べてしまう悪癖は一向に納まらない。

(しょうがないな…)

心の中で毒づきながらも、エディの顔は微笑んでいた。

結局、他人のために労力を使っただけで、クリスマスが終ろうとしていた。それでも、エディの心の中には温かいものが湧いていた。

眠りの底へ落ちる瞬間は、何物にも変えがたい快楽だ。その直後に叩き起こされようものなら、その相手を殴り倒してしまいたくなる。

安心から来る酔いと睡魔の誘惑に耐え、ジェフの服をクローゼットに掛け、チョコレート・バーの残骸を片付けた。すぐにでも倒れこみそうな眠気と戦いながらシャワーを浴び、転がり込むようにベッドに入った。ジェフの体に自分の体を押し付けるように彼の体を押しやり、胎児のように丸くなったエディは、そのまま体がマットレスに吸い込まれそうな錯覚に陥った。

何時間、いや何十分たったのだろうか。温めのバスに浸かっているような心地よさに包まれ、浅い眠りか

ら深い眠りに入ろうとしていた。誰かがエディの肩を揺すっている。煩げにその手を払おうと片手を挙げると、肩に掛かっていた手がその手首を掴んだ。振りほどこうと試みるが、しっかりと強く握られた手首は、びくともしなかった。

「エディ、起きろよ」

「うるさいな…寝かせてくれよ。」

もう一方の手がエディの脇から胸元に伸びる。その手は持ち主と違い、羽根のように軽やかな動きで以って胸元から脇腹へと動き回る。手首を握っていた手も、振り払おうとする力が抜けたと分かるや、背中沿いに下肢へと降りていく。エディは首から上を支配する睡魔に体を任せようとするが、背中から下肢に向かって走るしびれが、それを許さない。

小さな窪みの抵抗を無視して、ジェフの指先が中へ潜り込むと、残りの指がその奥に隠れた膨らみへと伸びる。潜り込んだ悪戯な指は、動きを止めることなく、更に奥へと入ってくる。

「ジェフ、頼むから寝かせてくれよ。せめて朝まで待ってくれ」

「何言ってるんだよ。もう朝だぜ。ほら、こっちも目が覚めてる」

ジェフが、枕に半分顔を埋めたままのエディの手を取り、自身の股間に引き寄せた。

彼の言葉を裏切るように、空はまだミッドナイトブルーの色を保ち、日が昇る気配を見せない。

耳元に送り込まれる愛撫のように、ジェフの声が荒くなった吐息となって、エディの耳をくすぐる。エディは眠ることを断念し、体にまとわりつく手に巻き込まれるように向き直り、程よく筋肉ののったジェフの背中に腕を回した。終わってしまえば、またジェフも眠りに誘われるだろう。しかし、それを分かっているながら、一度は抵抗してしまう。面倒臭げにジェフの欲求に応えるのは、単にポーズに過ぎなかった。強がる振りをするのは、今に始まったことではない。今回は、クリスに寝取られて以来のことで、エディも体が喜びに震えている自覚はあった。それでも、その気持ちを表に出せない性分が恨めしかった。

ぴりぴりと沁みる痛みの後、下腹部に湧き上がるざわめきにエディは身を任せ、あやされる子供のように、ジェフの作る振動に合わせて同じく体を揺らし始める。そして、リズムカルに吐息混じりの声をカデンツァのようにあげ、やがて訪れる一瞬の仮死状態を待った。

スカッシュで打ち込む時のような声をあげ、エディを追ってジェフが絶頂を迎え、覆い被さって来る。その重みを心地よい疲労感と共に受け止めながら、エディは先刻までの全身の緊張感を解いた。ゆっくりと呼吸が整うのを待つ。

急に、体にかかる負荷が軽くなった。ジェフが体を起こしていた。臥せたまま枕を抱えて、エディはジェフの顔を見上げた。

「デート、上手く行かなかったのか？」

「行くも行かないも…疲れただけで終わりさ」

ジェフの明らかに拗ねたような言い方に、エディは鼻を鳴らして笑った。

「お前こそ、同僚と上手くやってるんだろ？楽しそうにしてみたいじゃないか」

ベスの事かと思ったが、ジェフとは接触は殆どない。スコットが、わざわざジェフに言うとは思えなかった。ましてやクリスの耳に入っただけでは、早すぎる。

「同僚？誰のことだよ。第一、俺が店の子と時々デートしてるのは、あんただって知ってるじゃないか」

エディは半ば笑いながら付け加えた。またジェフが拗ねてしまうかも知れない、と思いつつ。

「前に見かけたんだよ。昼休みかなんかで、お前が女の同僚と楽しそうに話しながら帰ってるよ」

全く思い当たる節はなかったが、恐らくはアリスンやベスと一緒に昼食を取った時にでも、見かけたの

だろう。

(どこがこの御仁の嫉妬のボーダーラインなんだ?)

エディは全身に倦怠感を感じながらも、顔の筋肉が緩むのを感じた。思い切って体を起こし、クリネックスで始末をしているジェフの頬に口付けた。頬に当たった冷たい感触に気づいたジェフが、起き上がったエディの頭をかき抱き、髪をくしゃりとかき混ぜた。

と、サイドテーブルの上の電話が鳴った。まだ明け方の五時。こんな時間に電話をしてくる人間の心当たりは、一人しかいない。エディは渋々受話器を取った。

「はい。ジャクソン。…ああ、いるよ」エディは無言で受話器をジェフに差し出した。気持ちは、また暗闇に戻ったような気になる。

「俺?…はい、ああ、お前か。…ああ、え?もう?…分かったよ、けど…え?…ああ、分かった」

短い会話で、クリスは切ったようだ。ジェフがエディに受話器を返す。恐らくはまたクリスから何かの提案があり、ジェフが押し切られたのだろう。

ジェフの顔が不機嫌そうに歪んでいる。

「そんなに嫌なら、はっきり断ればいいのに」エディは突き放した。「どうせ、何か言われて押し切られたんだろ?」

「お前はそう言うけどな。こっちはこっちの事情もあるんだよ」

事情。そんな事はエディの知った事ではない。

「それならそれでいいけど、俺の所まで面倒持ち込むのはやめてくれよ」

「俺がいつ面倒を持ち込んだよ?」

「あんたが直接持ち込まなくても、転がり込んで来るんだ。今までだってそうだろ!?!」

これは、明らかに八つ当たりだ。それは、分かっている。しかし。

「俺がそうしたくてしてる訳じゃない!お前、何怒ってるんだ?」

「ああ?排卵日でね、気が立ってるんだよ!だから、ファックの時は中に出さずに、ちゃんと被せてくれよな!」

エディはこれ以上の口論から逃げるため、ベッドから降りてバスルームに向かった。

「で、飛び出して来たってわけ?」

クリスはくすくす笑いながら、不貞腐れて煙草を吸うジェフを見た。

明け方エディの家に電話したのは、正解だった。この男が、あの気の強い女とのデートを上手くこなせるわけがない。疲れただけで終わってしまい、逃げ場所としてエディのところに転がり込んでいるに違いない、と踏んだのだ。嫌な事があるとすぐに、母親に甘えるかのようにエディのところに逃げ込むのだ、この遅い体の持ち主は。またエディも、こちらが思った通り、自分の声を聞くなり不機嫌になったのが分かった。ポーカーフェイスをまとっているつもりだろうが、嫉妬を押し殺しているかと思うと、クリスは楽しくて仕方がなかった。一度は、あの取り澄ましたエディの顔を歪ませてやりたい。これもクリスの密かな欲望だった。目の前にいるジェフは、そのための道具に過ぎない。例の女優との計画も、単なる退屈しのぎのひとつだ。

ジェフは、クリスからの電話の後、突如怒りだしたエディに腹を立てて、そのまま出てきたという。自分は今夜は夜勤なのを良い事に、帰宅時間を見計らってクリスを叩き起こしたのだ。普通のクリスなら居留守を決め込むか、玄関のブザーのコンセントを抜いておくところだが、今日は特別だった。

エディからもクリスからも鈍感、と言われていただけあって、エディの怒りが嫉妬である事に全く気づ

いている様子はない。理不尽な怒りを向けられたことに、単純に立腹している。今まで全く嫉妬の欠片も見せなかったエディ自ら、そのチャンスを与えてくれた。これは利用すべきだろう。

「あいつか謝って来るまで、絶対に口もきいてやるもんか」

ジェフは、まだ憤懣やるかたなし、といった顔で、手元のクアーズの缶をあおる。

「全く、あんたも子供だねえ、」

クリスは口の端を上げて笑った。その言葉に、ジェフの眉がきつと上がる。

「誰が子供だって!?エディのほうがよっぽど子供じみてるよ!」

ジェフは声を荒げるが、その後すぐに小さな声で自信無さげに付け足す。「少なくとも、今回の事に関しては、だけど」

「まあ、今回は、それでよしとしどころ。…元気だよな、全く。あんたはいいけどさ、俺は夜勤明けで眠いんだけど…」

クリスは苦笑しながら、組んだ脚の上で頬杖をつき、上目遣いにジェフを見た。途端、自分のあまりに不躰な訪問に気づいたジェフの顔が、絵の具でも撒いたように紅潮する。

「いや、構わないけどさ…徹夜明けって、妙に欲情しないか？」クリスの手が、ジェフの膝の上に乗せられた。ジェフが一瞬 たじろいだのが、クリスの手のひらに伝わった。俯いていた視線が、クリスを捉える。膝から徐々に上に這い上がる手に、ジェフは一切抵抗しない。ゆっくりとジェフの右手があがり、クリスの手首を掴んだ。

エディは、ノズルから滴り落ちる雫を受けながら、シャワー・カーテンを開けた。体から疲労感はずけきらないが、眠気はとうに吹き飛んでしまっていた。二十分ほど前、バス・ルームに入った際に勢いに任せて引いてしまったため、シャワー・カーテンが数箇所、レールから外れている。

ジェフは、もう家に着いたのだろうか。先刻は、大人げない態度を取ってしまった。エディがバスルームに入ってすぐ、寝室の方から物音がしたのは、ジェフが出ていった気配だろう。彼の性格は、大体把握している。なのに、つい、声を荒げてしまった。自分のどういう言葉に、ジェフがどういう反応を示すか、重々承知しているはずだったというのに。クリスの前では、自分に対してのように強く出られない事もよく分かっている。これまでも、何度となく目にしてきた。実際にクリスがジェフに手を出して以来、その傾向は更に高くなっているはずだ。それでも戻ってきたのだ、ジェフは。しかし、その安堵感は、ものの見事に打ち砕かれた。たった一本の電話で。

分かっていたのではないのか？いずれ、こうなる事を。分かってながらも、気づいていない振りをしてきたのではないのか？クリスに対して湧き上がる嫉妬を、見えない振りをして来ただけだ。エディも、今回ばかりは認めざるを得なかった。

鈍感なジェフは、はっきりと言わなければ気づきもせず、エディが突然怒鳴った事を、理不尽だと怒っているだろう。彼はそういう男だ。故に、無意識の悪意ともとれる言動を振りまく。普段、職場では無口を装っているのに、そういった言動のほとんどがエディに向けられたものだが。

自分はクリスに嫉妬している。直接ジェフにそう言えばいいだけのことが出来ない。きっと今頃、クリスの家で愚痴を零しているだろう。今はクリスもまだ新しい玩具に興味がある状態だが、今にあの大きな駄々っ子に手を焼くことになる。その時、またジェフは戻ってくるだろう。何食わぬ顔をして。それでも、自分はきっと、そんなジェフを受け入れてしまうのだろう。やはり、何もなかったような顔をして。

何事もなく、新年の休みが過ぎ去った。結局、どこかに出かける事もなく、ただ家で、ゆっくりと過ごして時間は過ぎていった。

スコットから、アネットの実家に行く誘いも受けていたが、さすがにそれは遠慮した。幸い、職場の連中からの無理な誘いもなく、久しぶりに一人の時間を満喫出来た。

あの痴話喧嘩から、ほぼ二週間。当然、何の連絡もない。エディは密かに期待している自分に気がつき、自嘲の笑いを浮かべる。最初にジェフをからかい、手を出すように仕向けたのは自分だ。元から、遊び目的だったはずだ。みるみるこちらに傾く彼の様子を、面白がっていたのは誰だ？それが、自ら嫉妬するまでになってしまった。これは、彼を弄ぼうとした報いなのだろう。弄ぶ？しかし、エディはジェフを遊びの対象と考えたことはあっても、捨て去ることは想像したことはなかった。過去の相手も、ただ、疎遠になって別れただけで、特にこちらから切って捨てたことはない。このままいけば、長きに渡るパートナーになりそうだと感じる頃には、エディの方から連絡を取らなくなることが多かった。そして気づけば時間は経ち、消滅している。何度、それを繰り返しただろう。何故？それは、自分でも理解していない事だった。

電話の電子音が鳴り、エディは受話器を取った。

「はい。ハリス&ディップル…はい、ジャクソン。ああ、ジュディスか。え？…うん。分かった。じゃあ」

「エディ、新年早々女からか？」

同僚のニールがからかう。

「そんなんじゃないよ」

笑いながら返す。ジュディス・ニーマイアからだった。どうせ、話の中身は分かっている。聞かされる内容も。それでもエディは、時間を取って欲しい、という彼女の依頼を受けた。自分の下心のために。エディには様子が分からないジェフの話を、彼女は聞かずとも教えてくれる。

エディは頬げに顔にかかる髪をゴムでまとめて、調剤室へ入った。

「ちゃんと、約束を取り付けてきたよ。『稲ぎく』でディナーだ。あの、マークも了承済みでね」

ジェフはネクタイを緩めながら、クリス宅のリビングに入ってきた。と、足を止めて、暖炉に目を向ける。

「これは、誰だい？親戚か？まさか、お前の隠し子じゃないよな」

ジェフが、暖炉の上に飾られた少女の写真に今更ながら気付いた。自分の部屋やエディのアパートと違い、クリスの家には、写真の類はこれしか置かれていない。

巻き毛をポニーテールにして、淡いブルーのギンガムチェックのリボンと、お揃いのサマードレス。庭に植えられているのであろう、大きな木から下がるブランコに座り、屈託ない笑顔を向けている。

「妹だよ」

「随分と年が離れてるんだな」

「よく見てみなよ。古そうな写真だろ？その写真を取った翌月に死んだよ。生きてたら俺と同年。」

「すまない…」

ジェフは、慌てて、写真を戻した。

「別に。大昔の事だ」

クリスは、無表情で返す。

妹のティナは、10歳のままで時を止めた。

クリスティーナ。栗色の巻き毛に、クリスと同じ鳶色の瞳。

面差しは違っているけど、生まれてから、いつも一緒にいた双子の妹。

(クリスはあたしと同じ年のくせに、なんでも知ってるのね。パパやママみたいに)

(そう、知らなくていい事もね)

『クリス！私、神様の所に行くの。汚れちゃったから、天国には入れて貰えないかも知れないけど』

(ティナ!!)

母の実家から戻った日。そう言って、少女は微笑み、こちらを向いたまま空を飛んだ。

高層アパートのベランダから。

駆け寄ったクリスの手は、つい先ほどまでいた少女を包んでいた空気を抱き締めた。

神様の依怙贖身か、死に顔には大きな目立った傷はなく、仰向けに横たわる下に、真っ赤な絨毯が敷き詰められたかのようにだった。

赤い薔薇の花束に包まれてるようだ、と妹の顔に見惚れていると、母から平手打ちにされた。

『妹が死んだのに、この子は、涙も見せないなんて!!』

残酷過ぎる情景を、死者と同じ10歳の子供に見せないように留意するより、母にはもっと大事な事があるのだろう、とクリスは子供なりに感じた。

僅か10歳の妹に、病院の資金繰りの為に幼女趣味の親父と婚約させ、相手が肉体関係を迫ったのを黙認したのは、誰なのだ？今、ここで悲嘆にくれている女と、昼間一緒にいた祖母じゃないのか？人殺し。

10歳の子供だからと、何も知らないと思っているのか？

ティナの言う通り、自分は『何でも知っている』のだ。

クリスは、警官に引き離されるまで、血の気を失った動かぬ妹の傍を離れようとしなかった。ただ黙って、涙も見せずに。

「同じ年って事は、双子か…」

「俺が母親似。妹は、隔世遺伝か、母方の祖母に似てたな。この時、もう婚約者がいたんだ」

「ちょっと、待てよ。この子の年は、まだ小学生だろ!？」

「親同士の都合ってのは、そんなもんさ」

(その『都合』って奴で、ティナは死んだ。俺には、10歳近く年上の、まだ2回しか会ってないフィアンセが出来た。これも、その『都合』ってヤツだ)

「彼女の退院は？」

話題を変えようと、クリスがジェフに尋ねる。

「明日の午後」

「なるほどね。それでか…」

クリスは嬉しそうな表情をした。クリスも既に彼女、メリッサとの約束を取り付けていた。それで、週末の約束をクリスに提示してきたのだろう。退院日を教えなかったのは、ジェフとのバッティングを避ける為だ。

「何が？」

「彼女との約束さ。年末に言ったろ？退院が決まったら、食事を一緒にする口約束をしたって」

「ああ、その事か」やはり、ジェフは面倒臭そうだった。彼には、女性を扱うのは無理だろう、とクリスは思う。同性であるエディですら、上手く扱えない。それどころか、彼に我が儘放題である自覚すらない。そ

ろそろ、彼との遊びも潮時かも知れない。

「なあ…」

ジェフが腕をクリスの上体に絡ませ、引き寄せようとした。その体を押しよける。「今日は夜勤なんだよ」

「でも、まだ昼だぜ」

ジェフは尚もクリスを抱きすくめようとしたが、腕の囲みをかいくぐり、クリスが体を離す。

「その前に出掛けるんだよ。帰ってくれるか？」

笑顔をジェフに向ける。渋々、といった様子でコートを手を取ったジェフが玄関へ向かった。その彼に冷やかな目を向け、クリスは着替えのためにウォークイン・クローゼットに向かった。

ジュディスから指定されたのは、前回と同じ、店の前のダイナーだった。テーブル席で忙しげに煙草を吸っていた。目の前の灰皿は、既に吸殻が高く積もっている。約束の時間には間に合っている筈だが、かなり彼女が早く来ていたのだろう。

「待たせちゃったかな？」

一応の礼儀で聞いてみる。

「ううん。私がせっかちなよ。早く来過ぎたの」

「煙草、吸うんだね」

言われて、ジュディスは、指に挟んだ煙草を見る。「止めてたんだけどね。復活しちゃったのよ」

そういうジュディスの目に、みるみる涙が溢れてくる。

「おい、ジュディ、どうしたの？」

エディは慌ててポケットからくしゃくしゃになったハンカチを取り出して、彼女に渡す。涙をぬぐい、紙ナプキンを掴んで鼻をかみ、ジュディスは顔を上げた。

「ごめんなさい。ドクター・テイトの事、聞いてる？」

「いや。クリスマス前後から会ってないんだ」

ジュディスが意外そうな顔をした。しかし、事実なのだから、しょうがない。

「じゃあ、『賭け』の事も？」

恐る恐る、といった様子で聞いてくる。賭け？クリスが何かジェフに持ちかけでもしたのだろう。

「去年、ソープ・オペラの女優がうちに運ばれて来たの。メリッサ・エルウッド。知ってる？『レストレス・アンド・ワイルド』の主演女優」

「いや」そもそも、エディはテレビを見なかった。ジェフもそのはずだ。

「彼女のこと、ドクター・テイトと、眼科のドクター・デ・ガーモが取り合いしてるのよ。今じゃ院内で、どちらが彼女を落とすか賭けてるわ」

(そういう事か…)

「でも、噂だろ？」

「違うわ。だって、私、聞いたのよ。ドクター・テイトが、メリッサを食事に誘うのを見たって。仲良しの同僚からね。信じられる？あのドクターが!?自分から誘うなんて…やっぱり噂は本当だったのよ」

「噂？」

「他の人に…勿論、ドクターにもよ、言わないでね。彼があんなに身持ちが固いのは、ゲイかそれとも恐ろしく理想が高いかどちらかだって」

確かに外れてはいないが、事実を明かすわけにはいかない。

「つまりは後者だったって事よね。…私と食事に行った時だって、何も言わなかったのよ?もうその時彼女

はうちに来てたのに！それならそうって、最初から言ってくれば、変に期待しなかったのに！」ジュディスは更に鼻をかんでいる。

「あんたもあんたよ、エディ！友達なら、ドクターのそういう所は分かってたんじゃないの!?それとも、そういうのを隠すのも、男の友情って奴!?!」

ジュディスは、充血した目でエディを睨む。お鉢がこちらに回って来た。ジェフの厄介事は、本人と会ってなくてもついて回るようだ。

「いや、そういう事じゃ…」

「じゃあ、どういう事？まさか、分かってて笑ってたんじゃないわよね？」

「そんな酷い事するわけないだろ！あいつがその女優に熱を上げてるってのも、今聞いて知ったばかりなんだぜ」

「の割りに、驚かないのね」

まだ不審気なジュディスを見て、エディはため息をついた。

「確かにね。ただ、あいつは…ジェフは、単純な男なんだ。気を悪くしないでくれよ。あいつが君とのデートを承諾したのは、その、君の迫力、と言ったら語弊があるけど、勢いに押されて受けたんだと思う。今回の彼女にしても、おそらくアプローチは受けてた筈だよ。つまり、彼女の場合、君より接触時間が長かったり、積極的だったんじゃないかな。それで何度か話してるうちに、情が移ったんだよ。驚かなかったのは、そういう事が予想出来たからなんだ」

この偽善者め。エディは心の中で、自分に対して毒づいた。親身になって聞いてやっている振りをして、その実、自分の聞きたい事を引き出そうと躍起になっているのだ。女々しい奴。ああ、どうせ、卑怯な奴だ。己の欲望に忠実なクリスに比べて、自分はどうかんだ？

「でも、諦める必要はないんじゃないかな。望みがあるって断言出来ないけど。上手くいく時は、放っておいても上手くいくもんさ。俺は運命論者じゃないけど、そう思うよ。上手く行かないってのは、その方がお互いにとって幸福な結果なんだよ」

ジュディスに言い聞かせている言葉は、むしろ自分に対してのものだ。そうしなければ、いくら予想出来た事でも、他人の口から事実を聞いた動揺を隠し切れなかった。

帰宅すると、迎えてくれたのは、留守番電話の点滅するランプだった。エディは、ライダース・ジャケットを脱ぎながら、ボタンを押した

『メッセージ ハ 1ケン デス。』続いて声が流れ出す。

『スコットだ。帰ったら電話してくれ。A.S.A.P. (as soon as possible 可能な限り早く)』

エディは深いため息をついた。スコットの声の調子からいくと、あまり良い話とも思えなかった。受話器をあげ、手が覚えている番号を押した。

「あ、アネット?エディだけど、いる?…」

『お前、今日、誰とデートしてた?』

(開口一番、これだ…)

「デート?今日は愚痴に付き合わされたただけだけど?お前もよく知ってる、あのジュディからね」

『ジュディ?ああ、あのERのか。なら、いい』

スコットの声は、始めの勢いを失っている。となると、恐らく誤解したベスが泣きついたか。

「ベスから、何か言われたのか?俺は彼女が泣くようなことは一切してないからな。何もしないんで、泣いたっていうなら話は分かるけど」



『お前の事、庇って何か隠してないか？って聞かれたよ。ああいう、取り乱さない、おとなしい子に追求される方が怖いな』

「今日はジェフが女優さんをクリスと取り合いしてる件で、さんざんジュディの愚痴聞かされて、泣き出すのを宥めて、大変だったんだぜ」

『それは、俺もだよ!男ってすぐにはぐらかして逃げようとするってさ。ま、実際耳の痛い話だけどね』

「単に、丸く収めようと努力してるだけだと思うけど、俺は」今日は、女難の日なのだろう。うんざりとした声で返した。

『お前、本当にいいのか？それで』

「何が？」

『自分まで誤魔化してると、取り返しのつかない事になるぞ』

スコットの声は、からかうようなものではない。

物事を丸く収めようとするれば、誰かが苦い思いを飲み込まなければならない事もある。ぶつかる事を恐れて、傷ついたことすら、見えない振りをすることも。時には、やせ我慢をしてまで。

格好をつけて取り返しのつかないことになる位なら、恥をしのんでプライドなど捨てて、取り返しに行け。スコットにそう言われている気がした。

『俺はもう、ベスとくっつけだの、何の言わない。元より、彼女にはもう義理は果たしたと思ってるからな。ジュディの事は、俺からちゃんと伝えておく。だがな、ジェフの事はどうするんだ？あいつは今、クリスの野郎にべったりだぞ。院内の噂は別にしてな。こないだも、俺にのろけてきやがったぐらいだ』エディの胃が、きりりと痛む。

『クリスも、今は奴に優しいらしい。けどな、どうせクリスに好きにあしらわれて、お前のところに泣きつきに行くのは目に見えてる。ただし、それは、お前のところに戻るんじゃない。慰めてもらって、また、誰かのところに行っちまう。そうなる前に…』

「分かってるよ、スコットロック」言われなくても、とうに自覚している事だ。

静まり返った部屋に、遠くで走るパトカーのサイレンが響く。エディは黙って受話器を下ろした。

「で、お楽しみの計画は順調に進んでるのかい？」

腹這いになったコリーが、煙草よりは細い包みに火を点けながら言った。特有の匂いが、少ない煙と共に漂う。

「まあまあってとこかな。上手く行き過ぎて、少しばかり物足りないぐらいの感があるけど」

枕を抱え込んだクリスは、ベッドのヘッドボード見つめながら答える。

「もう一波乱欲しいところなんだけどな…」

付け加えるクリスに、コリーは少しだけ煙を吐き出して楽しげに笑う。

「物騒な奴だな…トラブル・メーカー…か」

「ありがたい仇名だな。そんなに褒めないでくれよ。嬉しくて、また、あんたが欲しくなる…」

クリスは寝返りをうち、体をコリーの脇腹に押し付けた。

「さっき、あんなに頑張ったのに？見かけによらずタフだな」

「物足りないんだよ…どっちにしても。で、手伝って欲しいんだけど」

クリスはコリーの手を掴み、自身の両脚の間に導いた。

「何だ？俺も楽しめそうな事？」

コリーは押し付けられた滑らかな手触りの器官を軽く握り、愛撫し始める。

「多分ね。相手はキャリアじゃない事は保証する、レザー・バーでちゃらちゃらしてるような奴でもないから、すれてない。それに…あんたの好きにして良いよ、壊さなけりゃね」クリスはコリーの愛撫に息も乱さず、ゆっくりと言葉を紡いだ。と、ふいに、コリーの手急に力が加わった。クリスが小さく悲鳴を上げる。

「…どうだい？」

「結構」

言うや否や、コリーがクリスの中に侵入し、荒々しく突き上げた。クリスは蹂躪されるがままに、声を高く上げ始めた。

引継ぎを済ませたクリスは、自身の愛車、赤いアルファロメオ・スパイダーに乗って自宅へ向かった。病院から、コンドミニウムまでは、さほどの距離もない。ミッドタウンを北上するには、さほど道も混み合っていないかった。短いドライブを終え、ドアマンに鍵を預けると、すぐに自室に入る。キッチンでエスプレッソ・マシンのセットをして時計を見た。午前9時半。ちょうど、もう出かけていない頃だろう。クリスは受話器を手に取り、エディの自宅の番号を押した。

いつもの囁くような声でメッセージを吹き込むと、音を立てるエスプレッソ・マシンに応える為、キッチンへ向かった。

(エディ、お前が俺を単なる悪趣味な奴としか見てないことを、俺は知ってるよ。けど、お前が平凡に生きたいと口では言いながらも、その道を自分で閉ざしていったのも分かってる。お前は自分で分かってないのか？自分が不幸になりたがってる事を。お前も、俺も、望んでる結末は同じだ。気づかないのか？お前は一体、誰に対して罪を犯したと思ってる？自分を罰したい理由は何だ？)

「あれ…ジェフじゃないか？」

妻のリンと共にパーク街を歩いていたマイケルは、数メートル先でタクシーを降りた二人連れに目を向けた。二人共、レザー仕立てのトレンチコート姿に、女の方は、この黄昏時にサングラスをかけている。

「ジェフ！」

マイケルの声に、男の方が振り返った。やはりジェフだ。マイケルは、小走りに二人に駆け寄った。リンも後を追う。

「マイク。どうしたんだ？診療所はいいのか。放っておいて」

「たまにはね。今日は、大学時代の仲間と会う約束してるんだ。待ち合わせに安いホテル選んだら、クリスの奴、怒る怒る」

くすくすとマイケルは笑う。しかし、目の前の二人は引きつった笑みを返した。

(やっぱり、スコットが言ってた例の…か)

リンがマイケルのコートの袖を子供のように引っ張った。

「ジェフ。ところで、こちらは？」

さすがに夫婦である。阿吽の呼吸で、妻の要求を飲み込んだマイケルは、ジェフに遠慮ない質問を投げる。屈託のない笑顔を浮かべて。彼は、その笑顔が武器になる事をよく分かっている。

ジェフはマイケルの質問にたじろいだが、女の方が自らサングラスを外し、マイケルに向き直った。

「メリッサ・エルウッドです。あなたも、お医者様？」

大きく波打つ栗色の髪に、深いジェイド・グリーン色の瞳。影を落とさんばかりの睫毛は漆黑だった。見つめられたマイケルは、やに下がり、リンに肘うちされた。

「え、ええ、一応」

「医者って言ってもピンからキリまであるわ。うちは、底辺を這い回ってる方なんです」

リンの言葉に、多少の棘が混じる。

「メリッサ、もう行かないと」

あまり会話を長引かせたくないジェフが、メリッサを促す。

「あ、うちもだ。クリスの奴、遅れたらうるさいからな」

やはり、二人の顔が一瞬曇るのを、マイケルは見逃さなかった。

「じゃあ、ジェフ、メリッサ。素敵な夜を」

「ありがとう。そっちも、お仲間によろしく」

レザーコートの二人は、そそくさと目の前のウォルdorf・アストリアへ入っていった。

「ねえ、確か彼女、女優さんよね。なんか、ジェフも変じゃなかった？」

「さあね。人それぞれ事情があるんじゃないの？俺たちも急ごう。本当に遅れちゃう」

怪訝そうな顔の妻の肩を抱き、マイケルは人ごみの中を歩を速めた。

「え？」

ジェフは、メリッサのハンドバッグから、ちらりと見えた鉛色の鈍く光るものに目を留めた。

「物騒でしょ？マークが持たせてくれたのよ。護身用につて。デートの邪魔はしたくないけど心配だからって」

バッグの口を少し大きく開けると、見えたのは、22口径のベレッタだった。殺傷力は低いが、女性でも扱い易い。護身用としては十分だ。しかし携帯しているのが見つければ、逮捕されるのは間違いない。何もトラブルに巻き込まれないように、とジェフは心の中で十字を切った。

「使えるのかい？」

ジェフは恐る恐る尋ねた。メリッサは、バッグを閉じながら小さく笑った。

「マークが教えてくれたわ」

「願わくば、使う機会が永遠に来ないように」

「本当に」

パチンと口金の音がして、クラッチバッグが閉じられると、ジェフはほっと溜め息をついた。

最後にここを訪れてから、一ヵ月半が経とうとしていた。ドアマンは、エディの見知らぬ男に変わっていた。ティムでもなく、もう一人のダグでもない。

「ドクター・デ・ガーモに」

一応、笑顔で声を掛ける。会釈したドアマンは、無言で去った。

クリスからの留守電があったのは、昨日だった。『頼みがあるから、明日の夜7時に家に来て欲しい』と。別に用は無かった。それどころか、仕事が終わるなり、すぐに仕事場を出た。約束の時間までは、まだ1時間もあるというのに。わざわざ、この前にもジュディスと来たダイナーで時間を潰して。

「どうぞ。ドクターが入ってくれ、と」

ドアマンに促され、エレベーターに乗る。ゴンドラが上昇する振動を感じながら、クリスに何か言うべきか考えてみたが、気の利いた言葉は何一つ浮かばない。頼みというのも、何か彼のお楽しみに協力しろ、というものだろう。ろくでもない事を言おうものなら、あの細面を殴り飛ばしてしまいそうだ。断っても良かったのだ。しかし、今となっては、彼がジェフとエディをつなぐ唯一といって良い存在である事が、エディを承諾させた。

小さなベルの音が、目的階についたことを知らせる。ゴンドラから一歩足を踏み出したエディは、深呼吸をした。

ドアを軽く三度叩くと、すぐにドアが開いた。珍しく、黒いベルベットのシャツにジーンズというラフな格好で出迎えたクリスは、患者に向けているのであろう、人当たりの良さそうな笑顔を浮かべている。

「わざわざ呼びつけて、悪かったな」

「いや。用もなかったから、構わないさ」

エディも笑顔を返そうとしたが、失敗に終わった。ただ、顔に細波が起きただけだ。

「まあ、入ってくれ」

リビングに通される。そういえば、この部屋には、まだ来た事がなかった。間取りはジェフのところと同じなはずなのだが、内装に手を入れているので、ずいぶんと印象が違う。壁紙は紋様の入ったペールブルー、リビングの四隅には、アンティークと思われるスタンドが淡い光で部屋を照らしている。蛍光灯のような無粋な灯りはない。カーテンも、同じ色調で揃えられている。

「実は、味見役をして欲しいんだよ」

「味見？」

思わず、素直に聞き返す。

「ああ。事情は今から話すよ。ちょっと掛けて待っててくれ」

示された、モダンなデザインのソファに腰を下ろす。と、テーブルの上にある物に目が行く。見覚えの

ある、黒いセル・フレームの眼鏡があった。手に取ってみると、記憶に間違いのない事が分かる。つるの片方のビスが取れている。一つだけだから大丈夫だ、普段はコンタクトだからと言って、エディが何度注意をしても、ジェフは聞かなかった。

(ジェフ…)

「こないだまで、うちの病院にソープ・オペラに出てる女優が入院してたんだよ。で、うちで手料理を振舞うって約束しちまってさ。実家にいた家政婦と同じ出身地だったんで、故郷の味を再現するって豪語したものの、出来たには出来ただけど、さすがに自信なくてね」

すぐ隣にあるダイニングにいるクリスが、珍しく大きな声で事情を説明している。この前、ジュディスから聞いた事情を。

「用意できたぜ」

ダイニングに行くと、形だけは、ミートローフのディナーが用意されている。

「一応調べて、レシピ通りには作ったんだ」

「へえ、料理は自分で作るもんじゃないって言った人間とは思えないな。よっぽど落とすのに力入れてるんだな」

つい、棘を含んだ口調になってしまう。

「まあ、田舎の味だけど、食べてみてくれよ」

クリスの笑顔は、まるで子供のように無邪気そう。目的は別として、料理は本気で取り組んだのだろう。エディはフォークを取り、グレービーソースのかかった端の方を、一口大に切った。

「ソースも自分で作ったのか？」

「もちろん」

クリスは自慢気だ。そのあまりの子供っぽさに、思わずエディは噴出しそうになる。

そのまま口に入れる。ソースの味は、いかにも手作り、といった味がする。玉葱の甘味と、刻んだマッシュルームの風味が口に広がった。

「旨いよ」

クリスの表情が、ぱっと輝く。

「ワイン飲むかい？赤の旨いのがある」

「ああ、貰うよ」

どうせ、今日は地下鉄で来たのだ。夕食も取っていなかった。エディは空腹だった事を改めて思い出し、皿の上のミートローフに更に手を伸ばす。

「もう少し切るよ」

少し厚めにスライスされたものが、皿にサーブされた。注がれた赤ワインにも口をつける。苦味と、ほんのりと湿った土のような香りが鼻に抜けた。味覚が発達していると、経験がほとんどなくとも、ある程度料理は出来てしまうのかもしれない、とエディは思った。

「彼女、メリッサ・エルウッドっていうんだが、田舎の子なんだよ、ウィスコンシンのね。ジェフと俺と両方を天秤に掛けてるんだ。どっちを選んだ方が自分にメリットがあるかってね」

相手も、それなりに下心あつての事のようにだ。

「ショウビズの世界なんて、浮き沈みの激しいものだ。何某かの安全パイが欲しいんだろう。俺は、ジェフと比べたら女受けは良い方じゃないのは、自覚してる。だから、ドメスティックな線を狙おうと思ったんだよ」

それが、この料理という訳か。

「で、これで、大丈夫そうかな？」クリスの表情は、まだ不安気だった。

「その彼女のウィスコンシンの味ってのは分からないけど、ちゃんとミートローフになってるから安心しなよ。味も十分だ」

苦笑をクリスに向ける。結局、サーブされたものは全て平らげてしまった。

「頼みって、これだけで良かったのか？」

「ああ、十分だ。助かったよ」

「じゃあ、俺、帰るよ。明日も仕事がある」

本当にいいのか？ジェフの事は？エディは軽く頭を振って立ち上がった、つもりだったが、そのまま椅子にまた座り込んでしまった。目の前の視界が揺らいだ。体が熱い。立ち上がろうとするが、体に力が入らない。

徐々に、目の前が暗くなるのを感じて、エディは闇の中に落ちていった。

目を覚ますと、自分が裸にされ、どこかに横たわっているのが分かった。

「気がついたか？」

聞き覚えのある声がした。暗いブラウンの髪、同じく暗い色の瞳。そして差し出される、血にまみれた手…。

「リチャード…どうして！あんたが、どうしてここに!？」

エディは急いで体を起こそうとするが、自由に動かない。自分の意思とは裏腹に、緩慢な動作で起き上がる。が、その上体は誰かに羽交い絞めにされた。

「怖がらなくていい」

リチャードは優しく微笑み、エディの頬に手を伸ばした。あの時のように。体はまた引き倒され、血にまみれた手が体を這い回る。羽交い絞めは解かれたが、自分を覗き込む人影に気づく。あの時の、エスコート・サービスの女だ。腹部がぱっくりと開き、体内を晒してエディに微笑みかける。

「止めろ…止めてくれ…」

逃れようとするが、リチャードの腕がしっかりとエディの下肢を捉えていた。意識を失う前の体の熱さは、まだ続いている。心臓は早鐘のように打っていた。耳に入るのは、自分がつばを飲み込む音、そして鼓動、荒い息遣い。

「頼むから…もう解放してくれ！」

もがけばもがくほど、蜘蛛の糸に絡めとられるような感覚に襲われる。

「心配するな。リラックスしてろよ、可愛い子ちゃん」

リチャードの体が覆い被さって来る。囁くような声で語りかけながら。内蔵を晒した女が、エディの頬を撫でる。

「お願いだ…止めてくれ！」

エディは、子供が嫌々をするように、激しく頭を振った。両肩が、血まみれの女に押さえつけられた。

「コリー、来てくれ。寝室へ運ぼう」

クリスの呼びかけに、レザー・パンツだけの姿のコリーが、寝室から姿を現した。

「このシス(お嬢さん)かい？『薬屋さん』じゃないか」

「ああ。どう、好みかい？」

「確かに、苛めたくなる気持ちは分からないでもないな」

コリーは口の端を上げ、酷薄そうな笑みを浮かべた。

「何飲ませたんだ？」

「ゾピクロン。スクロピロロン系の超短時間型睡眠導入剤だ。それと、MDMA。MDMA が効いてくるまでは、もう少しかかるだろう。脚を持ってくれ」クリスは、椅子から崩れ落ちたエディの両脇に腕をかけた。

「意識のない人間は重いもんだってのは、事実みたいだな」

エディの両脚を抱え上げたコリーが漏らした。

「だからナース達は遅くなるのさ」

全く意識のない人間は、起きている時よりも重い。エディは、さほど大柄でもジェフのように筋肉質でもない。しかし大人の男一人となると、それなりの体重はある。

寝室まで運ぶと、ベッドの上に放り投げるように横たわせる。

かすかにエディが声をあげた。まだしばらくは目を覚まさないだろう。クリスはダイニングへ戻った。

飲み残しのワインをシンクに流し、ミートローフをダストボックスのペダルを踏んで入れてしまう。新たに専用のクーラーから、シャルドネを取り出し、栓を開けた。グラスは2つ。ボトルも一緒に寝室へ持って行く。

エディはいったいどんな夢を見るだろうか。

寝室では、カウチで寛いだコリーが退屈そうにしていた。

「後は好きにしてくれていい」

手を離れたクリスはコリーに告げた。少し離れてカウチに腰を下ろし、ベッドの上の光景を眺める。

エディは目を覚ましてから、ずっとリチャードという名前を呼び続けている。以前、ジェフの家で聞いた、あの男の名前だ。どんな夢をみているのか。恐らく、聞かせてくれた話の再現なのだろう。子供のように怯えながらも、コリーに抱かれ、喜んでいる。いつものポーカーフェイスは、跡形もなく消え去っていた。

「いい夢みさせてやってくれよ」

コリーに押さえつけられたエディは、荒々しく犯されながらも、抵抗出来ずにいる。弱々しく、首を振り続けているだけだ。

ジェフをこちらに引き寄せた際、クリスはエディがなんらかの反応を返してくるのを待っていた。しかし、何もしようとはしてこなかった。ただ、言いたい事を懸命に抑えているだけ。それもまた一興だったが、まだ物足りなかった。今夜も、本当はジェフの事を切り出したかったに違いない。息を荒げ、声を上げるエディを見ながら、クリスは、興奮が抑えられなかった。無意識に、手が両脚の間に伸びる。いつに無い興奮から、そこは普段以上に張り詰め、その存在を強く主張している。そっと握り撫でると、体に電流が走る。クリスは、コリーに突き上げられるままのエディを見ながら、小さく声を上げた。

「クリス、こっちへ来てお前も入れよ」

クリスは立ち上がり、身に着けた物を床に脱ぎ落とす。ベッドに上がると、コリーに導かれるまま、エディの顔を跨いだ。コリーの手がクリスの両脚の間に伸び、エディの口元へと誘導する。クリスは意図を悟ると、コリーの手を払い除け、自らエディの口の中へと差し入れる。

「気分はどうだい？お姫様」

「悪かないね」

クリスはコリーの顔を両手で挟んで引き寄せ、唇を求めた。互いに舌を絡め合っている間にも、エディの乱れた呼吸と、くぐもった呻き声が聞こえる。下肢に絡まるエディの舌と唇が作り出す感覚よりも、顔を歪ませ、舌を絡めているエディの顔を見ている方が、よほど興奮させてくれた。もっと傷つけたい。自

分を憎むほどに。残酷な欲求が、クリスの体の中でむくむくと沸き起こる。

大きな波が訪れようとしているのを感じ、クリスは腰をエディの口元に押し付けた。一度放ってしまうと、ベッドから降りて、カウチの傍のテーブルの引き出しを開けた。ポラロイドを取り出し、エディの顔から体全体が入るよう構えた。

「おい、俺の顔は外してくれよ」

始めに狙った角度は止めて、構えなおす。角度を変えて、もう一枚。ファインダーの向こうで、コリーがクライマックスを迎え、声を上げた。



目が覚めたエディは、酷い頭痛に頭を抱えた。

体は鉛の様に重く、頭の中ではビルの解体工事でボーリングでもやっているかの様だ。喉もからからに渴いて、いがらっぽい。昨夜、クリスに頼まれて、ミートローフの味見をさせられたところまでは覚えている。そこからの記憶は、途切れていた。

サイドテーブルのデジタル時計は、11時半を指している。本来なら、とっくに出勤している時間だった。ふいに電話が鳴る。店からだろうか。

「はい、ジャクソン…あ、ダンか?悪い。体調が悪くて、電話出来なかったんだ。あ?そんなんじゃないよ。悪いな。ああ」

受話器を置こうと、電話機に手を伸ばすと、何か紙のようなものが手に触れる。それは、ひらひらとテーブルから舞い落ちた。エディは額を押さえながら体をゆっくりと起こし、更に時間を掛けて屈み込み、落ちた物を手に取った。

(これは…)

思わず息を飲み、ベッドに座り込む。落ちていたのは、1枚のポラロイド。写っていたのは、エディ自身のあられもない姿だった。どう見ても、濡れ場にしか見えない。相手の顔は、見切れていて映っていない。見覚えのない、誰かの寝室。しかも、誰か分からない男を相手に、写真の中の自分は喜んでいるようにしか見えなかった。体中の血が引いていく音が聞こえたような気がする。

恐らく、クリス手製のミートローフか、もしくはワインの中に、何か仕込まれていたのだろう。頭痛以外にも全身の倦怠感がある。これは、以前に経験したものとよく似ている。経緯は判然としないが、恐らく仕込まれた薬のせいで人事不明の状態となり、こんな無様な写真を撮られたのだろう。

(クリス…お前は俺に何がしたいんだ?これが、マイケルのいう『偽悪的行動』だというなら、お前の望みは何だ?俺に憎まれる事か?俺は、そんな馬鹿馬鹿しい手には乗らない)

エディは写真をくしゃりと握り締め、サイドテーブルの上のライターに手を伸ばした。ジェフの為に用意してある灰皿の上で、ポラロイドに火を点ける。見知らぬ男に抱かれて、喜びに顔を歪ませたエディの顔が、火に包まれて更に歪んで灰になっていく。

「おはよう。昨日は悪かったな」

「おい、エディ。お前大丈夫か?顔色悪いぞ」

昨日電話をかけてきたダンが顔を覗き込んで指摘する。長身で、頭ひとつ背の高い彼の顔を平手で軽く叩き、エディは力なく笑った。

言われるまでもない。今朝、バスルームで鏡を見た時、自分でも情けなく思ったのだ。こんな時、女なら化粧で誤魔化せるのだろうが。

「いい加減、歳には勝てないんだから、悪さも大概にしろって事かな」

無理して笑いながら渦巻く髪を束ね、タイムカードを手にしたところで、背後に視線を感じた。

「おはよう、ベス」

「あ、おはよう。もう大丈夫なの?」

やはり、性格は良い女なのだ、彼女は。本心から、エディのことを心配しているのが分かる。声をかけようか躊躇しながらも、こちらの様子を伺っていたのだろう。

「ちょっと疲れがたまってたんじゃないかな。昨日、よく寝たから大丈夫だよ」

返す笑みも、自然と優しいものになる。たとえ恋愛感情はなくとも、だ。

「その体調じゃ、無理よね」

恐る恐る、といった様子でベスが続ける。

「何が？」

「あの、もし良ければ、今夜暇？夕食、一緒にどうかと思って」言うなり、彼女は俯いてしまった。確かに体調は芳しくないが、一人であるよりは、彼女となら、まだ気が楽に過ごせるかもしれない。気分転換としても。

「大丈夫だよ。行こう。店は？もう決めてるの？」

ベスの顔が上がり、明るい笑顔をエディに向けた。

「よおエディ。何があったか知らないけど、そうやって良い事もあるって事だ」

背後から、ダンの冷やかす声がある。

「うるせえな」

「じゃあ、また夕方に」

ベスは先に調剤室へ入っていった。エディは、スコットがどうやって彼女を宥めたか、分かったような気がした。そして、そこには、アネットの助力があったであろう事も。

ベスが見つめてきたのは、リトル・イタリーにある、こじんまりとしたイタリア料理の店だった。既に予約をしていたのだろう。店に入るとすぐにベスが名乗り、給仕の男が席に案内してくれた。男女二人組ということも考慮してか、席も良かった。

普段は飲まないが、珍しくベスに付き合っただけで食前酒を頼み、前菜にはシーフードを。それと、給仕に選択を任せてワインを1本。メインにはミラノ風カツレツと、チキンのトマトソース煮。サラダを頼むと、パスタやリゾットが入る余裕は無くなった。

食後のエスプレッソを頼む頃には、エディを気遣う様子も減り、随分とくだけてきた。

特に、これといった話題があったわけでもない。同僚の噂話や、自分の故郷の事――彼女は、エディも住んでいた事もある、ブルックリンの出身だった。小さい時の思い出話。主にエディが水を向け、ベスが語った。

エディは、自分でも意外なほど、彼女の存在を嫌がっていない事に驚いた。これも、クリスに酷い目に合わされたせいかも知れないが、気持ちが安らぐ時間が持てることは幸いだった。

エスプレッソが運ばれてくるまでの間に、ベスが化粧室へと席を立った隙を狙い、給仕を呼んで勘定を済ませる。

彼女といる時間は確かに心地良かった。しかし、これでいいのか？と囁く声が頭の中に響く。父と同じような道を歩むのか、それとも、完全に方向転換出来るのか？と。

エスプレッソに口をつけ、ベスが語る小さい頃の思い出に耳を傾けた。父親に連れられ、コニーアイランドに行ったこと。セントラル・パークの動物園ではしゃいで、迷子になりかけたこと。父親におぶさって眠った時の広い背中が暖かかった事。母親の作るプレスリー・サンドが美味しくて、よく真似をしたこと。キッチンで、よく一緒にビスケットを作ったこと

両親に可愛がられて育ったのだろう。彼女が語る両親の姿は、まさに理想の親そのものだった。エディは、いつのまにか羨望の眼差しをベスに向けていた。

「素敵なお両親なんだね」

エディの言葉に、ベスの顔が一瞬曇った。

「ええ。とても素敵なお両親だったわ」

「だった？」

「死んだの。私がハイスクールを出てすぐに。卒業旅行で、友達と西海岸へ遊びに行ってる間にね。乗ってた車に酔っ払い運転の車が突っ込んで来て、大破したって。私がこっちに帰ってきた時には、もう土の中だった…」

「すまない」

「いいのよ。気にしないで。本当に良い両親だったわ。誇りに思ってるのよ」

けなげに微笑む。そう言える彼女が、羨ましかった。いや、彼女からすれば、生きていてくれる方が、よほど良いだろう。

「エディのところは？あまり話してくれないのね」

彼女に他意はない。それは分かっている。

「うちは、幸いにも両親ともにまだ生きてる…多分ね」

「多分？」

「大学を出た時から、帰ってないんだ。連絡も取ってない。今の住所も知らせてない」

「どうして…？ごめんなさい。立ち入った事を聞いたかもしれない」

よく分かっている。さて、どこまでを話したのか。

「あまり、両親とは仲良くないんでね。男は、そんなものじゃないかな？父親は仕事が忙しくて、俺も弟もあまり遊んでもらった記憶がないし。母親も、俺が小さい頃はいつも父親の仕事を手伝ってたから、家政婦のおばさんに可愛がって貰ってたな」

「お金持ちなのね」

「そんなんじゃないよ。弟が出来てからは、母親は、今度は弟にかかりっきりになったからね。料理を覚えたのも、いつも台所で家政婦のおばさんに相手してもらってたからだな」

気づくとベスはじっとエディの目を見つめていた。髪と同じ、柔らかいブラウンの瞳で。

「出ようか」

無意識にエディはベスから目を逸らした。出来れば、あまり自分の家族の話はしたくなかった。

勘定がいつの間にか済んでいる事にベスは軽く異議を唱えたが、即座に却下し、店の外へ出る。時間はまだ8時過ぎ。帰るにしても、中途半端な時間だった。

「飲みに行こうか？」

自分の口から飛び出した言葉に、エディは自分でも驚いていた。ベスの表情が明るくなった。それをイエスと受け取り、エディは近づいて来たタクシーを止めた。

この近くでも良かったのだが、知らない辺りを彷徨って時間を潰してしまうのが嫌だった。エディは、チェルシーの自宅近くの住所を運転手に告げた。ベスも何も言わない。通り過ぎる車のクラクション、エンジンの音、ラジオから流れるモータウン・サウンズが車内を支配していた。

車から降りると、目的の店は目の前だった。時々立ち寄るカフェの地下に、その店はあった。小さな黒板が同じく小さなライトに照らされ、『J o y S t i c k』という名前を浮かび上がらせている。「洒落た名前ね」ベスが笑う。

「こっちだよ。足元、気をつけて」

階段にベスを誘導しながら、エディは自分が一歩先を降りた。半分ほど降りたところで、店がかかっている音楽が聴こえて来る。ピンクフロイドの『あなたがここにいてほしい』だ。ドア開けると、音が少し大きくなる。カウンターに15席ほどしかない、小さな店だ。カウンターの中から、ブルネットに緑の瞳の男がこちらを振り返った。苦みばしった顔を、くしゃりと破顔させる。

「エディ、久しぶりじゃないか！どうしてた？」

「ネイサン、久しぶり。ちょっとばたばたしててね。ご無沙汰して悪かったね」

店の主、ブルネットの男ネイサンに促され、二人並んで座った。他の客がいるせいで、二人はぴったりと肩を寄せ合う形になる。

「俺は、ジン・ライム。タンカレーね」

「私はマティーニを」

第三者が入ると、会話は変わるものだ。さっきの、互いの両親の話題は出なかった。ネイサンがいるお陰で、エディがチェルシーに越してきて、この店に出入りし始めた頃の話に変わる。店の常連客の話、笑い話、ネイサンがウェストポイント（ニューヨーク州内にある陸軍士官学校）にいた頃の、名物教官の話。

同じ飲むにしても、この店に連れて来たのは正解だった。まだぎこちなく見えるカップル、とネイサンが推察したのだろう。ベスも、普段の人見知りか嘘のように、よく笑った。酔いのせいか、体をエディに寄り添わせるように近づけてくるが、さほど気にもならない。エディも深く考える事は放棄し、空いた手をベスの背後に回した。

平日という事もあり、ある程度の時間が過ぎると、客層が変わってくる。はじめは勤め人らしき姿も多かったが、遅くなるにつれ、近所の店に勤務する者、フリーランスで仕事をしていそうな者、あるいは、何をしているのか分からない者が増えてくる。そろそろ引き上げ時かも知れない。エディは、ネイサンに目で合図を送った。

「ベス、そろそろ出ようか」

ベスを促し、立ち上がるが、自分もよろけそうになっている。久しぶりに飲み過ぎたのかも知れない。ベスも同じようによろけながらも、エディよりはましなようだ。

「そこの酔っ払い二人！ 転ぶなよ！」

ネイサンの声に、エディは振り返らずに手だけ振った。ベスを先に上がらせ、自分はその後をゆっくり追う。

階段を上りきると、二人とも転げるようにドアを開けて出た。二人して意味なく笑い、絵に描いた酔っ払いそのままに互いに腰に腕を回し、歩き始める。エディはそのまま南へ誘導した。自分のアパートの方向へ。ベスが、エディの顔を見上げた。

すぐ傍の路地まで来た時、ベスの腕を引いて、陰に入る。急に我に返ったような顔のベスを無視し、小柄な体を抱き寄せた。彼女も無言で、されるがままになっている。

（お前は何をしようとしている？ 本当にいいのか？ この女を不幸にしないと言えるのか？）

頭の中に再び聞こえてきた声を無視し、ベスの顎を引き寄せ、口付ける。

（唇は、男でも女でも柔らかいもんだな）

馬鹿な事を考えていると分かりつつ、舌を絡ませ抱き寄せる腕に力を込めた。

顔を離すと、ベスはそのままエディの胸に顔を埋めた。

「今日、うちに泊まっていかないか？ 一人でいたくないんだ」

その気持ちに嘘はなかった。ベスが、エディの胸の中で、小さくうなずいた。

目を覚ますと、待ち受けていたのは典型的な二日酔いだ。再び頭は酷く痛み、喉が渇いている。

体を起こそうとして、肩に触れる滑らかな肌を感じ、隣を見る。ベスがエディの方に向いて眠っている。途端、昨夜の記憶がジェットコースターのように脳内で再生された。

よくぞ、女とのセックスが出来たものだと思う。最近は誰とも交渉自体なく、女との行為となると、思い出すのも苦勞する程だった。ベッド脇の時計を見ると、まだ6時半。今日は早出で地下鉄で出勤する日だが、時間の余裕はありそうだった。彼女を起こさない様、注意深く体を起こす。

「エディ？」

見下ろすと、ベスが目を覚ましていた。まだ夢の続きでも見ているような表情で。

「起こしちゃったかい？」

「おはよう…」言うなり、枕に顔を埋める。寝起きの不機嫌を悟られないように起き上がり、クローゼットに向かう。客用のバスローブを出して、サイド・テーブルにバスタオルと一緒に載せた。

「夢を見てたかと思ったわ…」

「朝飯、食える？」エディはベスの言葉には応えなかった。

「作ってくれるの？」

「簡単なもので良ければ」

「喜んで戴くわ」

先にシャワーを浴びたエディは、ベスがいない間に朝食の準備をした。買い置きのマフィンを焼いて、スクランブルエッグとオレンジジュース、コーヒーを添えた簡単な朝食を二人で取り、アスピリンを二人で飲んだ。エディが飲む、唯一と言って良い薬を。

流石に同じ服装を2日連続というのも拙いだろうという事で、ベスにはエディのシャツを貸した。いくらエディが大柄でないといっても、小柄な女性であるベスにはぶかぶかだった。

二人で混雑した地下鉄に乗り、よろけそうになる彼女の腰に手を回したエディは、半ばやけくそになっていた。

地下鉄を降りる時点で、エディは軽く深呼吸をした。一緒に出勤する事で、恐らく誰か、昨日目撃していたダンなどに見つかれば、冷やかされる事は免れないだろう。しかし、その事をベスに告げると、時間差で出勤する、と言い出しかねない。そういう気遣いをさせるのは、申し訳なかった。たとえ彼女が内心で望んでいた結果だとしても、エディ自らが招いた事態だ。

今までにも、アリスンの紹介であったり、誰かのホームパーティーで知り合った女性などと、誰かと2人きりで出かける事は幾度となくあった。それは、ジェフにも説明した通り、事実だ。しかし皆一様に、体の関係を持つ事はおろか、唇にも触れず、紳士的に自宅まで送って終わっている。今回、自分の責任とは言え、内心頭を抱えたい気分だった

2人揃って出勤すると、予想通りに冷やかしはあった。いい年をした大人の集まりだけに、あからさまなものではないが、ダンだけでなく、更にアリスンまで揃っては、どうしようもない。エディもベスも、互いに肯定も否定もしなかった。しばらく言わせておけば、冷やかしも止まるだろう、と。それよりも、問題は自分自身だった。今後、彼女とどうするのか。

ベスは心得ているのか、全くベタベタしてくる気配もない。冷やかしを避けるためかもしれないが、誰もいない状況にあっても、今までと変わらない接し方をしてくる。

昨夜、一人でいたくない、とベスに言ったのは嘘ではない。一人でいる事で、あのポラロイドを思い出してしまいそうだった。起きた事の記憶はなくとも、屈辱と、羞恥の感情だけは頭の中に記録されている。それを思い出すと、クリスを殴りに行きたくなる衝動が湧く。ただ、それこそが、彼の望んでいる事ではないのか。自分が我を忘れ、彼に怒りをぶつける事。それを見たいがために、わざわざ悪夢の再現のような事を仕組んだのではないか。そう思うと、心の中で振り上げた拳も引っ込めざるを得ない。

今日が週末で助かった、と思う。比較的忙しい時間が続き、余計な事を考えずに済む。実際手がすくと、ダンに肩を叩かれ我に返る事が午前中だけで数回あった。カウンターに出る日でなくて良かったと思う。

ベスは、逆にカウンターに出ている。ガラス越しに見る限り、エディをことさらに意識する事もなく、いつも通りに見える。患者への当たりも、にこやかだ。

「エディ。誰に見惚れてるんだ？」

またダンに肩を叩かれる。

「え？」振り返ると、にやついたダンが立っている。言われる言葉は、予想済みだ。

「別に。ぼうっとしてただけだよ」

「昨夜は寝不足ってか？」

「何言ってるんだよ」

肩越しにエディの顔を覗き込むダンの顔を、手の甲で軽く叩いた。何日かは、この調子が続くのだろう。

『暫くは縛られたくない』と周囲に言い続けてきた言葉の効力が、尚も続いている事をエディは祈った。

昼休みに待っていたのは、同僚達の要らぬ気遣いだった。わざわざエディとベスが同じ時間に行けるよう他の者が調整に回り、結局2人でランチを取る事になる。これで彼女を無視して、一人で行く度胸はない。店の裏口を一緒に出ると、ベスは急に笑い出した。驚いて、エディは彼女の方を見る。

「ごめんなさい、急に笑い出したら、びっくりするわよね。みんながあまりにも気を遣うのがおかしくて」

ベスは、まだくすくすと笑っている。エディは返事に困った。迷った果てに、苦笑を漏らす。

「とりあえず、ご飯食べに行きましょう」

女は、自信を持つと変わるのだろうか。引っ込み思案に思われたベスだが、今は堂々として見える。あくまでも、エディの前でだが。

2人は並んで歩いた。手を繋ぐこともなく、体を寄せ合うこともなく。店の裏から、通りを1本越えたところにあるダイナーに入り、スパニッシュオムレツにサラダという簡単な食事を済ませる。食後にコーヒーを頼み、一息つく。それまでは、2人ともが昨夜の事を話題にするのは避けていた。もし、ベスが口にしたなら、エディも自分の気持ちも話さなければならない、と覚悟はしていたが、彼女の口からその話題は出なかった。今も、窓の外を眺めている。

「ねえ、エディ」

不意をつかれ、ぎくりとする。「なに？」

「あまり、深く考えないで。あなたが、縛られたくない、特に誰とも付き合う気がないって言ったの、私も知ってるわ」

理由は異なるが、スコットがアネットに頭が上がらないのも分かる気がした。

「ティーンエイジャーじゃあるまいし、真剣に考え過ぎないで。でも、私は諦めが悪いの」

そう言って、ベスはまた笑った。

「ごめん」これは、エディの素直な気持ちだった。

「今まで通りでいきましょ。ね？」

女の方が、やはり強いのかも知れない。

冷やかに動じない2人の態度に飽きたのか、アリスンの広報活動にも関わらず、翌日以降は妙な気を回す事も、事あるごとに冷やかされる事もなくなった。エディもベスも、お互いに以前のままの接し方をした。ベスに貸していたシャツは、綺麗にプレスまでして彼女が持ってくれていたが、人目のないタイミングで手渡してくれた。

正直なところ、エディは肩の荷が下りたと思った。しかし、澱のように若干の罪悪感が残っている。彼女の言うように、自分が深く考えすぎなのか？今まで、相手が男であれ女であれ、行きずりの関係自体が経験のない事だったので、戸惑っている部分もあった。一度でも関係を持つと、その相手とは付き合い始めた。それだけではない。完全なる行きずりの相手は、あまりにリスクが高過ぎる。エディの直接の知り合いでなくとも、HIVキャリアで発症に怯える者や、発症して馬鹿高い病院代に苦勞している者を知っている。

女性が相手だと勝手も違うが、同じ職場内の事だ。しかも、明らかに自分の衝動から、彼女の気持ちを利用した。それを自覚しているからこそ、罪悪感。彼女がもし、ジュディスのような性格なら、『なかった事』と言ってくれるままに考えられるのだが。

週末は、考えても結論の出ない同じ事を、ずっと考えた。しかし、最終的に出た答えは、彼女の再度のアプローチがあるかどうか？だった。それまでは、彼女の厚意に甘えるしかない。

1週間分の食料の買い物から戻ると、闇の中で赤いランプの点滅が奥に見えた。また留守番電話だ。ため息をついて、部屋の灯りを点ける。嫌な予感がした。電話番号は電話帳にも載せていない。番号を知る者もごく限られた相手だ。クローゼットに向かい、防寒用のキルティングのコートを脱いだ。部屋の中は冷え切っていたが、ヒーターをつける気にならず、キッチンで荷物を置き、コーヒーマーカーのセットをする。食欲も失せた。落としたコーヒーマーカーは、大きなマグカップに注ぎ、たまにしか飲まないスコッチウイスキーのボトルをラックから取り出した。カップの半分も入っていないコーヒーマーカーの中に、同じ位のウイスキーを注ぐ。少し温くなったので、そのまま4分の1ほどを一気に飲む。胃の中がかっと熱くなり、冷えた体を温めた。深呼吸をして電話の傍まで行き、再生のボタンを押した。一番聞きたくなかった、囁くような声が流れる。

『エディ、クリスだ。こないだは毒見役をありがとう。おかげで上手くいったよ。それで、今度の金曜日にうちでパーティーをするんだ。こないだ話したメリッサと俺がホストだ。内輪の人間しか呼んでないからリラックスして参加してくれ。時間は、また連絡するけど、多分7時辺りになるだろう。みんな彼女や奥さん連れだから、もし、あんたも誰か「良い人」がいたら、一緒にどうぞ』

予想を上回る内容だ。彼の心臓は、鋼で出来ているに違いない。さて、招待に応えるかどうか。再び、指が覚えている番号を押した。

「エディだけど…あ、スコットか？」

『聞いたか？奴から』

「さっき留守番電話のメッセージ聞いたよ。お前は？」

『俺も、アネットも本当は行きたくないんだがな…俺は同じ職場だし、例の女優も一緒だろ？一応行くよ。ジェフも来るような事を言ってたがな』

ジェフが来る。スコットに電話して良かった、という気持ちと、電話しなければ良かったという矛盾した気持ちが、同時に心に湧きあがる。

「マイクは？」

『あいつは来るだろう。お前はどうするんだ？』

思わず、言葉に詰まる。「まだ、考えてない。お前がどうするか聞いてからにしようと思って…」  
『何を子供みたいな事言ってんだ。どうせ、あいつの事だ。なんか考えてるに違いないからな。気が進まないなら、止めといた方がいいぞ』

それは、エディもよく分かっている。  
「ちょっと考えるよ」結論が出ないまま、電話を切った。

スコットの言う通り、嫌な目に会いたくなければ行かないのが一番だ。しかし、一番心の中で引っかかっているのは、ジェフの事だった。

結局、あのクリスマス・イブから、会う事はおろか、連絡も一切取っていない。このまま終るのか？終らせるのか？しかし、自分から連絡をする勇気も持っていない。電話をかけたところで、会話はぎこちないものになるのが目に見えている。コンドミニウムに直接行くのは、クリスに出くわす可能性があった。しかし、第三者が多数いる中だったら？

気持ちは、半ば、行く事に傾いている。

(お前は一人で行くのか？それとも…)

自分が今考えている事は、姑息で最低だ。しかも、あてつけがましい。またも他人の厚意を利用するのか？それも、よく分かっている。分かっているが…。

答えは出たのも同様だった。自分に行くだろう。『彼女』を誘って。  
「ベス、今、ちょっといいかな？」エディは、昼休みに裏口を出たベスを呼び止めた。当然、周囲には他の者はいないタイミングでだ。

「何？」

「今週、週末空いてる？」

「週末？」彼女が喜びを抑え、平静を保とうとしているのが分かる。

「ああ。ちょっと助けて欲しいんだけど、頼めるのが君しかいなくて…」これは、嘘ではない。そう、自分に言い聞かせる。

「私で出来る事ならね」

「もし嫌なら無理しなくていいんだけど、クリス…ドクター・デガーモが週末に自宅でパーティーするんだ。彼と、彼の彼女がホスト役でね。で、パートナー同伴って言われてて…」これは、嘘だ。ただ、ばれるような嘘ではない。

「いいわ。エディと一緒にだったら、あのドクターでも大丈夫」

そう。彼女もクリスが苦手だと言っていたのだ。

「助かるよ。多分、7時ぐらいからだと思う。あいつの家は、ここから歩いても行けるから。詳しくはまた…」

「待って。じゃあペンを貸して」

ベスは、手を出す。エディは胸元のポケットからペンを出して渡すと、ベスもポケットからレシートのようなものを出し、何か書きとめた。

「うちの電話番号。電話帳には載せてないから」

「うちもだよ」エディもメモに書いて、ベスに渡す。

「詳しくは、また連絡するよ」

「分かったわ。じゃ」

ベスは歩き去った。エディは彼女の後姿を見ながら、ため息をつく。

彼女を連れて行くのは、二重の意味で当てつけだ。ひとつはクリスに。あの夜の事は、彼が仕組んだのは間違いない。ダメージを受けている姿など、決して見せたくなかった。ベスがいれば、彼に対しても、平



常心で接する事が出来るだろう。そして、もうひとつは、ジェフに。彼は、女連れの自分を見て、どう思うだろうか？エディが女ともデートをしているといっても、その現場までを見せた事はない。見たところで、友人同士の付き合い程度にしか見えなかったはずだ。しかし、今度は違う。勘の良い者なら、何事もない間柄ではない、と気づくだろう。そういう意味では、ジェフには分からないだろうが、彼ならきっと、仲良さげにしているだけで、そう思うに違いない。ジェフは、嫉妬を表に出すだろうか？内輪だとは言え、例の女優やベスもいるのだ。滅多な事は言えないはずだ。

エディは、自己嫌悪に気づかない振りをし、調剤室に戻った。

またしても、帰宅したエディを迎えたのは、留守番電話を知らせる赤いランプだった。

どうせ、クリスに決まっている。録音の中身を確認するのは後回しにし、腹を満たす事を優先した。バスとの一夜以来、まともな食事は、仕事中の昼休みしか取っていない。それでも、食欲が湧かず、コーヒーとペストリー1つで済ませた事もある。昨日、買い物した食料品を無駄にする訳にもいかない。

トマトとハラペーニョ、玉ねぎを適当に切って、フードプロセッサに入れてしまう。ライムと塩、胡椒も適当に。後は何回か回せば、サルサソースの出来上がりだ。エディが小さい頃は、ハラペーニョが辛くて食べられず、家にいた家政婦のファデラという黒人女性が、子供用にと別に作ってくれた。ハイスクールに入る頃には、ハラペーニョが多いものをリクエストすると、『大人になった』と、嬉しそうに笑っていた。

フードプロセッサの中身を小さな器に移し、テーブルに置く。馴染むまで寝かせている間に、冷蔵庫からコロナを1本出し、残ったライムを切って瓶の中に押し込み、一口飲んだ。

ジェフが一緒の時は、ワカモレも一緒に作って出したものだ。アボカドそのままだと食べられないのに、ワカモレにすると、トルティーヤを5枚位一気に平らげた。

エディは、ジェフの事を思い出している自分に気づき、苦笑する。

彼が来なくなってから、食料品の減りも遅くなり、買い物に行くペースも落ちた。勿論、家での雑用も減った。自分一人であれば、さほど時間を費やす事はないものだ。もともと、彼以外を家に呼ぶ事はなかったのだから。

冷凍のフラワートルティーヤを、アルミフォイルに包んでオープンへ放り込む。折りたたみの椅子に腰を下ろし、コロナをもう一口。そこから見える、留守番電話の点滅する赤いランプをぼうっと見た。

どうせ時間を知らせる電話だろう。時間からして、バスに連絡するのは明日にした方が良くも知れない。

サルサとトルティーヤで軽く夕食を済ませ、もう1本コロナを出して来て、電話のボタンを押した。

『ロクオン サレテイル めっせーじハ 3 ケンデス』無機質な、合成された音声が予想外の数字を告げる。

1件目は、数秒の沈黙の後、受話器を置く音が聞こえた。2件目は、すぐに切ったようだ。最後の1件も。

クリスなら、全く気にする事なくメッセージを録音している。バスにしては、時間が合わない。1件目は、エディがまだ勤務中の時間だった。あとの2件も、バスならエディが帰宅する時間を把握出来るので、当てはまらない。と、電話が鳴った。恐る恐る、受話器を上げた。

「はい、ジャクソン…」

『エディか？』懐かしい声が聞こえた。

「ああ。どうしたんだよ、急に」平静を保とうとするが、つい、声が上ずるのを抑え切れなかった。ジェフの声が、妙に明るいのが気に障る。

『クリスから連絡あったか？』

「昨日、留守番電話にメッセージ入ってたよ。週末のパーティーの件か？」

『ああ。クリスに頼まれたんだよ。あいつ、今夜夜勤だから、お前に連絡しといてくれって』

また、クリスマスだ。

「で？」

『時間なんだが、予定通り7時からだそうだ。スコットとマイクも来る』

「知ってるよ」

『お前は来るのか？って聞いてたぞ』

「行くなって伝えておいてくれ。それだけか？」やはり、素直にはなれない。何より、あっけらかんとした、この話し方はなんなのだ？

『あ、ああ。じゃあな』

エディは答えずに受話器を置いた。クリスマスのせいで、エディがどんな目にあっただかなど、彼は何も知らないのだろう。腹が立つほどにジェフの声は明るかった。下らない言い争いなどなかったかのように。いけしゃあしゃあと、クリスマスの名前を出して来た。

もうエディには、ジェフに対しての当てつけに、罪悪感は無くなっていた。彼女への罪悪感も。

昼間、バスから貰ったメモをポケットから取り出し、書かれた番号を押した。

「バス？エディだけだ。遅くにごめん」

その日は、冬とは言え、さほどの冷え込みも感じられなかった。ニュースでは、クリスマスの時と同じく、異常気象である事を伝えていた。クリスマス達のコンドミニウムまで、ハリス&ディップルからはタクシーに乗るには近すぎ、地下鉄でも遠回りになるため、エディはバスに徒歩での移動を提案した。彼女からすれば、エディと一緒にいれば、別にどんな移動手段でも構わなかったのかもしれない。裏口を一緒に出て、彼女に声をかけた時点で、アリスンに見つかったが、エディはもう気にしなかった。

「あら、エディ。バスとおでかけ？」

「ああ」あっさり肯定すると、アリスンはにんまりと笑っていた。

「友達のパーティーだよ。女性同伴って言うから、バスに頼んだんだ」嘘はついていない。

「ふうん」

まだアリスンの目は、好奇の色を帯びている。

「じゃあ、俺達はこれで。バス、行こう」

にやにやと2人を見るアリスンを置き去りに、2人はパーク街に向かって歩き始めた。

「パーティーって言うのに、こんな普段着でいいの？」

「どうせ、俺の友達ばかりだから、大丈夫だよ。自宅でやるんだし。俺だって、この格好だぜ」

答えるエディも、普段着のままだ。黒いダウンジャケットにチャコールグレイのマフラー。中も黒いコーデュロイのシャツにブラックデニム。

バスは、ラベンダー色のニット・ワンピースの上から、黒のロング・コートに少し濃い紫のショールをマフラー代わりに巻いている。ブーツもコートに合わせて、黒いレザーのロングのものを履いていた。多少、気を遣ったのだろう。歩くには、少し軽装かもしれなかった。

『あの日』以来、数日ぶりに訪れた建物の入り口には、見慣れたドアマンがいた。少しだけ、安堵を感じる。

「ダグ、久しぶりだね」エディは思わず声をかけた。

「ああ、エディ。久しぶり。今日は、ドクター・テイトの所？」言葉に一瞬詰まってしまう。

「いや。今日は、クリスマス…ドクター・デガモの所」

「じゃあ、ちょっと待っててください」

ダグは振り返り、すぐ傍の内線で連絡をしている。「ドクターが、すぐ上がってきていって言ってますよ」

エディはダグに手を上げて了解の意を示し、バスをエントランスに誘導した。

「やっぱり、お医者さんだけあって、お金持ちなのね」

「俺達だと、入り口から自分で鍵を開けるもんな」ため息をつくバスに笑いかけ、エレベーターに乗る。

「エディのお友達って、スコットとか？」

「うん。スコットとアネットも来るよ。後はマイケルとその奥さんのリンかな。リンも、前に会ってるだろ？クリスの彼女は女優らしいよ。メリッサ・エルウッドって」

「その人、知ってるわ！何回か彼女のドラマ見た事あるのよ、アリスンに薦められて。彼女がドクター・デガーモのガールフレンドなの？」

「らしいよ」エディは出てきた名前に苦笑した。

部屋の前まで着き、ブザーを押すと、タートルネックのセーターにレザーパンツという格好のクリスが、ドアを開けて出迎えた。

「やあ、よく来てくれたな」

クリスに誘われ、中へ入る。クリスは紳士らしく既にバスに手を貸し、コートとショールを預かっている。その辺りは、やはり手抜かりはない。逆に、それが胡散臭いと感じさせる要因でもあるのだが。

エディも ダウンジャケットとマフラーを脱ぎ、手渡されたハンガーに掛ける。室内では、ブライアン・アダムスの曲が流れている。その音を遮るように聞き覚えのある笑い声が聞こえた。

「もしかして…？」

「リンが早々と出来上がってるんだよ」クリスが苦笑いしている。珍しい事もあったものだが、リンには彼も逆らえない。

「まあ、入って適当な所に座っててくれ」

クリスがさっさと奥に引っ込んでしまった為、エディはバスを促し、リビングへ足を踏み入れる。さっきの笑い声はやはりリンのもので、3人掛けソファで、例のクリスのそっくりさんの言葉に笑い転がっている。横にいたマイケルが振り返った。

「エディ…」

マイケルの目は『助けてくれ』と訴えていた。エディは笑いを堪えて、バスをマイケルの元へ連れていく。「バス、覚えてないかもしれないけど、彼がマイケル。マイク、うちの薬局で一緒に働いてるバスだ。クリスマスにそっちに連れていった」

「ああ、バス、よろしく。マイケル・ウィルトンだ。ちょっと今日は、うちの奴がとんでもない状態で…悪いね」

横目で、リンの様子を見ながら、バスに握手の手を差し出す。

「あんた…『薬屋さん』？」

クリスのそっくりさんが振り返った。いやに『薬屋さん』と強調した、厭味な言い方する。まさか、彼まで来るとは思わなかった。やはり、彼とクリスは『そういう』関係だという事なのだろう。

「『患者さん』まで来るとは思わなかったよ」『患者さん』のにやにや笑いに、エディも口の端を歪めた笑いを返す。

「あらあ！バス！久しぶり！あなたもパンチをいかが？」声のボリュームを調整出来なくなっているリンが、バスの手首を掴んでいた。バスは『大丈夫だ』というように、エディに笑いかけてきた。リンに誘われるまま、隣に腰を下ろす。

「『患者さん』ね。俺はコンピュータ・プログラマやってる、コリー・クラークだ」

「俺には、エディ・ジャクソンて名前があるよ、コンピュータ屋さん」

「分かったよ、エディ。で、『リチャード』って誰だい？」

コリーが顔を寄せてきてエディに質問する。エディは自分の体が硬直するのが分かった。

「あんた…」

コリーは意味ありげな笑いを向け、飲み物を取りに立ち去った。

「あいつ、クリスの最近の友達みたいなんだけど、ちょっと心配なんだ」

マイケルの表情は曇っている。

「最近、クリスの目がぎらぎらしてる気がしてしょうがないんだ。多分、あの男と知り合ってからだと思う。あのコリーって奴が何かけしかけてるのかどうかは分からないけど、一緒にいる事で、何か悪い方に転がってるような気がするんだよ」

それは、明らかにそうなのだろう。エディは身をもって体験している。

「でも、クリスはわざとやってるんだろ？」自分の受けた仕打ちを思い出し、言い方は皮肉交じりになってしまう。

「俺にはどうしようもないよ、マイク」

「分かってるよ…俺も気にして本人には忠告したんだけどね。あのコリーって奴より、ジェフという方がクリスの為なんだけどな」

(じゃあ、俺はそのために犠牲になれっていいのか?マイク。俺とジェフが終ったっていう事だろう?)

「あ、メリッサだ…」マイケルが、ダイニングから入って来た人影に注意を向けた。新たにサングリアの入ったピッチャーと、オードブルの皿を持っている。栗色の髪は夜会巻きにアップにされ、恐らく上質のカシミアであろうロイヤルブルーのプルオーバーにゆったりとしたガウチョ・パンツを穿いていた。殊更に着飾ってはいないが、他の者と違う空気を纏っているのは、ショービズの世界に身を置いているもの故の事だろう。手にした物をテーブルに置くと、新たに増えた客に気づいたようだった。

「あなたは…」エディを見て小首をかしげる。

「クリスの友人のエディ・ジャクソンです。それから、ベス。キム・エリザベス・マッケンジー」

自分の名前を聞いたベスが振り返り、立ち上がってエディに寄り添った。エディも、ベスの背中に腕を回す。

「こんばんわ。メリッサ・エルウッドです」

仕事用と思われる微笑を浮かべ、彼女は握手の為に手を差し出した。

「テレビで拝見してます、エルウッドさん」

「メリッサってよんでくださいな。キム・エリザベス」

「どうぞ、ベスで」

「ゆっくりしてってくださいね、エディ、ベス。と言っても私の家じゃないですけど」そう言ってくすくす笑う。

「私のエージェントのマークも、もうすぐ来ると思います。ちょっと彼は、その、特殊ですけど。びっくりなさらないでね」

「特殊…なんですか？」

「ええ、まあ」

エディは2人の会話を聞いている間、ベスの背中に回した腕を腰にずらした。ベスも自分の腕を回して来た。と、新たな来客を告げるブザーが鳴った。

「ちょっと、失礼」会釈をして、メリッサは歩き去った。

「やっぱり、一般人と違って綺麗な人ね」

「そうだよ」エディが答える前に、にやけたマイケルが答える。

「痛いっ」

後ろから、リンがマイケルの尻を叩いた。しょうがなくマイケルは、酔っ払った自分の配偶者の相手をするべく、その隣に腰を下ろした。

メリッサに誘われて入ってきたのは、スコットと、強張った笑みを張り付かせたアネットだった。それも、エディ達の顔を見ると、表情が緩む。

「エディ！」すぐに、隣のベスにも気がついたようだ。

「ベス、元気だった？」

「アニー！」女性2人は、ハグを交わしている。スコットの目は、エディの目をしっかり捉えていた。エディは口元だけで、気まずい笑みを返した。

「いいんだな？」

「何が？」

「いや、いい。ジェフは？」

「まだ来てないみたいだぜ」

エディは、テーブルの上にある、氷の入った大きなボウルから、ミラーの缶を2本取り出し、片方をスコットに渡す。自分はベスのいる側の肘掛に腰を下ろした。アネットには、サングリアを注いで渡した。

「とてつもない茶番だな、これは」

苦々しげにスコットが言う。それはエディも分かる。恐らく、クリスが自身の書いたシナリオに登場する人物を一斉に集め、眺めようという趣向なのではないか。彼のほくそえむ顔が目浮かぶようだった。分かっている参加している自分は、どれだけ阿呆に見えるだろうか。

『『薬屋さん』がおいでなすったな』

コリーがニヤニヤしながらキッチンへ入って来た。

「メリッサ、飲み物とこれ、持って行ってくれるかい。さっき言った友達が出来たんだ。ついでに挨拶してきたら？」

クリスはケータリングで頼んだオードブルの皿をメリッサに示した。「じゃあ、クリス。オーブンの火、あと1分したら止めておいてね」

彼女が出て行くのを見てから、コリーは更にクリスに歩み寄る。

『『リチャードって誰だ？』って聞いたら、固まってたよ。メデューサに睨まれたみたいにな』

コリーは喉を鳴らして笑った。

「ズルイな。俺より先に楽しんでるなんて。メリッサが戻って来たら、俺もリビングへ行くよ」

「女連れで来てたぞ」

「ああ。見たよ。」クリスの目が好奇の色を帯びた。「楽しみだな、どんな様子か」

「今夜は、あの女が泊まって行くんだろ？」

クリスの背後にぴったり寄り添ったコリーが尋ねる。

「いや。彼女は明日撮影があるから、ホテルに帰るらしい。昨夜、うちに泊まってたしな」

「じゃあ…」

「あんたが泊まればいい。彼女はマークが送っていくだろう」

寄り添ったコリーは、クリスの耳朶を軽く噛んだ。

「今夜の事を一緒に思い出して楽しもうぜ…」

クリスもメリッサもリビングに戻り、ジェフとマーク以外のゲストが揃った。メリッサはアネットとベスと話し込んでいる。それを興味深そうに、コリーが眺めていた。マイケルとスコットはエディと共にソファの傍に座り込んでリラックスしている。

ホスト役である事を名目に、クリスは出窓に体を預け、全体を眺めるポジションを陣取った。後は、ジェフさえくれば、今夜のメイン・キャストは全て揃う。エディはスコット達と話しながらも、玄関の方を気にしているのが分かる。ジェフが来るのを待っているのだろう。それとも、来て貰いたくないのか？いや、来て欲しいのだろう。女連れで来たのだ。引き合わせる魂胆に違いない。コリーが意味ありげにエディの方を見ているのにも、気がついていようだ。彼は、あの日自分を抱いたのが、コリーだと気がついたらどうか？それとも、コリーは単なるオーディエンスだと思ったか？冷静さを欠いたエディの様子を見るのは楽しかった。もう少し、揺さぶりを掛けたい欲望が抑えきれない。思わず笑みを浮かべ、エディの横顔をじっと見つめた。

(こっちを向けよ、エディ。あんたに伝えたい事があるんだ)

願いが通じたのか、エディがこちらを向いた。目を見て笑いかけると、立ち上がってこちらへ来た。「エディ、楽しんでくれてる？」余所行き笑顔で問いかけるが、エディは無言だった。こちらの目を睨み返してくる。

「コリーは、いい夢見させてくれたかい？」

エディが、目を見開いた。体が一瞬揺らぎ、グラスを持つ手が微かに震えている。クリスは体中の血がざわめくような快感を感じた。

「何の話だ？」声が僅かに上ずり、震えている。

「いや。なんでもない。お代わり、いるか？」

「頼むよ」

クリスはエディからグラスを受け取り、ダイニングへ向かった。笑いが込み上げて来るのを必死で耐えた。これだから、止められない。後はジェフが来てくれるのを待つだけだった。エディの為のウォッカマティーニを作り、グラスを渡しにリビングに戻った所で、玄関のブザーがなった。すぐに玄関まで向かう。ジェフか、マークか…。

「ああ、ジェフ。お疲れさん。もうマーク以外みんな来てるぜ」

「マークって…まさか、お前、彼女呼んだのか？」

そう。クリスは敢えてメリッサのことを伝えなかった。これで、メリッサの反応も、ジェフの反応も楽しめる。そして…。

「エディも来てるよ。彼女連れて来たみたいだぜ」

「彼女？」ジェフの眉根が寄った。クリスは彼のコートハンガーにかけ、ジェフの後ろを付いてリビングに入った。

入って来たジェフに、一番先に反応を示したのは、案の定エディだった。しかし、表面上は何も反応しない。目の表情が変わっただけだ。スコットには会釈のみで、すぐにエディの方に向いた。エディの表情が、みるみる強張る。ジェフの表情がこちらからは見えないのが、クリスには残念だった。もう少し近づいてみる事にする。

「久しぶりに揃ったな」背後から声を掛けた。皆が一様に、それぞれの思惑で以って自分の顔を見るのは、見物だった。

マイケルは、相変わらず酔っ払ったリンの世話をしている。もっとも退屈なカップルは、2人ともが白けた様な、嘘臭い笑顔を浮かべている。その『退屈なカップル』の傍にいたエディは、クリスの姿をみると。彼女の腰に腕を回した。ベスも同じように腕を回す。ジェフの眉根に再び皺がよった。

(そういう事か。珍しい事だ)

「メリッサ、紹介するまでもないけど、今日は君の退院祝いも兼ねてるから、主治医だった彼も呼んだんだ。黙ってて、ごめんよ」

クリスは、アネットの傍で立ちすくんでいたメリッサの手首を掴んで傍に引き寄せ、腰に腕を回した。彼女の背中の筋肉が緊張しているのがクリスの手に伝わった。それでも、顔に出さないのは、あっぱれとしか言いようがない。一番うろたえているのはジェフのようだ。メリッサの手前、堂々としていなければならず、かといって、エディが女連れで仲良さげにしているのも、気に食わないらしい。

「改めて、退院おめでとう。メリッサ」

ひきつりながらも、ジェフは『主治医』としての精一杯の笑顔で、彼女とハグを交わした。恐らく、この2人はセックスはおろか、キスもしてないのではないかとクリスは思う。

ジェフとメリッサの2人を改めて引き合わせたところで、クリスは再び傍観者のポジションに戻った。内線電話が鳴り、新たな来客を告げる。マークだ。ダグには、すぐに通すよう伝えた。視線を再びテール周辺に戻すと、メリッサは気丈にもクリスの彼女としての振る舞いを忘れてはいないようだが、心なしか、ジェフに対する表情が硬い。ジェフは、もうメリッサはどうでもいいのかも知れない。彼女の問いかけにも冷淡な様子が見て取れる。本当に、我が儘な子供のようだ。クリスの誘惑に乗り、こちらへ傾いたのは自分だというのに、いざエディが彼女を連れてくると、嫉妬する。それを計算の上で、エディも女連れ来たのだろうが、いざジェフを前にすると、平常心ではいられないようだ。更に、時折傍にやって来るコリーが、彼の顔に一瞬の怒りを浮かび上がらせる。

玄関のブザーが鳴り、マークの到着を知らせた。

やはり、あの夜エディを抱いたのは、このコリーという男のようだった。クリスの言葉で確信した。あのポラロイドに写っていたのが、彼だったのか。まだ時折エディの方を見ては、薄笑いを浮かべている。エディは、ベスの腰に回した腕に力を込めた。一瞬、ベスはエディの顔を見上げたが、すぐに自分も腕に力を入れて、エディの体を引き寄せるようにした。

アルコールも適度に入り、皆が多少リラックスした頃に、新しいゲストを告げるブザーが鳴った。クリスに連れられて入って来たのは、いかにもなクイーン然とした男だった。彼が、恐らくメリッサの言っていた『マーク』なのだろう。入ってくるなり、すぐにメリッサの傍まで歩み寄る。

「メリッサ、あのプロデューサー、やっと OK 出したわよ。ほんとに、あの禿親父と来たら！」

いきなりイギリス訛りで捲し立てる。ちょうど傍にいたベスは、勢いに押され、怯えたような様子で、エディに体を寄せて来た。エディは、『大丈夫だ』と言い聞かせるように、彼女の体に回した手で背中を軽く叩く。

「あら、お嬢さん。オカマを見るのは初めて？怖くないわよ。オカマだってジェントルマンなんだから」機械仕掛けのように、にっと笑う。

「私は、マーク・アーモンド。メリッサのエージェントをしているの。あら、ドクター・テイト！メリッサの事ではお世話になったわ。お久しぶり」

すぐにジェフの方に向き直った。メリッサは平然として見えるが、ジェフは引きつった笑いを浮かべている。そう。ジェフは、ああいうタイプが苦手だった。恐らく、あのマークからも好かれているのだろう。助けを呼びたそうだが、あいにくエディにはその気はなかった。また、ジェフもそこまでの勇氣はなさそうだった。ベスと一緒にいるだけではなく、2人で寄り添っている姿を見た、彼の表情で分かった。

「あなたは、ドクター・テイトのお友達？それとも…」マークが今度はエディの方へ向く。

「どっちもですよ。ついでに言うと、そこにいるスコット…ドクター・ロッケンフィールドやマイクともですけど」

「あら、そう」マークは目を細めた。一体、何が言いたいのか。

今度は身を翻し、スコットとアネット、更にご機嫌になっているリンの面倒を見ているマイケルの方に向かった。

出来れば、早々に立ち去りたかった。最低限の目的は果たしたのだ。人付き合いの義理も、ジェフから嫉妬を引き出す事も。あの、コリーとかいう男と、クリスの好奇の目に晒される状態から逃げ出したかった。あの2人が、自分の痴態を見ていたのだ。コリーに抱かれて喜んでいる姿を。思わず表情を硬くしたエディを、ベスが心配そうに見上げていた。

「どうした？」

「何か心配事でもあるの？」

「大丈夫だよ」ベスの腰に回していた腕を、彼女の肩に回し、軽く撫でる。顔を上げると、ジェフがこちらを見ていた。厳しい目つきで。

「ねえ。やっぱり、ドクター・テイトって怖そう…」

彼女もジェフの視線に気がついたのだろうか？

「怖くないよ」エディは苦笑する。そう、怖くない。手がかかるだけだ、駄々っ子のように。

「紹介するよ」

「え？でも…」

「おいで」

スコット、アネットと話しているジェフの元へ、ベスの肩を抱いて促す。

「ジェフ。紹介するよ。見かけたことあるかもしれないけど」自分は、堂々と振舞えているだろうか？

振り返ったジェフは、一瞬ベスが怖いと表した表情を浮かべたが、すぐに笑みを返した。ただ、エディにはその笑顔が引きつって見える。

「彼女なんだ。キム・エリザベス。ベスだよ。ベス、やっぱり怖い？」

「よろしく、ベス。ジェフ・テイトです。俺は取って食ったりしないから、大丈夫ですよ」

白々しい会話だと思う。よくぞ、ベスの事を『彼女だ』と言ったものだ。ベスもさすがに驚いて、エディの顔を再び見上げていた。

(もう、いい…どうにでも、なるようになればいい)

「よろしく、ドクター」

「ジェフでいいですよ。よく、こいつには飯を食わせて貰ってました」

(ジェフ、そんな余計な事を…)

「テックス・メックスが得意なんで、一度作って貰えばいい。それとも、もう食べたかな」

「いえ、ジェフ。まだ…」

「今度、うち来た時にでも作るよ。リクエスト、考えといて」

「じゃあ」先に音を上げたのはジェフの方だった。今度はマイケルとリンの方に行った。さすがにクリスとメリッサの所へは行きづららしい。

「エディ…」

ベスが顔を見上げている。言いたい事は分かっている。不安でもなく、やや当惑の混じった顔だ。急に『彼女だ』などと言ったのだ。当然だろう。

「いいんだよ」改めて、エディはベスに笑顔を向け、彼女の肩を抱いた。



「エディ。今夜、うちに泊まっていかない？一緒にいて欲しいの」

シャワーから出たベスは、冷蔵庫に入れておいた耐熱皿を取り出し、余熱したオーブンに入れた。昨夜の残ったパスタで、カナディアンベーコンのストラダを準備しておいたのだ。後は、焼きあがるのを待つだけの、休日のランチ。

クリス宅でのパーティーの夜はベスのアパートに泊まったが、結局、通勤の便がいいのと、古い分広いからという理由で、ベスがエディのアパートに来る事の方が多かった。既に、キッチンには彼女も勝手を知っている。

「ねえ、テッド」

エディは、まさか自分の事と思わず、ベスの呼びかけを無視した。

「テッドって呼ばれるの、イヤ？」

彼女のささやかな独占欲の発露か、自分だけは、他人とは違う呼び方をしたいのだろう。それに思い当たって、どうやら自分の事だとエディは気づき、しかめ面を作った。

「あ、ああ。慣れないし、親父がそう呼んでだから、あまり好きじゃないんだよな」

そうだ、父親。彼がエディをそう呼んでいた…。

「じゃあ、ネッド」(テッド、ネッド共にエドワードの愛称)

「ガキの頃、お袋がそう呼んでた」

今度は、ウンザリとした顔を向ける。

「じゃあ、素直にエド」

エディは肯定する代わりに、ドライヤーで乾かしている最中の彼女の髪を、笑顔でくしゃりと撫でた。

人は、自分の心を守る為に、自分でも知らないうちに敢えて記憶を消してしまう事があるという。ならば、何故最後まで消えたままにしておいてくれないのだろう。ある日突然、それはやって来るのだ。残酷なほどに、鮮明に蘇る。ベスのたった一言が呼び起こした記憶。よもや、父親が自分の体をそういう目付きで見っていたなど。勘違いのままで思いこませてくれていたら、こんな思いをせずに済むものを。

『テッドも、もう少し筋肉がついてたらなあ』

笑顔の父親が撫でる、エディの華奢な背中。バスルームの鏡越しに合う視線。

(「も」って、誰と比べてやがるんだ)

弟のチャーリーも、エディと体型は似たり寄ったりだ。恐らく、父親の脳裏には、コレクションした写真の彼の裸体が浮かべられていたのだろう。

(俺を、自分と一緒にしないでくれ。その口でテッドなんて、呼ばないでくれ。母さんとチャーリーに負担を掛けないでくれ。俺が黒い羊なのは、アンタと同じだからじゃない!!)

母親に父親の宝物を見せられる前から、うっすらと気付いていた。気のせいだと思おうとしていた。

シャワーから出て来る度に感じる、父の視線。不自然なタイミングで、覗かれるバスルーム。何度否定しても、湧き上がった疑惑。だからこそ、逃げようとしたのじゃなかったか。

何故、記憶は突然に、招かれざる客のように頭の中に湧いてくるのか。

エディは、バスルームに入るなり、身体が穢れたような気持ちになり、肌が真っ赤になるまで、スポンジで擦った。

自分は、父と同じ道を行こうとしているのか？いや、違う、とエディは自分の心の中で否定する。

(俺はまだ、家庭を持ってない。持っちゃいけない。少なくとも、自分の子供にそんな目は向けない)

バスルームには、以前はアイヴォリーの石鹸の匂いぐらいしかしなかったが、今は違っていた、先にシャワーをベスが使ったので、アグリーのフレグランス・シャンプーの香りと、マジックソープのラベンダーの香りが立ち込めていた。これが、女と暮らすという事なのだろう。今は週の殆どの日に、彼女はエディと一緒に此処に帰って来る。食事の支度は特にどちらともなく、思いついた方がしている。彼女も母親についてよく料理をしていた、と言っていた通り、腕はなかなかのものだった。普通なら、これが居心地の良い状態なのだろう。しかし、エディには違う。ベスへの罪悪感の問題ではない。もちろんそれは感じる。しかし、ただ、『自分がここにいるべきではない』と、感じるだけだ。居心地の悪さ。そこに押し掛かる彼女への罪悪感。自分を騙している後ろめたさ。それらが、日に日にエディから快活さを奪っていく。ベスは気づいているかも知れない。それでも知らないふりをして、普段通りの振る舞いをするのは、彼女の美点で強さでもあるのだが。

それでも、またこの関係も、今の状況も、いつか自然消滅するだろう。今までのように。ジェフとの事もそうだったように。

(いや、ジェフとの事は、俺はそう望んでいなかった筈だ)

今までは、自覚はなくとも、自然消滅する事を自分が望んだのだろうか。

シャワーから出ると、チーズの焼けた香りと、コーヒーの香りがリビングにまで漂っていた。

「エディ、電話借りたわ。今、留守番電話聞いたら、叔母さんが…倒れたって…」

バスタオルを頭から被ったままのエディの胸に、ベスが飛び込んで来る。

「叔母さんて、ご両親が亡くなってから面倒見てくれてたっていう…？」ベスが、エディの胸の中で小さくうなずいた。

「私、ブルックリンに帰らなくちゃ…店にも連絡入れるわ。今朝早くに倒れて、病院で手術受けてるって」「早く行ってあげなよ。世話になったんだろ？」

ベスは黙っともう一度うなずき、着替え始めた。エディもクローゼットから彼女のダウンジャケットを取ってくる。ついでに、彼女が以前に置いていったジーンズとセーターも出して来て、手近な紙袋に入れる。

「これ、うちに置いてた服。着替え代わりに持って行きなよ」

「ありがとう。行ってくる」

慌ただしくベスが出て行った後、残されたのは、キッチンテーブルに載った2人分の朝食だった。ベスの分のグレープフルーツジュースをシンクに流し、折りたたみのスツールに座る。部屋を沈黙が支配した。久しぶりの独りの時間。ベスが用意したストラダは、まだ湯気を立てている。ベスの分と、耐熱皿の残りにラップをかけ、ゆっくりと食事を取る。二、三日はゆっくり過ごせる、と思いながら。

「エディ、ベスからの連絡は？」

出勤していきなりの挨拶がこれとは、アリスンらしい。

「昨日の朝に帰ったばかりだから、まだないよ。第一、こっちにも入るだろ？」

「あら。もし何かあったら、昨夜のうちに、あなたの所に入るかも知れないじゃない？」

既に、店の同僚の中では、エディとベスは公認も同様だった。特に冷やかす事も何か言われる事もない。「俺も詳しくは聞いてないけど、病院に運ばれたっていうし、しばらくかかるかもな」

「そう…彼女、確かご両親が亡くなってるから、叔母さんが最後の身内だった筈なのよね」

「だから、急いで出たよ」

本来、この日は昼前からの出勤だったが、ベスの穴埋めの為に朝からの出勤に交代させられた。アリスンと一緒にというのが気になったが、既に公認状態を否定しない2人には、さほど興味はないようだった。も

し、バスが最初に相談を持ちかけたのが彼女だったら、エディは確実に逃げていただろう。その方が、バスには良かったのかも知れない、と思う。

調剤室に入った時点で、既にカウンターの前に人影があった。まだ店も開けておらず、病院の診察も始まってはいない。

「エディ。お客さんだぜ、お前に。また女だ」にやにやと笑いを浮かべたダンが近づいて言う。

「まだ店開けてないだろ？」

「シャッター開けた時に声掛けられたんだよ。特別扱いだ。なんせ、一般人じゃないからな」

「一般人じゃない？」

「セレブリティ」

セレブリティ。そう呼ばれる知己は、一人しかいない。まさか、と思いつつ、カウンターに向かう。ガラスの向こうに見えた姿は、まさしくメリッサの姿だった。サングラスをかけてはいるが、雰囲気彼女だと分かる。

「エディ、お久しぶりね、覚えてくださってるかしら？」

「メリッサ…」

「ごめんなさい、お仕事中よね。何時に終わるのかしら？」

「6時だけど…どうして、ここが？」

「マークに言って探して貰ったの。相談する相手が、あなたしか思いつかなかったの」

恐らく、クリスかジェフに関する事なのだろう。今日はこの前のパーティーの日に比べ、化粧が濃いように見える。

「今日、お仕事が終わってから、少し時間いただけない？」

何故、こうも女に相談や愚痴を持ち込まれるのか？それほど人畜無害に見えるのだろうか？相手は与り知らぬ事だが、どれもエディ自身関係ないとはいえない事ばかり。これもひとえに、クリスにしるジェフにしる、トラブルメーカーである証ではないか。どのケースにしても、エディが相手にとって都合の良いポジションにいるからだ。エディにとっては不都合であっても。

「わかりました」

「じゃあ、場所は…」メリッサがバッグから手帳を出して何か書きとめている。そのページを破り、エディに差し出した。

「6時半に、ラ・パルマで。住所はこれよ」

メリッサの声の響きは優しかったが、口調は自分が中心である扱いを受けて来た者のものだった。

手帳に記された店はアッパーイーストの外れにあり、店からも徒歩で数分の所にあった。ちょうど、ジェフ達の勤務先やコンドミニウムからも東西逆となるため、彼等に会う事もない。それを考えた上での選択なのだろう。

間接照明とキャンドルに照らされた店内はさほど高級そうには見えない。確か、以前バスが来たいと言っていたのを思い出す。予約が一杯で、すぐには入れないと言われ、諦めたのだ。すぐに奥からオーナーと思しき老紳士が出てくる。

「失礼ですが、ご予約は？」

「あ、待ち合わせで…、連れは先に来てるかもしれません。ここに来るように言われたので」

「ジャクソン様でいらっしゃいますか？」

「はい」

「どうぞ。お待ちでいらっしゃいます」

老紳士に促されて中に入ると、一番奥の席にひっそりと、人目を忍ぶかのようにメリッサが座り、エディ

に向かって手を上げていた。

「待たせたかな？」

「いいえ。私が早く来過ぎたのよ。今日はオフで、何もする事がなかったから」

エディが席につくタイミングで、先ほどの紳士の奥方らしき年配の女性がワインを注ぎに来る。

「ごめんなさいね。急に呼びたてたりして。今朝も言った通り、あなた以外に相談する相手がいなかったの。誰にも言うべき事じゃないかもしれないけれど」老婦人が立ち去ったタイミングで、メリッサが口を開いた。

「クリスの事？」

「それと、もう一人、ドクター・テイト、ジェフの事よ」

エディが言葉を継ごうとした時、先刻の老紳士が前菜を運んで来た為、口をつぐむ。再び2人だけとなった際に、口を開こうとしたエディを、メリッサが制した。

「私、二股かけてたのよ。彼等2人に」

それは、知っている。あの、とんでもない目に会わされた夜、直接クリスの口から聞いている。本当は仕組まれたものだということに。

「軽蔑するかしら？好きに感じてくださって結構よ。でもね、分かるでしょ？…ああ。分からないわね。あなたも男性だもの」

(また『男っていうのは』…って奴か)

「ただ、私は普通の幸せが欲しいだけなのよ。今はこうして女優の仕事をしているわ。でもね、時々、私は向いてないんじゃないかって思う時があるのよ。昔はあんなに憧れていた仕事につけたのにね」

『普通の幸せ』。それは、どんなものなのだろう。自分には得られるのだろうか。

「私の実家は、とても田舎でね。女は大学なんて行く必要ないって言う人がまだいるような小さな町。ワシントンがどこにあるのか、地図を見ても分からない人が大勢いるような…。私はジェフもクリスも、2人とも好きだから、お付き合いしてたのよ。ジェフは私を大事にしてくれてるのか、まだ何もして来ないけど」(やっぱり、女との付き合いが出来ないんじゃないか…)

「連れて歩くならジェフの方が良いんでしょうけど、私の本質を理解してくれてるのは、クリスの方だわ」

その認識は間違っている。エディはメリッサにそう言いたかったが、黙って聞いていた。

「でも、あのパーティーの日、翌日撮影があるから私は先に帰ったんだけど、あれから2人とも連絡がないのよ。今までなら、毎日1回は電話もあったのに」それは、恐らくどちらもクリスの差し金なのだろう。

「俺は、あなたの役に立ちそうにない」

「なぜ？」

「俺は、何も聞いてないから」

「聞いてなくても構わないの。お願い。ジェフに口止めを頼んで欲しいの。ジェフとあなた、特別な仲なんじゃない？」

予想外の言葉が出たことで、思わず言葉に詰まった。いったい誰に、何を聞いたのか？顔が強張りそうになる。

「どういう意味かな？」

「私のエージェント、マークには会ったでしょう？彼はあの通りの人よ。彼が、あなたとジェフの様子を見たのよ。あなたと彼には何かあったに違いないって、マークは言ってたわ。クリスなら困るけど、ジェフなら…。だから、私と手を組まない？」

エディは彼女の目の前に手をかざし、言葉を遮った。

「悪いけど、あなたやマークの想像しているような事はない。彼が何を思ったか知らないけど、ジェフとは

一度下らない事で仲違いしたから、ギクシャクして見えたんだと思う。それに、人のそういう事に関わるのも、そういう取引めいた事も嫌いなんだ」

メリッサの顔から、潮が引くように血の気が引き、硬い表情に変わる。

「どうしても？」

「申し訳ないけれど」これ以上の面倒はうんざりだった。

「分かったわ。じゃあ、別のお願い、聞いてくださる？」

「他人のロマンスに介入するような事じゃないなら」

「神に誓って」メリッサは片手を挙げる

「どんな事？俺に出来る事なら、いいですけど」

「来週から新しい映画の撮影が始まる事になってるの。だけど…最近調子が悪くて。お薬を調達して欲しいの」

「俺は医者じゃない。あなたの主治医に…」

「主治医が出してくれないから、頼んでるのよ」

「なら、俺にも出せませんよ」

「お願い。違法な薬じゃないわ。単なる新薬よ」

「何です？」聞かなくとも、大体の見当はついてた。そろそろ流行りになりだすだろう、と店でも言っていたのだ。

「プロザックよ」

(やはりか…)

「処方薬だから、処方箋が要る。第一、即効性はない」

「白紙のものを持ってるの。署名も入ってるわ。即効性がないなら…別の、できるだけ速く効くものを」メリッサはバッグから、封筒を取り出した

「なら、その医者に出して貰えば…」

メリッサは首を振る。偽造、という事なのだろう。

「俺に危ない橋を渡れって事？」

「お願い」

即効性があるものに、心当たりがない訳ではない。リタリン。確かにアップーになれるだろうが。彼女が薬漬けになったらどうなるのだろうか？耐性も人によっては出来るのは早い。正常な状態の者が飲み始める事で、薬漬けになる事は少ないのだ。一度飲み始めたら、簡単に止められない。離脱症状が出るのだから。その時、彼女はどんな行動を取るだろう？あのクリスに対して。

「分かりました。ただし、飲み方は俺の指示は必ず守ってください」

エディはため息をついて、封筒を掴んだ。

「受け渡しはどうすれば？」

「一緒に、ベイリウムもお願い」

エディは、再度ため息をついた。

「分かった。ベスも気をつけて。ちゃんと食って寝なきゃ駄目だぞ。うん、じゃあ」

今日の昼休み、メリッサの遣いに約束の薬を渡し、ベイリウムはあくまで頓服として使用するよう、念を押した。約半月分。女性の精神安定剤の依存症は、決して少なくないのだ。すぐにエスカレートし、リスクな量を要求されても困る。

一人の部屋に帰宅し、軽く夕食を済ませるとベスから連絡が入った。叔母の具合が落ち着くまで、もうあと二日ほど滞在する、と。別にそれはそれで、エディは構わない。それでも彼女の体調を心配するのは、彼女の優しい性格を理解しているからと、エディがお節介なのとどちらとも言えない。きっと両方なのだろう。

久しぶりにバスタブに湯を張り、ゆっくりと体を沈める。ベスと2人でいると。お互いがまだ気を遣い合う事もあり、シャワーで済ませてしまう事が多い。ただでさえ、一人でいても面倒さが先に立って、バスタブに浸かる事は少なかった。もう、バスルームには石鹸の匂いしなくなっている。昨日までは、まだラベンダーの香りが微かにしていたが、もう消えてしまったようだ。

栓を抜いて、湯を流してしまう。曇った鏡に、上半身が映る。貧弱だ、とずっと思っていた体が、ベスと一緒にだとさすがに女の体とは違うのか、さほどそうは見えなかった。ジェフとずっと一緒だったからかも知れない。それでも、自分では弱々しい体だと思う。

髪を洗ってガウンを羽織り、キッチンに行ってナイトキャップ代わりにタンカレーをグラスに三分のほど注ぐ。氷を入れ、残っていたライムを搾って、更に残ったライムと一緒にグラスの中へ。まだ髪を拭きただけの髪を被ったバスタオルで拭きながら、ジン特有の香りを口の中で転がす。時間はまだ10時。一人で夜をゆったりと過ごすのは、いつぶりの事だろうか。

クリス宅でのパーティー以降は、殆どの日にベスが此処にいた。エディが彼女の家に行った事もある。一人で過ごす日は、週に一度あったかどうか。彼女と一緒にいる事で、その罪悪感、これからどうするのかといった事を考える事は出来なかった。たとえ表情に出さずとも、彼女がエディの様子に気づいている事は、一緒にいて数日で分かった。

ラジオの電源を入れ、古いロック専門の局に合わせる。新しいものは分からない。こっちに出てきてからは、そんなものをチェックしている余裕はなかった。ハイスクール時代まで聴いていた曲が、一番耳に馴染む。ちょうど、ジャーニーの『エニウェイ・ユー・ウォント』が流れていた。この頃は、卒業を控えてプロムの相手探しをしていた…あの色目を使うコーチから逃れる為。もし、あの頃に自分が女に興味がない、と自覚していたら、彼の誘いに乗っただろうか？

(いや、断ってただろうな。ジェフの方が遥かにいい男だ)

また、ジェフの事を思い出している事に気づいて、自嘲めいた笑いが浮かんだ。

空になったグラスをシンクに置いた時、乱暴にドアを叩く音がした。隣かと思い、近づいてみると、この部屋だ。鍵はまだ3つともかけてある。ドアに耳を当てて、声をかけた。「誰？」

「エディ。俺だ…」

「ジェフ!? どうして？」

ドアの鍵を開けるのももどかしい。なぜ、今日というタイミングで来るのか。ベスのいる日なら、すぐにでも追い返すものを。追い返す理由を自分の中に見つけられない事を言い訳に、急いで3つ目の鍵を開けた。ドアが開くと同時に、倒れこむように、普段着姿のジェフが入って来た。実際に倒れこんだ、と言っていいかもしれない。入って来たジェフは、酒の臭いをさせ、エディに抱きつくようにもたれかかっ

た。それを受け止め、足元をふらつかせながら、ドアに鍵を掛けなおす。

「今日は、『あの女』は？」

「嫌な言い方するなよ。ベスは叔母さんが倒れてブルックリンに帰ってるよ」

ジェフを抱きかかえるようにして、ソファに誘導した。ジェフも、素直に従ってソファに腰を下ろす。

「コート、皺になるぞ」ジェフがのろのろと脱いだハーフコートを受け取り、背もたれにかける。

「エディ、水貰えないか？」

返事をする事なく、キッチンへ行き、ミネラルウォーターをグラスに注いで持って来た。喉を鳴らして飲み終えたジェフは、グラスを置いたその手で、エディの手首を掴んだ。

「ジェフ、ちょっと何するんだよ」ジェフは何も答えず、エディの手首を引き、ソファに押し倒した。

(この重み、この匂いだ…)

見かけに違わぬ体の重みも、フレグランスに混じった体臭も、体が覚えている。手をジェフの背中に回しかけて、慌てて胸元に戻してジェフの体を押し返そうとした。たとえ、それが本気でなくても。そうしなければならない、と思った。

「ジェフ、離せて」

形ばかりの抵抗を試みるが、本気で抗ったところで、勝てないのはエディも知っている。頭に被っていたバスタオルも落ち、羽織っていたガウンも簡単に剥ぎ取られ、冷たいジェフの唇が素肌を這う。微量しか残っていなかった抵抗する力は消え失せた。腕をジェフの背中に回し、その体を全身で受け止める。エディは求められるままに体を開き、今までのわだかまりが頭の中から消えて行くのを感じていた。

案の定、事が終わると、ジェフは眠ってしまった。無理な体勢で横たわるエディに押し掛かったまま。

ソファの背もたれを支えにして、ジェフの下から体をそっと引きずり出すように起こすと、足腰がぎしぎし言う。どれだけ負担の掛かる体勢であっても、その時は案外と夢中で気がつかないものだ。

ガウンを羽織って、バスルームでもう一度シャワーを浴びた。何ヶ所かに、薄っすらとキスマークが残っている。指が触れると、肌が粒立つ。その感覚から逃れるように乱暴に手で撫で、バスルームを出た。クローゼットから毛布を出し、ジェフに掛け、脱ぎ捨てられた衣服を簡単に畳んで傍に置いた。ソファの近くにしゃがみ込み、ジェフの顔を覗き込む。

(全く。子供みたいな顔して寝てやがる…)

と、ジェフが寝返りを打ち、エディの上に転がり落ちる。

「痛っ」

「あ？クリス…今、何時だ？」

エディは、全身の力を込めて、ジェフの体を撥ね退け、時計を見た。

「今、11時過ぎ。言っとくけど、俺はクリスじゃない」声には、抑揚がなくなっていた。

「え…？」

言うが早いか、ジェフが慌てて飛び起きた。エディの顔を見るなり、顔を逸らす。

「ジェフ。あんた、さっきも俺がクリスだと思ってたのか？」

そうじゃないのは分かっている。ちゃんとジェフは、エディの名を呼んだのだから。

「いや、違う。分かってたよ、お前だって」

「じゃあ、今更どの面下げてここに来たんだよ。あんた、今はクリスのオトコだろ？あいつが相手してくれなくなったとでも言うつもりか？あいつが駄目だったら、俺ならやらせてくれるだろうって。」

「違う。そうじゃない。…いや、そうなのかも知れないな」

「俺は、あんたの性欲処理機械じゃない」

(そんな事を言いたいんじゃない。本当は嬉しかったくせに)



「分かってる」

「じゃあ、なんだよ」

「コリーが…」

また、あの男だ。まさか、自分の事を聞いてやしないか、と不安がよぎる。

「あのクリスのそっくりさんだろ？奴がどうかしたのかよ」

「俺がいる前でも、クリスはあの男といちゃつきやがる。怒ったところで、『あいつとは火遊び程度だから妬くな』で終わりだ。で、あいつのディックを可愛がったその手で、あいつは俺のディックを可愛がるんだ（で、そのクリスに突っ込んだディックを俺に突っ込んだんだろ…）

「で、俺にどうして欲しいんだよ」

「分からない」

「じゃあ、何しにここに来た!？」エディは拳をテーブルに叩き付けた。グラスが跳ね、床に転げて割れる。ジェフは相変わらずエディと目を合わせようとしめない。

「酔っ払って、愚痴を言いか？それとも最近クリスに相手にして貰えないからって、てめえのディックを慰めて貰いか？」

「違う、違うんだ」

「何が違うんだよ？」

「そういうつもりじゃなかった…」

「じゃあ、どういうつもりなんだよ」

「ただ、やりきれなくて、お前の所しか思い浮かばなかったんだ…」

（そう。そうやって、俺の所に逃げ込んで来たんだ。でも、また出て行くんだろ？）

「結局、そういう事だろう？」

「済まない…」

「Fuck You(くそつたれ)！」

「エディ…」

「出てってくれ」

「エディ、済まない」

「早く、さっさと服着て出てけよ」

エディが立ち上がると、ジェフもしょうがなく立ち上がり、服を着始める。足元を見ずに立ち上がったせいで、先刻割れたグラスの破片が足の裏に刺さる。ジェフが着替えている間に拾い集めてテーブルに載せた。気配で、ジェフがまだ背後に立っているのが分かる。

「まだ、いるのかよ。早く出てけよ」

「済まなかった。けど、なんでお前も俺だと分かってて、追い返さなかったんだ？」

「早く出てけよ、Fuckin' dick head(くそつたれ野郎)!! Get Fuck out of here(さっさと出てけ)!!」

もう一度、テーブルを殴る。背後で、遠ざかる足音と、ドアの閉まる音が聞こえた。

（今度こそ、本当に終りだな…でも、言うべき事はちゃんと言えたじゃないか。褒めてやるよ、エディ・ジャクソンさんよ）

「なんだよ、今度は女か？」

ソファの上で寛いでいるコリーがクリスに訊ねる。クリスが確認している留守番電話のメッセージの音が漏れていた。

「『彼女』だよ。放ったらかしにしすぎるのもよくないな。愚痴が入ってた。もうそろそろ終らせようと思ってただけだね。逆上して押しかけられても困る。ま、それはジェフも同じだけどね。」

苦笑しながらも、クリスの顔は、どこか楽しげだった。登録してある短縮ダイヤルを押し、メッセージを録音した。

「ジェフ。彼女の事、少しは構った方が良さそうだ。俺も、もう少しは構ってやる事にするよ」

「こないだ、ふてくされてたな。で、俺の事は構ってくれるのかな？」

にやにやと笑うコリーの傍に歩み寄り、彼の手にあるクアーズの缶を取り上げた。

「あんたが寝室に行く気があるんならね」

「面倒くさい」

コリーの手が、クリスの手首を掴んで引き寄せた。

(さて、どうやって幕を引こうか…ジェフは思うように動いてくれないだろう。エディ、あんたを巻き添えにしようか？あんたなら、俺の望みを叶えてくれそうだものな)

ソファに押し倒されながら、クリスは笑いをかみ殺していた。

ジェフの来訪から二日後の朝、バスが戻ってきた。彼女がもう少し早く戻っていたらどうなったろうか、とエディを見て微笑む彼女を見て思う。

「叔母さんの具合はどうなった？もう落ち着いたのかい？」

彼女の分と、自分にもう1杯、新しくコーヒーをセットする。バスはマフラーを解き、コートを脱いで、ダイニングの椅子の背もたれに掛けた。

「うん。心臓が、ちょっとね。でも血管のバイパス手術が上手くいって、意識も戻ったから…。従姉妹達もついてるからって」

今日はエディも休みだったので、彼女の帰りをこうして迎えられたが、もし出勤の日だったら、何も知らずに帰宅するとバスがいる状態だった。今日が休みで良かった、と思う。彼女がいない間にジェフとの情事があった事など、痕跡は無いのだが、後ろめたさと、羞恥心があった。彼女は、エディが男に抱かれて喜んでいたなどと知る由もなく、当然知られたくもない。アリスンに知られたくないのとは、違う意味で。

疲れて帰って来たであろう彼女の為に、ヴァニラを利かせたパン・プディングを用意し、オープンに入れた。コーヒーが入ったマグカップを2つ、テーブルに置く。小さく『ありがとう』と言った彼女は、珍しくエディの顔を見上げない。ただ、ぼうっと自分の足元を見ている。

「バス、元気ないみたいだけど。叔母さん、本当に大丈夫なのか？」

「エディ」バスが急にエディに真顔で向き直った。

「どうしたんだい？急に」

「あなたの方が疲れて見えるわ。最近、何か心配事でもあったんじゃない？あまり立ち入った事は聞くんもないけど…」

やはり、彼女は何でも見抜いてしまう。ジェフが来たのが、バスのいない時で本当に良かった。

「バスには隠せないな…ちょっと眠りが浅くて寝不足が続いててね。実際疲れてるのかも」

一部は事実で、一部は嘘だ。それも、彼女なら見抜いているかもしれない。

「後で、カモミールティーでも買ってくるわ。私も疲れちゃったし」

「カ？カモなんだって？」

「カモミール」バスはこころと笑った。

「ハーブよ。薬じゃないわ。リラックスさせる効果があるって言われてるの。私もあまり薬は好きじゃないわ。特に睡眠薬はね」

(あの女優さんにも、これが必要なんじゃないだろうか)

睡眠薬、と聞いて、一瞬どきりとする。クリスに盛られたのも、恐らく超短時間型の睡眠薬だった筈だ。ベスに全てを話してしまいたい衝動がこみ上げる。話したところで、何の解決にもならない。しかし…ちょうどプディングがいい頃合いに焼けたので、ミトンで掴んでベスの前に出す。

「まずは腹ごしらえしなよ。少しゆっくりして、それから一緒に買い物でも行こう」

甘い香りを湯気と共に立ち上らせる皿を目の前に、ベスが表情が綻んだ。

触る事も出来ないほど熱い皿にスプーンを差込み、一口分を掬って冷ましているベスは、まるでティーンエイジャーの少女のようだった。以前は気弱げに見えた表情も、最近では堂々として見える。かといって、エディに対して独占欲をあからさまにしたりする事もない。女は、こんなにも変われるのか、とエディは思う。それが自分という存在の影響だとは、到底思えなかった。

この生活が続けば、彼女は「その先」を考えるようになるだろう。それを受け入れてしまえば、次に来るのは「家庭」。そんなものを自分が持つのは許されない。なにより彼女を騙し、自分を騙して、この生活を続ける訳にはいかない。どこかで、終止符を打つべきだろう。けれど、それは、彼女を悲しませる事にならないのか？エディは、頬杖をついて、目の前のベスの姿を見つめた。

「やだ。急にそんな見られたら恥ずかしいじゃない。私の顔、何かおかしい？」

久しぶりに、はにかむ彼女の顔を見た気がした。

「美味しそうに食べてくれるからさ。作り甲斐があるよ、こんな簡単なものでも」ベスに笑顔を向ける。

そうだ、彼女に対する愛情がない訳ではないのだ。ただし、それは「家族的」な愛情だ。残念ながら、それは彼女が求めているものではない。

(そう。これは欺瞞だ。彼女に対しても、俺自身にも)

彼女を悲しませたくはない。けれど、このままの生活は、嘘の上塗りのようなものだ。女達のいう、『男って…』と言われる、逃避を上手くやり過ごす方法が、見つからない。フレンチ・リーブ(徐々に相手から距離を置き、自然消滅させる別れ方)も出来ない。いっそ全てを話して、壊してしまったらどうなるだろう。

出来もしない事を考えてみる。エディの目は、ベスの方を向きながらも、彼女を見てはいなかった。

エディの予想は的中した。

彼女の使いに葉を手渡して僅か 10 日後、封筒に入った彼女からの伝言が届けられた。

『今夜か明日の夜、7 時にこの前の店で』

メッセージの下には、滞在先と思われるホテルの電話番号が書かれている。昼休みに電話を入れたが、あいにく留守だった。今夜が都合が良い旨をオペレーターに伝言する。今日も明日も早出なので問題はなかったが、嫌な事は早いうちに済ませるに限る。あとは、今日同じく出勤しているバスに伝えること。彼女が休みでなければ、ほぼ毎日エディのアパートに 2 人で戻る。既に 3 月。最後にジェフがエディの部屋を訪れてから、一週間。何事もなく過ぎていく日々。ただ、バスへの罪悪感に苛まれてさえいなければ。

男女の仲なのだから、当然セックスもする。しかし、女相手で、そうしょっちゅう出来るほどエディも器用ではない。何もせず、ただベッドの中で彼女を抱きしめて眠る日が多かった。恐らくは、エディが淡泊なだけだと彼女は感じているだろう。これで結婚してようものなら、セックスレスを理由に、離婚と共に慰謝料を取られる所だ。

バスには、用事で少し遅くなる旨を伝え、メリッサの指定したラ・パルマへ向かった。

店に入ると、先日の老オーナーが黙ってエディを奥の席へと案内した。彼女はいた。夕暮れ時に、屋内だというのに濃い色のサングラスをかけて。化粧も気のせい、以前会った時より更に濃いように思われた。「悪いわね。急に呼び出したりして」

「いえ」

エディが席につくと、すぐにオーナーがワインを注ぎにきた。彼が立ち去るのを確認してから、メリッサが口を開いた。

「もう無くなってしまったのよ。次回から、もう少し量を増やせない？」

「容量は守ってくれるよう言った筈ですよ」

「でも出せるんでしょう？今度、新しい映画のオーディションがあるのよ。それまでに、なんとかしたいの。お願い」

メリッサの表情はたとえ目元が隠れていても、焦燥感が浮かんでいるのが見て取れる。

リタリンはアンフェタミンとよく似た効果を持つ。またその依存度も効果と同じく高く、ジャンキーのようになっている者もいる、と聞いた。

「あなたは、普通の幸せが欲しかったんじゃないんですか？」

「それは、それよ。まだ事務所との契約もあるわ。すぐに引退できるものじゃないわ。第一、クリスが婚約に賛成するかどうか分からない」

それは、まずあり得ないだろう。それを知ったら、彼女はどうするだろう？

「お願い」

「俺は精神科医じゃありませんよ。そんな事、判断出来ない」

「だめよ。あなたは、私の言う事をきかなくちゃ」

急にきっぱりというメリッサに、戸惑った。

「どういう意味です？」

バッグを探ったメリッサの手が、白い封筒を探し当て、テーブル越しにエディに差し出した。封はされて

いない。少し硬い紙状のものが入っていた。封筒から出しかけて、エディの手は止まった。

「これは、誰から…？」

まさしく『あの時』の写真だった。封筒を持った手に思わず力が入り、握りつぶしそうになる。エディのところにはポラロイドしかなかったが、少し違うアングルのポラロイドと、もう2枚、ネガから現像したものが入っていた。

「マークの言ってた事、当たりなんでしょう？だから、お願い出来るわよね？」

「恐喝ですか？」

「なんと取ってくださっても結構」

(クリス、お前がまたさせてる事だろう)

「俺は、薬自体好きじゃないんです。」

「ねえ、お願い出来るわよね」

頭の中で悪魔が囁く。この女が、この行き詰った状態を壊してくれるのではないかと。せめて、クリスに一矢報いる事だけでも出来ればめっけものではないか？

(俺の知った事じゃないさ。どうせ、犯罪の片棒担がされてるんだ…)

「その前に、俺はあなたに言っておかないといけない事があります」

「何かしら？」

「俺だけじゃないって事です」

「どういう意味？」メリッサが姿勢を正して向き直った。

「俺は…俺はジェフをクリスに寝取られたんですよ」

メリッサは動かない。まるで塑像のようだ。

「今は？」

「だから言ったでしょう。今も、ですよ」エディは自分が予想外に冷静なのに、笑いだしそうになる。

「ジェフの家はどこ？」

「同じコンドミニアムですよ。一つ上の階」

「部屋の番号は？」

「1402」

「薬は遣いをやらせるから渡しておいて」

メリッサの声は、かすかに上擦っていた。エディの方は見ずに立ち上がり、そのまま出て行った。残されたのは、手もつけられていないワイングラスと、封筒に入った写真だけだった。

(クリス。あんたの望みはこれだったのか？俺に出来る事はやった。あとは…好きにしるよ。俺は疲れた)

エディはテーブルの上の封筒を掴み、立ち上がった。

情事後の気倦さが部屋を支配していた。

久しぶりに、クリスの方からジェフの部屋を訪れたので、数週間来のジェフの不機嫌もすっかり直ったようだ。恐らくクリスの為に用意されていたのだろう、プロセッコを出して来て、ベッドまで運んで来てくれるサービスまでついて来た。あまり発泡ワインは好まないのだが、無粋なウイスキーやスピリッツを飲まされる事を思えば、十分だった。

ふいに、寛いだ時間を邪魔するブザーが鳴り、静寂を破った。軽く舌打ちしたジェフがベッドから立ち上がり、ガウンを羽織って寝室を出て行った。あんなもの、無視すればいいのに、とクリスは思いつつ、グラスを空ける。

「ちょっと、メリッサ、待てよ。ま…」ジェフの慌てふためいた声と共に、荒々しい足音が聞こえ、何度かドアを開ける音が聞こえてきた。

(そうか。突き止めたか)

クリスも立ち上がり、床に落ちたバスローブを羽織った。足音は近づき、寝室のドアが勢い良く開けられ、メリッサ、ついでジェフが入ってきた。

メリッサは、バスローブ姿でベッド脇に佇むクリスを見て、目を見開いた。

「ドアマンの彼は、覚えててくれたわよ。ドクター・デガーマンのガールフレンドとしてね。『驚かせたいから、あなたには知らせないで』ってチップをはずんだら、そのまま通してくれたわ。先にあなたの部屋に行っても何も反応がなかったから、もしや、と思ってこっちに来たんだけど…もう少し早かったら、『お楽しみ』の最中を邪魔できたのにね」

歪んだ笑いを浮かべたメリッサはまずクリスを、次にジェフを見て、クラッチバッグの中から鉛色に鈍く光る物を取り出した。

「メリッサ、待て。落ち着くんだ！」

メリッサの前に回りこんだジェフが、両手を広げて彼女の前に立ちふさがった。

「何よ…あんた達、グルだったんでしょ？エディに聞いたわ」

(そうか、エディ。やはり、あんたが幕を引いてくれるんだな)

「あんた達…絶対許さない。この薄汚いおかま野郎！」

メリッサに握られた22口径が発砲され、立ち塞がっていたジェフの左腕を貫いた。クリスはベッド脇を離れ、ジェフの傍に近づこうとした。

「何やってんだ、逃げろ、クリス！」腕を押さえながら、肩でクリスの体を押しやろうとする。

(自分の命も危ないっていうのに、この期に及んで身を呈して庇おうっていうのか？このお人好しは…)

「ジェフ…」

「あんた達、2人共地獄へ落ちればいい！」

ジェフがクリスを突き飛ばすと同時に、彼の体もクリスの方に倒れて来た。放たれた弾はベッドの脇のスタンドを跳ね上げた。

「こっちへ！」

クリスはジェフに腕を掴まれ、一緒に立ち上がった。と次の弾はクリスの脛を撃ちぬいたようだ。焼けるような痛み、クリスは顔を顰めた。流れる血がグレーのラグを赤銅色に染めていく。

バスルームのドアが開けられ、ジェフに無理やり押し込まれると、再び銃声がした。

「ジェフ！」

ジェフの右脇下辺りから出血していた。

「待ちなさいよ…許さないわよ…」

メリッサはゆっくりと近づいてくる。どう見ても、正常な精神状態の人間ではないな、とこんな時に冷静に考えている自分に、クリスは心の中で笑った。

「早く、…バスタブの中に…」

もう一度ジェフに突き飛ばされ、頭からバスタブの中へ転がり込んだ。と、更に銃声がし、ジェフの体が跳ね上がる。

バスルームの窓の外から、クラクションに混じって、サイレンが聞こえてきた。ここへ向かってきているのか、別の件で来ているのかは、分からない。アップタウンの端とは言え、ここはマンハッタンなのだから。

ジェフの体が便座に倒れこみ、更に銃声がして、洗面台のアフターシェイブローションの瓶が床に落ち

た。彼の愛用しているフレグランスと同じ香りが、バスルームに広がった。

弾倉が空になっても引き金を引き続ける音と、メリッサの悪態をつく声が聞こえる。バスルームの床は、みるみる赤く染められていく。止血を…と思うが、脚の痛みで、上手く立ち上がれない。ジェフの体が、何度かひきつけを起こしたように震えた。

(なんで、俺じゃないんだ？あんたは逃げれば良かったのに)

みっともないとしか言い様のない格好で、バスタブに横たわったクリスは笑っていた。温かい液体が頬を伝い、冷たい顎先へと流れる。

「すまない、エディ」

そこにいない知己に向けて、クリスは呟いた。

目が覚めると、最近になってベスが持ち込んだテレビの音が聞こえて来た。ベスは早番だが、エディは昼前からの出勤だ。もう少し寝ていたい気分だったが、恐らく彼女が朝食を用意してくれているだろう。そろそろ起きた方がいいかも知れない。ベッドの中で、両腕を伸ばして伸びをした所で、ベスが室内履きのペタペタという足音を立てて寝室に入って来た。

「エディ、起きて！」

「ああ、起きるよ、すぐに」

「そういう事じゃないの！早く！ドクター、いえ、ジェフとクリスが…！」

エディは2人の名前を聞いて飛び起きた。トランクス1枚の上にガウンを羽織り、リビングに転がり込むように飛び込む。

居間に置かれたテレビでは、ちょうどファスナーで閉じられた、青い大きな袋が運び出される所が写っていた。背景は、まさしく見慣れたコンドミニアムの入り口だった。アナウンサーは冷静な口調で、ジェフが死んだ事、クリスも重傷で運ばれた事、メリッサによる犯行である旨を伝えている。

体中の力が抜け、そのままカーペットの上に座り込む。ベスが背後に寄り添い、エディの肩を抱いて、母親のように優しく撫でる。その手を振り払い、エディはバスルームに飛び込んだ。何が起きたのか分かっているのに、分からない。いや、分かりたくない。

電話のベルが微かに聞こえる。誰からかは分かっている。今、一番出たくない相手だ。

「エディ！スコットから」

「いない、俺はいないんだ！」

「エディ、でも…」ここで、バスルームのドアを開けようとしないう所が彼女の良い所なのだ。だが。

「いいから、いないって言ってくれよ！」

「スコットに聞こえてるわ！」

「構うもんか！」便座に座り込み、タンクを殴りつける。

(なんでジェフだったんだ？クリス、お前か？いや。そんな筈ないな。どうせ、ジェフがしくじったんだろ？)

これは、やはり自分に素直にならなかった罰なのか？黒い羊が、自分を偽って人並みの幸福を得ようと試した事が悪かったのか？

神話にあるマイダス王のようだ。手に触れるもの全てを黄金に変える手を持って、愛する妻に触れてしまった。みんな何もかもなくなってしまうといいと一度は願った。クリスが破滅を望むなら、その手伝いをしてやろう、とも。だが、なぜジェフだったんだ？

「エディ？私、仕事行くわ。もし…もし休むなら、伝えておくけど、どうする？」

「ありがとう。休ませてもらう。言っといてくれないか」まだ、ドア越しの会話。

「分かったわ」

「それと、ベス」

「何？」

「さっきはすまなかった。怒鳴ったりして」

「気にしないで」

カーペットを摩擦するかのような足音が遠ざかっていった。たった今、全ての物事が動き出したかのように、外の音が聞こえ始めた。子供達が学校へ向かうのに騒ぐ声、しかめっ面の大人が出勤するために乗り込んだ車のバックファイアの音とクラクション。いつもと変わらない、朝のノイズ。けれど、この狭い空間から出て行ってしまえば、昨日の朝とは違う朝が始まる。まだ認めたくないジェフの死が、真実になってしまう。

座り込んだまま、エディは頭を抱えた。嗚咽が、小刻みに体を震えさせた。

どのくらいの時間が経過したのか。体を動かそうとすると、ぎしぎしと音をたてそうだった。立ち上がり、身に着けたものを脱ぎ捨て、火傷しそうに熱い湯を出し、シャワーを浴びる。頭から浴びてずぶ濡れになりながら、口の中には、しょっぱいものまで入って来た。涙がどのくらい流れているのか。湯を被っている間は分からない。

小さな窓には、既に西に傾いた太陽が、光線の色を変えて差し込んでいた。このままアパートにいれば、ベスが帰ってくる。細かに言及される事はなくても、エディが本当の事を口走らないでいる自信がなかった。

髪もドライヤーはかけたものの、生乾きのまま服を着た。今は、顔見知り以上には会いたくない。ティーシャツの上からコーデュロイのシャツを引っ掛け、ボタンを留めようとした所で電話が鳴った。朝と同じくスコットか、さもなければ、マイケルか。いずれにしても、誰とも話したくない。ベスが留守番電話に切り替えるのを忘れていったらしく――もしかしたら、わざとかもしれないが――ベルは執拗に鳴り続ける。エディは電話のコネクタを抜いた。静かになった電話機に目をやり、昨日も着ていたレザージャケットを手に部屋を出た。

まだまだ外は明るい。どこかに飲みに入るにも早過ぎる時間だったが、宛ても無くなく、北へ歩いた。ちょうど『Joy Stick』の看板が目に入る。ライトは点けていないが、ドアも開いている。ブラックボードも出ているのだから、ネイサンは出て来ているのだろう。駄目もとで、階段を降り、ドアを開けた。

「エディ！」すぐにネイサンに声を掛けられた。エディが目を合わせただけで何も言わないのは、今朝のニュースを知っているのか？いや、ジェフとは一度か二度来ただけだ。ベスと来た回数の方が遥かに多い。覚えているとは思えなかった。

「早過ぎて悪いね。飲ませてくれよ」

ネイサンは何も答えず、コースターをエディの目の前に滑らせた。

「ロンリコ 151。ショットで」

「タンカレーじゃないのか？」

「今日はね。とっとと酔いたいんだ」

目の前に、ショットグラスに入った淡い琥珀色の液体と、チェイサーが置かれる。エディは水の存在は無視して、少しとろみを帯びたようなラムを、一気に流し込む。高い度数のアルコールが、喉から胸元まで



を焼き尽くすように流れていく。

「おい、無茶な飲み方やめとけよ」

エディは無言でグラスを差し出した。小さく溜め息をついたネイサンがグラスにまた注ぐ。が、すぐにそれも空になる。

「エディ！」

「怒るなよ、ネイサン。商売だろ？客が焼け酒飲みたがってるのぐらい、大目にしろよ」

「分かってるよ。ただ、俺は酒が気の毒に思うだけだよ。旨い酒には敬意を表すべきだ」

「そう言われれば、返す言葉はないね」乾いた笑いが出た。ネイサンらしい止め方だ。それでも、もう一度注いでくれる。

「これで最後だ。その飲み方は酒に失礼だからな。嫌なら、出てけ。この1杯は味わって飲めよ」

「分かったよ」

恐らく、粘ったところで、彼はこれ以上は注いでくれないだろう。今度はゆっくりと一口、口に含んだ。強いアルコールが舌を焼くように感じさせるが、まろやかな甘さのようなものが後に残る。それでもチェイサーには手をつけず、数回に分けてグラスを空けた。

「酒は楽しく飲むもんだ。俺は、酒やら薬やらに逃げて、拳句に持ち崩した仲間を腐る程見てる。エディ、それは、お前さんも知ってるだろ？だから、あまり今日は飲ませたくないね」

知っている。軍から離れた帰還兵の仲間の事だろう。それだけで、止めているのではない事も。

「また楽しく飲める日に改めて来るよ」カウンターに札を置き、立ち上がった。多少は酔っ払っている筈だが、足元もふらつかない。何より、酒を飲んだ時の高揚感もない。あるのは、まだ残る、酒が喉を焼いた感覚だけだった。

「またベスと一緒に来いよ！」

真の事情は全く預かり知らぬネイサンに手を振り、階段を上った。

外はまだ明るかった。少しだけラベンダー色に変わった空に、薄ぼんやりと光る月が見える。そのまま、今度は西へ歩き出す。このまま北へ歩けば、ベスに会ってしまうかもしれない。ハドソン川に向かって歩き出すが、急に吐き気が襲った。喉を焼くアルコールと酸と一緒に込み上げる。エディは路地を見つけて、排水溝に吐き出した。飲んだ酒と胃液、液体しか出てこない。昨日の夕食以来、何も食べていないのだから、当たり前だろう。

全てを吐き出してしまおうと、少し空腹を感じた。まだ焼け酒を飲むにしても、少し位は何か胃におさめておいた方がいいだろう。春は目の前とは言え、まだまだ寒い。温かいコーヒーも飲みたかった。すぐ目の前にカフェがあるのを見つけ、空席を確認して店に入った。シュガーレイズのドーナツという気分にはなれず、ベーグルとクリームチーズのサンドイッチとコーヒーを頼んだ。何も考えず、空席があったので座ったのだが、ちょうどエディが顔を上げた先に1人の男が座っていた。手にしたヴィレッジヴォイスのせいで面相までは見えない。エディよりも少し明るい位のブルネットだ。

コーヒーとベーグルが運ばれて来たので、視線をテーブルに戻した。コーヒーに口をつけ、ベーグルを皿から取って顔を上げた時、息が止まりそうになった

(ジェフ…?)

ブルネットに、人を射抜くかの様な強い視線。アイスブルーの瞳。肩幅はさほどでもないが、身に付けている服の上からでも分かる、隆起した上腕の筋肉。思わず目を見張り、その男をまじまじと見てしまい、慌てて視線を下げた。

(ジェフはもういない。いる訳がない。本当に、いなくなってしまった)

さっきまでの食欲が、急激に失せていった。二口ほどかじったベーグルと半分も飲んでいないコーヒー

を置き去りに、勘定をテーブルに置いて、エディは席を立った。

店を出て1分もしないうちに、エディは後ろから肩を叩かれた。振り返ると、さっきの男が立っていた。人の良さそうな笑みを浮かべると、ジェフとは背格好は似ていても、顔立ちは全く似ていなかった。

「さっきのカフェで、俺の事見てたろ？口説いていって事かな？」

思えばクリストファー・ストリートは目と鼻の先だった。数ヶ月前に来た時、ジェフは自分の事は棚に上げて拗ねていたっけ。顔が泣き笑いになりそうになるのを堪え、男に笑顔を向けた。

「昔の彼氏に似てるって思ったんだよ」

「そりゃまた陳腐な口説き文句だな。俺はこれでも脚本家なんだぜ。未来の、だけど」

声も全く似ていない。無意識にジェフと比べている自分に、苦笑が漏れる。

「てのは冗談。いや、脚本は本当に書いてるんだけど…時間があるなら、付き合わないか？この後。ちょうど前のパートナーに振られたところなんだよな。いや、あんたが嫌ならいいけど、誰でもいいって訳じゃなくて、その、見かけて気に入ったからなんだけど」

「俺も、最近別れたところだよ。H I Vも陰性。仕事が病院の薬を扱ってるから、そういう事は欠かした事はない」

エディの言葉に、相手は不安気な表情を笑顔に変える。

「俺もだよ。なんなら。検査の結果を見せてもいい。昨日届いたばかりなんだ。俺はジェレミー。ジェレミー・マクナット。口の悪い友人からはトンマなアイルランド人って（マクとつくのは、アイリッシュ系に多く、ナットはスペル違いで、バカ、とんまの意味）言われてる」

「俺はエディ。エディ・ジャクソン。どこか飲みに行く？」

「もし、あんたがいやじゃないなら、どこか落ち着ける所に行きたいな」

ジェレミーの腕がエディの腰に回った。「いいよ、どこにする？」

結局、近くのモーテルに入った。始めに話した以上、特に言葉は交わさず、どちらともなく抱き合い、共にシャワーを浴びた。

はじめにジェフに似ている、と思ったのは、エディの願望が見せた錯覚に過ぎないようだった。実際のジェレミーはその屈強そうに見える体格とは裏腹に、笑うと人の良さが透けて見えた。

ベッドに入ってから、その印象は変わる事はなかった。互いの存在を確かめ合うように抱き合い、お互いが優しく相手の体に触れる。初めて肌を合わせる相手だけに、どこが相手を喜ばせるのかは分からない。探り合うように、互いに相手の反応を確認しながら、ゆっくりと体を交える。が、最後には音を上げたのはエディの方だった。自分のポイントを執拗に攻められ、息が上がる。思わず漏れた声と共に体が跳ね上がるのを、ジェレミーの腕に絡め取られる。その背中にしがみつくと腕を回すと、彼の体の重みが直接感じられた。

「いいよ、エディ。今だけ俺の事、そいつだと思ってたらいい」

耳元で温かい声が響いた。お互いの欲求を満たし合う行為でありながら、荒々しさとは程遠いものだった。それでも、突き上げられると頭の中は真っ白になってしまう。ジェレミーの体に両脚を絡め、全身でしがみつくと。それに応えるように、ジェレミーの手がエディの頭をかき抱いた。

「ジェフっていう男、そんなに俺に似てた？」

隣で横たわるジェレミーの言葉にぎくりとした。「俺、何か口走ってた？」

ジェレミーは曖昧な笑顔を向けるだけで、何も答えない。恐らく、自覚なく口にしてしまったのだろう。  
「ジェレミー、今だけ司祭になったつもりで聞いてくれないか？」

「俺は信心深くないけどいいよ」

エディは深呼吸をして、仰向きになった。

「今朝のニュースでやってた…アッパーイーストに住んでる医者がソープオペラの女優に撃たれて死んだ  
る？1人は重傷で」

「なんか、あったな。そういえば」

「ジェフってのは、その死んだ方の医者の名前だよ」

ジェレミーの体が動いたのが視界の端で分かった。

「彼女、メリッサをそそのかしたのは俺だよ。こうなる可能性もあったのに…本当の事を彼女に話して  
しまった。彼を…ジェフを傷つけるつもりなんてなかった。ましてや死んで欲しいなんて思った事も…」

話し続けようとしたが、上手く言葉が出なかった。また嗚咽が込み上げる。不意に目の前が陰り、ジェ  
レミーの体が覆いかぶさって、エディの頭を抱え、子供をあやすように抱きしめた。

「ちゃん泣かないと、余計苦しいんだ。これだったら、泣いてる顔も隠せる。俺からも見えない。今だけだ。  
今だけは、ちゃんと泣いておけよ」

ジェレミーに抱きしめられるまま横を向き、彼の首筋に顔を伏せた。涙は後から後からあふれ出る。嗚  
咽を堪えるエディの髪を、ジェレミーはずっと優しく撫で続けていた。

朝食を一緒に、と誘うジェレミーの誘いをエディは固辞した。

「ハドソンに身投げなんて事はしでかさなから、心配ないよ」

瞼の腫れも、目の充血もひいた。連絡先を聞こうとするのをかわし、自分のアパート方面へ流している  
タクシーを止めて別れた。

予想していた事ではある。ドアを開けると、目を晴らしたバスが腕の中に飛び込み、途端に堰を切った  
ように泣き出した。

「エディ…」聞き覚えのある声が2人分。スコットとアネットの姿があった。アネットが掴んだ腕を振り払  
い、スコットは近づいてきて、エディのジャケットの襟元を掴んだ。

「お前な…」

「分かってるよ」

「ご丁寧に電話のコードまで抜いて行きやがって。彼女がどれだけ心配したと思ってるんだ」

スコットがこうして静かに言う時は、怒りが頂点に達している時だ、とエディは経験上知っている、  
「待ってくれ。まず、バスを休ませないと」

「いや。傍にいる」

子供のように、バスはエディのジャケットを掴んで離さない。

「大丈夫だよ。ここにいるから。スコットと話すから、奥で休むんだ。な？行こう」

バスの肩を抱き、寝室へ誘った。ベッドに入らせ、暫く手を握っていた。その間も、嫌だ、行かないで、

とうわ言のように呟いていたが、しばらくすると、泣きつかれた子供のように寝入ってしまった。両親を失った時の事を思い出させてしまったのかもしれない。

居間にもどったエディを迎えたのは、いきなりのスコットの拳だった。

「スコット！」もう一発殴ろうとするスコットの手首に、アネットがしがみついた。さすがに彼女を力づくで振り払おうとはしなかった。口の中に鉄の味が広がった。

「これだけで済んで、ありがたいて思えよ」

「分かってるよ」

「お前、彼女に…メリッサに何かしたか？それとも、何か言ったのか？」

エディは答えなかった。答えられる訳がない。立派な連邦法違反もあるのだから。

「あったって言わないだろうがな。ジェフが死んだ事で、お前がショックを受けてる事は分かってる。けど、ベスはどうするんだ？」

それも、答えられる類のものではなかった。

「だんまりか。まあ、しょうがない。まだ、ちゃんと考えられる頭じゃないだろうからな。」

「帰ってくれないか、スコット」

「お前…」

「スコット！エディの気持ちも考えてあげて！」

「アニー、助かるよ」

「ほら、ダーリン！」

アネットに止められ、スコットは渋々諦めてくれた。

「すまないな」

上着を掴んだスコットはドアの傍まで行き、振り返ってもう一度エディを見た。

「ちゃんと考えろよ」

最後に一言残し、二人は帰って行った。部屋の中が急に静まり返る。まだ、街が動き出すには早い時間だった。

(ちゃんと考えろよ、か…)

考えてないでもなかったが、スコットにまだ伝える気がしなかったのだ。電話の傍まで、ゆっくりと歩み寄った。

受話器を上げ、911を押す。

「ミッドタウン・サウス署の殺人課に繋いでくれないかな？」

## ‡ Epiroque ‡

結果的に殺人を犯したメリッサは勿論の事、彼女に対して違法に薬物の違法供給をしたと自ら申し出たエディ以外にも、警察の厄介になる者はいた。

メリッサのエージェント、マークである。

彼女に渡した未登録の拳銃が今回の事件に使用された事で、彼は拳銃の不法所持により拘置所に収監された。そこでマークは、銃の入手元と、そのネットワークを話すと司法取引を持ち掛け、さらに負けを覚悟で賭けに出た。クリス・デガーマーに対し、メリッサの気持ちを弄んだとして、弁護士を通じて民事訴訟を起こす準備がある、と通告したのだ。

物的証拠も少なく、正確性に欠ける関係者の証言すら、あまり期待出来ない状況では、相手側の弁護士の力量(これは、自身の雇った弁護士から聞いた)から言っても、本来到底勝ち目はなかったのだが。

しかしマークの読みは当たり、これ以上問題を大きくしたくないデガーマー家は、顧問弁護士を通じて、示談金による和解の申し入れをしてきた。自身の弁護士からそれを知らされたマークは、申し出を快諾。示談金をたんまりとふんだくった。そこから自身と、そしてメリッサからの依頼により、エディの保釈金を支払い、晴れて自由の身となった。

当然ながら、メリッサは何らかの刑は免れないようだった。恐らく裁判の日には、弁護士は彼女に白い襟のついた清楚なワンピースかシックなスーツでも着せるだろう。陪審員に、『爛れた関係のエリート医師2人に弄ばれた、気の毒な清純派女優』の印象を与える為に。

『エディ。保釈金は、あたしとメリッサからのお詫びだと思って頂戴。あんたを巻き込んで、あんたが好きだった男を殺しちまった事へのね』

彼女は、エディの真意を知っていたのだろうか？今となっては、知る由もない。知った所で、何の救いにもならない。

正確な事情も理解しないまま保釈され、ポーカフェイスで以てマークを見るエディに、オカマのエージェントは優しく笑った。

『本当は、あんたの恋人だったんでしょ？死んだ、あのドクターは』

マークの問いに、エディは曖昧に笑みを返すのみで、返答の代わりとした。

『保釈金の出所は、あたしやメリッサじゃないのよ。実は、ドクター・デガーマーの実家からなの。よくうちの女優を弄んでくれた、訴えてやるって言ったら、たんまり示談金支払ってくれたわ。どうせ、ドクター・テイトを誘惑したのも、彼の仕業だろうし。』

マークは、口の端を歪めて笑った。

『別に、あんたの仇を取った訳じゃないから、気にしないで頂戴』

マークは、次のスターを探す前に、休暇と称して故郷のロンドンに帰って行った。

そうしてアイスクリームの屋台が姿を消し、セントラル・パークが枯れ葉色に染まり、雪化粧をし、ミッドタウンを走り抜けるタクシーが泥水を跳ね上げ、事件から1年が過ぎた。

検死の結果、『複数の動脈が受けた銃創による失血死』と判断されたジェフは、故郷シアトルの6フィート下の土の中で眠りについていた。

傷の癒えたクリスは、実家の伝手で中西部の都市にある病院に赴任した。(婚約は、勿論解消された)

マイケルは一児の父となり、次の冬には、二児の父となる。

スコットは、アネットとの長い春に終止符を打ち、先日ボラボラ島へハネムーンに旅立った。

そしてエディは、グリニッジヴィレッジのバーにいた。カウンターの内側に。

「ダーリン、今夜は早く帰れるんだろ？起きて待ってるから」

夜遊びにはまだ時間も早く、人もまばらな店内で、黒に近い褐色の髪の男が、アイス・ブルーの目を細め、カウンター内のエディに微笑みかける。

「ああ、いつもよりはね。明日は、あんたの誕生日なんだからさ。けど、明け方には違いないんだから、腹が減ったらサラダと冷蔵庫に豆のブリトーが残ってるから、そのままオープンへ…」

エディが言い終えるのを待たずして、先の男がエディの首を引き寄せて唇をかさねた。ほんの1.2秒、舌こそ絡めていないが、恋人同士の物と充分に分かるキスを交わす。

「Hi, Sis.(お嬢さん)。ここは女性は…」

入り口の方で、店長が『招かれざる客』らしい人物を制止しているようだった。

「分かってるわ。知り合いが働いてるって聞いて、会いに来ただけよ」

懐かしい声がした。

砂色の髪をした、長身の店長の手を軽く払い、入って来たのは、小柄な女性の姿だった。

「エディ…」

彼女——ベスはエディの名を呼び、立ち止まる。

エディは、自分にキスをした男の頬に軽くキスをし笑顔で送り出す。「ジェレミー、じゃあ後で」ジェレミーと呼ばれた男が去る姿を見届けてから、ベスはエディの前のカウンターに座った。

「Don、悪いな。彼女、俺の知り合いなんだ」

エディが、店長に手を上げて合図を送る。

端正な顔立ちの店長は、何か合点があったように青灰色の目を軽く細めて、席を外した。

「なんにする？」

「ベイリーズ。ロックで」

「女の子っぽいな。そんなのも飲むんだ」

とろみを帯びた液体を安物のロックグラスに注ぎ、ベスの前の紙コースターに置く。しかし、まだ彼女の顔を直視出来なかった。

「たまにはね」

キャラメル色の酒を軽く口に含んだベスは、最後に会った時——拘置所の面会の時よりは、ふっくらしている。いや、元に戻っただけだろう。あの時は、限界までやつれていたのだから。

「久しぶりだね」

「久しぶりね、本当に。髪、伸びたわね」

ベスが笑う。

「切るのが面倒だね」エディは苦笑いと共に、胸元まで伸びた波打つ暗褐色の巻き毛に触れた。「撫で肩隠しさ。今も、ハリス&ディップルに？」

「いいえ。でも、またミッドタウンの薬局兼、医療品供給所にいるわ」

会話は、すぐに途切れてしまう。それでも、まだ目を合わせる事は出来ずにいた。彼女も、また。

「ここは、スコットに聞いた？」

「ええ、先月。会いに来る決心がやっとなつたから」

グラスを持ったベスの左手薬指に、金色の指輪が光っていた。

「そうか…」

「さっきの彼、あなたの恋人？」

ベスの問いは、ジェレミーの事を指していた。カウンター越しの遣り取りを見ていたのだろう。ジェフとの関係は、面会の際にも話していなかった。公選弁護士は守秘義務を守り、スコットは友情を優先した。話す決心がまだついていなかった、というのは、言い訳になるだろう。あの時はまだ、現実に対峙する事を避けていた。かと言って、この期に及んでも、素直に答えるのはエディには、まだ躊躇があった。が、それでも彼女に伝えるべき言葉がある。

「俺は…君には本当に悪い事をした」

「知ってたわ」

磨いていたグラスから、エディは顔を上げた。その先には、寂しげに笑うベスの顔があった。

「あなたが、私と一緒にいても、私を見てなかった事。そして、本当は誰を見てたのか。でも、認めたくなかったのね、きっと。あなたが誰をどう思っているよと、今は私の傍にいるんだから、って。ずっと自分にそう言い聞かせてたわ」

「すまなかった。ずっと、ずっと謝らないといけないと思っていた。事件の事は勿論の事、君の気持ちを分かってながら、騙していた。ジェフとの関係も…。本当なら、遅くとも面会に来てくれた時、話すべきだったと思う。でも、まだ決心がつかなかった。あそこを出てからも、話す機会は充分にあった筈なのに…。それほどに、俺は臆病で卑怯者だ」

ベスの目を見て、もう一度謝罪の言葉を口にする。しかし、ベスは否定するかのように、目を閉じて頭を振った。

「あなたは、自分に正直にならなかった事で、本当に愛する人を永遠に失ったわ。罰は、それで充分だと思わない？」

「ベス…」

「私も、怖がらずに真実に目を向けるべきだった。そうすれば、傷はもっと浅くて済んだ。お互いに、もっと正直になるべきだったわね」

今、目の前にいる彼女は、スコットを通じて、こっそりと気持ちを伝えて来た、内気な女性ではなかった。自分よりも遥かにマチュア(成熟した)な大人の女がそこにいた。

「ありがとう」エディは、真摯に感謝の言葉を足す。一言で伝えきれない想いが、声を微かに震わせ、低く響かせた。

「私、秋に結婚するの。」

ベスが、左手薬指の指輪をエディに向けた。

「招待状を送ったら、さっきの彼と、一緒に参列してくれるかしら？」目が悪戯っぽく笑っている。

「君は、その…他の友達は気にするんじゃないか？」

「N.Y.に住んでて、ゲイの友人が、あなただけだと思う？」

「じゃあ、俺達の時も、その教会は受けてくれるかな？」

エディは、ベスの発した『ゲイ』という言葉に、何も抵抗を感じる事なく、自分の左手を彼女に見せた。そこには、今年のエディの誕生日にジェレミーから贈られた、ペア・リングが銀色に鈍い光を放っていた。他人に見せた事はないが、内側には永遠の愛を誓う言葉が刻まれている。

ベスが吹き出した。「多分ね。その時は、私がブライド・メイドを連れて来たげるわ」

「おいおい、ブライド・メイドって…俺にウエディングドレス着せる気？」

「撫で肩で、ヒップラインが綺麗だから、オープンショルダーでマーメイド・ラインのドレスが似合いそうだわ。首が長いから、チョーカータイプのネックレスが合うわね」

「楽しそうに言うなよ、洒落にならない。勘弁してくれよ」

やっと、心からの笑顔を互いに向け合う。

「久しぶりに、あなたの作るテックス・メックス・スタイルの料理が食べたいわ。今度ダブル・デートしましょうよ。『あなた達の家』でね」

ウィンクするベスに、エディは苦笑し、手近なコースターに住所と電話番号を記して手渡した。そして、家族にするようにハグと暖かいキスをした。

悪夢は、もう見ない。幸福の扉を閉ざす事も。

エディの心の中で、新しいドアが微かに開いていた。

隙間からは、明るい光が差し込んでいた。

†            E   N   D            †



The Killing Words  
<http://p.booklog.jp/book/64275>

著者：セキトウ マイ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/akafujimai/profile>

感想はこちらのコメントへ  
<http://p.booklog.jp/book/64275>

ブックログ本棚へ入れる  
<http://booklog.jp/item/3/64275>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ